

小垣外・八幡面遺跡

一般国道153号飯田バイパス(1工区)

用地内埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

1988

建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所
飯 田 市 教 育 委 員 会

小垣外・八幡面遺跡

一般国道153号飯田バイパス(1工区)

用地内埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

1988

建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所
飯 田 市 教 育 委 員 会

例　　言

1. 本報告書は一般国道153号飯田バイパス第1工区建設に伴う緊急発掘調査報告書で、昭和61年度に刊行した第1冊「殿原遺跡」に続く第2冊目である。本書には小垣外遺跡・八幡面遺跡の調査結果を掲載した。
2. 発掘調査は飯田市教育委員会が建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所より委託を受け実施したものである。
3. 発掘調査は昭和60年5月から昭和60年8月に実施し、整理作業及び報告書の作成は昭和62年度に実施した。
4. 本調査に関し、遺跡名に小垣外遺跡=K G B、八幡面遺跡=Y T Mの略号を用い、図面及び遺物について略号を記しており、本書においても適宜略号を用いた。
5. 本書の内容のうち、第1冊と重複する序文については省略し、経過及び遺跡の立地と環境について詳述せずに簡略して記述した部分もある。
6. 本報告書の記載については、小垣外遺跡・八幡面遺跡とで大別し、遺構単位での記述を原則とした。遺構図については本文中に挿図とし、遺物及び写真図版は文末に一括した。
7. 本報告書のうち、小垣外遺跡については昭和46年度に実施した中央自動車道西の宮線にかかる発掘調査により検出された小垣外・辻垣外遺跡の諸遺構に連続する番号を付して整理し、記述を行なった。
8. 本報告書は、佐藤姓信、小林正春が分担して執筆し、その責は文末に記した。
9. 本報告書の作成にあたり、遺構図面類の整理、遺物実測及びトレイスは、佐々木嘉和・佐合英治・吉川豊・馬場保之・池田幸子・小林が行なった。
10. 本報告書の編集は調査団全体で協議の上小林が総括した。
11. 本報告書に関する遺物及び図面類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

目 次

例 言	
I 経 過	1
1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
(1) 小垣外遺跡の調査	1
(2) 八幡面遺跡の調査	2
3 調査組織	2
(1) 調査団	2
(2) 事務局	3
II 遺跡の立地と環境	4
1 自然環境	4
2 歴史的環境	6
III 調査結果	10
1 小垣外遺跡	10
(1) 壓穴住居址	10
① 23号住居址	10
② 24号住居址	14
③ 25号住居址	14
④ 26号住居址	17
⑤ 27号住居址	19
⑥ 28号住居址	21
⑦ 29号住居址	22
⑧ 30号住居址	22
(2) 土 坑	23
① 土坑112	23
② 土坑113	23
③ 土坑114	23
④ 土坑115	23
⑤ 土坑116	23
6 土坑117	25
7 土坑118	25
8 土坑119	25
9 土坑120	25
10 土坑121	25
11 土坑122	25
12 土坑123	25
13 土坑124	26
14 土坑125	26
15 土坑126	26
16 土坑127	26
17 土坑128	26
18 土坑129	26
19 土坑130	26
20 土坑131	26
21 土坑132	27
22 土坑133	27
23 土坑134	27
24 土坑135	27
25 土坑136	28
26 (3) ロームマウンド	28
27 ① ロームマウンド1	28
28 (4) 壓穴遺構	28
29 ① 壓穴遺構1	28
30 (5) 据立柱建物址	29
31 ① 据立柱建物址1	29
32 (6) 柱穴群	30
33 ① 柱穴群4	30

② 柱穴群 5	30	⑩ 12号住居址	43
③ 柱穴群 6	30	⑪ 13号住居址	43
④ 柱穴群 7	32	⑫ 14号住居址	44
(7) 溝 址	32	⑬ 15号住居址	44
① 溝址 1	32	⑭ 土 坑	45
(8) その他	35	① 土坑 1	45
① 遺構外出土遺物	35	③ 掘立柱建物址	46
2 八幡面遺跡	36	① 掘立柱建物址 1	46
(1) 穹穴住居址	37	(4) 杠 列	46
① 1号住居址	37	① 杠列 1	46
② 2号住居址	37	⑤ 溝 址	46
③ 3号住居址	38	① 溝址 1	46
④ 4号住居址	38	② 溝址 2	47
⑤ 5号住居址	39	③ 溝址 3	47
⑥ 6号住居址	40	(6) 暗渠排水	48
⑦ 7号住居址	40	① 暗渠排水 1	48
⑧ 8号住居址	41		
⑨ 9号住居址	41		
⑩ 10号住居址	42	IV まとめ	50
⑪ 11号住居址	42		

【挿図目次】

挿図 1 造跡の位置及び周辺遺跡図	5
挿図 2 調査位置及び周辺図	9
挿図 3 小垣外遺跡調査範囲及び造構分布図	11
挿図 4 小垣外遺跡23号住居址・土坑115	13
挿図 5 小垣外遺跡24号住居址	14
挿図 6 小垣外遺跡25号住居址	15
挿図 7 小垣外遺跡26号住居址	17
挿図 8 小垣外遺跡27号住居址	20
挿図 9 小垣外遺跡28号住居址	21
挿図10 小垣外遺跡29号住居址	22

挿図11	小垣外遺跡30号住居址	23
挿図12	小垣外遺跡土坑112~114・116・117・119~121・126・129・130~132	24
挿図13	小垣外遺跡土坑133~136・柱穴群7	27
挿図14	小垣外遺跡土坑118・ロームマウンド1	28
挿図15	小垣外遺跡ロームマウンド2・竪穴状造構1	29
挿図16	小垣外遺跡掘立柱建物址1・土坑125	29
挿図17	小垣外遺跡土坑122~124・柱穴群4	30
挿図18	小垣外遺跡柱穴群5	31
挿図19	小垣外遺跡柱穴群6	31
挿図20	小垣外遺跡溝址1	33
挿図21	八幡面遺跡調査範囲及び造構分布図	36
挿図22	八幡面遺跡1号住居址・溝址1	37
挿図23	八幡面遺跡2号住居址	37
挿図24	八幡面遺跡3号住居址	38
挿図25	八幡面遺跡4号住居址	38
挿図26	八幡面遺跡5・8号住居址	39
挿図27	八幡面遺跡6号住居址	40
挿図28	八幡面遺跡7号住居址	40
挿図29	八幡面遺跡9号住居址	41
挿図30	八幡面遺跡10号住居址	42
挿図31	八幡面遺跡11号住居址	42
挿図32	八幡面遺跡12号住居址	43
挿図33	八幡面遺跡13号住居址	44
挿図34	八幡面遺跡14号住居址	45
挿図35	八幡面遺跡15号住居址	45
挿図36	八幡面遺跡掘立柱建物址・杭列1	46
挿図37	八幡面遺跡溝址2・3	47
挿図38	八幡面遺跡暗渠排水1	49

【図 目 次】

第1図	小垣外遺跡23号住居址出土遺物	53
第2図	小垣外遺跡23・24・25号住居址出土遺物	54
第3図	小垣外遺跡25号住居址出土遺物	55
第4図	小垣外遺跡25号住居址出土遺物	56

第5図	小垣外遺跡26号住居址出土遺物	57
第6図	小垣外遺跡26号住居址出土遺物	58
第7図	小垣外遺跡26号住居址出土遺物	59
第8図	小垣外遺跡27号住居址出土遺物	60
第9図	小垣外遺跡28・29号住居址・溝址1出土遺物	61
第10図	小垣外遺跡溝址1出土遺物	62
第11図	小垣外遺跡溝址1出土遺物	63
第12図	小垣外遺跡溝址1出土遺物	64
第13図	小垣外遺跡溝址1, 穫穴遺構1, 土坑123・125, 柱穴群4・5, 用地外出土遺物	65
第14図	小垣外遺跡用地外出土遺物	66
第15図	小垣外遺跡24・30号住居址, 柱穴群5, 溝址1, 遺構外出土石器	67
第16図	小垣外遺跡土坑125・128, 溝址1, 23・25号住居址出土遺物	68
第17図	八幡面遺跡1～4号住居址出土上土器	69
第18図	八幡面遺跡5・7～9・12号住居址出土上土器	70
第19号	八幡面遺跡2・7・15号住居址, 溝址2, 遺構外出土遺物	71
第20図	八幡面遺跡7・12号住居址, 土坑1出土遺物	72

〔写真図版目次〕

図版1	小垣外遺跡(東から), 小垣外遺跡(西から)	73
図版2	K G B 30号住居址周辺, K G B 27号住居址周辺	74
図版3	K G B 23号住居址, K G B 23号住居址カマド	75
図版4	K G B 23号住居址カマド断面, K G B 23号住居址土器出土状態	76
図版5	K G B 24号住居址・土坑115(東から), K G B 24号住居址・土坑115(西から)	77
図版6	K G B 25号住居址, K G B 25号住居址カマド	78
図版7	K G B 25号住居址カマド石芯, K G B 25号住居址土器出土状態	79
図版8	K G B 26号住居址, K G B 26号住居址カマド	80
図版9	K G B 26号住居址カマド他	81
図版10	K G B 27号住居址, K G B 27号住居址土器出土状態	82
図版11	K G B 28号住居址, K G B 29号住居址, 土坑127・128	83
図版12	K G B 30号住居址, K G B 27号住居址, 建物址1	84
図版13	K G B 穫穴遺構1, K G B ロームマウンド1	85
図版14	K G B 溝址1(北から), K G B 溝址1屈曲部(南から)	86

図版15	K G B溝址1断面(北端), K G B溝址1断面(中央付近)	87
図版16	K G B溝址1遺物出土状態	88
図版17	八幡面遺跡(東から), 八幡面遺跡(西から)	89
図版18	Y T M遺構分布状況(西から), Y T M遺構分布状況(北から)	90
図版19	Y T M2号住居址, Y T M6号住居址	91
図版20	Y T M5・8号住居址, Y T M11号住居址	92
図版21	Y T M12号住居址, Y T M13・14号住居址	93
図版22	Y T M掘立柱建物址1・杭列, Y T M土坑1, 古錢出土状態	94
図版23	Y T M暗渠排水1	95
図版24	K G B23号住居址土師器甕	96
図版25	K G B2号住居址土師器甕	97
図版26	K G B23号住居址遺物	98
図版27	K G B23号住居址出土遺物	99
図版28	K G B25号住居址出土土師器甕	100
図版29	K G B25号住居址出土土師器甕	101
図版30	K G B25号住居址出土土師器	102
図版31	K G B25号住居址出土遺物	103
図版32	K G B26号住居址出土土師器甕	104
図版33	K G B26号住居址出土土師器	105
図版34	K G B26号住居址出土土師器坏	106
図版35	K G B26号住居址出土遺物	107
図版36	K G B27号住居址出土土師器	108
図版37	K G B出土遺物	109
図版38	K G B溝址1出土土器	110
図版39	K G B溝址1出土土器	111
図版40	K G B溝址1・遺構外出土遺物	112
図版41	K G B用地外出土土器	113
図版42	Y T M出土遺物	114
図版43	Y T M出土遺物	115
図版44	調査風景	116
図版45	作業風景	117
図版46	遺構掘下げ作業風景	118

I 経 過

1 調査に至るまで

中央自動車道西の宮線飯田インターチェンジは飯田市街地の南西約3kmの伊賀良地区にあり、飯田の玄関口となっている。しかし、市街地への国道153号は道路幅は狭く、かつ、交通量も多く、交通渋滞は大きな社会問題ともなっており、その解決のためバイパスの早期建設が各方面から要望されていた。昭和47年に国道153号飯田バイパスの計画路線が決まり、このため、県教委社会教育課と飯田市教委によって路線内の遺跡分布調査が実施された。殿原遺跡では、信南交通KKバス置場入口の切除部に住居址の存在が認められ、主要な遺跡とみられた。

その後、バイパス路線決定に関し地元関係者等との間で再三にわたる協議がなされ、また、北方地区区画整理計画による耕地の交換分合とのからみあい等もあり、昭和57年3月ようやく路線が決定し、11月より用地買収が始まり、飯田インターチェンジから知久町中村線の交差点までの間は信南交通KKバス置場と八幡面の毛賀沢川より南側の一部を除き、昭和58年度に用地買収が完了した。

昭和59年に工事着工の運びとなり、これに伴う発掘調査が建設省中部地方建設局長と飯田市長との間で委託契約がなされた。発掘調査は飯田市教育委員会が実施することとなった。

これに先立ち、昭和59年10月15日より10月30日の14日間、伊賀良地区1,100m²にある殿原・八幡面・小垣外の三遺跡の確認調査を実施した。

試掘・確認調査の結果をふまえ、昭和60年5月から小垣外遺跡、7月から八幡面遺跡の発掘調査を実施した。

2 調査の経過

(1) 小垣外遺跡の調査

昭和47年4月、中央自動車道西の宮線飯田インターチェンジとなる小垣外・辻垣外遺跡の発掘調査がなされ、住居址22軒（縄文時代前期末4、中期後半4、平安時代2、中世12）、土坑111基、柱穴群3、縄文後期前半の土器集中地2、焼土帶1が検出されている。（長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田市地内その2、昭和47年度）このため、今次60年度調査の遺構番号は、47年度を引継いで付した。

5月28日～6月6日までの8日間、No10～15センター杭間調査。23号・24号住居址、土坑112～116を検出する。No10～13センター杭間に遺構は認められなかった。

6月7日～6月26日までの11日間、この期間中雨の日多し。No5～10センター杭間調査。No8～No10間に溝址1、土坑117号を検出。No5～No8間は水田造成、家屋移転等により破壊、遺構の検出なし。

6月27日～7月16日までの11日間、この間降雨の日多し。No3～5センター杭間調査。25・26号住居址、土坑118～120号、柱穴群4・5号、ロームマウンド1を検出する。

7月17日～7月25日までの8日間、No2・3センター杭間調査、この区間は水田造成により削平され、遺構の破壊は多く、住居地の壁は削られて僅かに崩れ、柱穴等による痕跡を残すものもみられた。27～30号住居址、建物址1、竪穴遺構1、土坑121～136号、柱穴群6・7号を検出。小垣外遺跡の調査を終える。

(2) 八幡面遺跡の調査

7月26日～7月31日までの5日間、No21～24センター杭間、No24よりさらに南東にかけて一段高い地形をなす範囲調査。毛賀沢川の氾濫堆積によって埋まり、氾濫流路を示す溝址3と、溝址によって切られ確かに残る1号住居址を検出する。

8月1日～8月9日までの8日間、No24～25センター杭東13mの用水路間調査。2号～7号住居址1、土坑1号を検出する。

8月10日～8月27日までの11日間、用水路～No28センター杭間の調査。8号～15号住居址、建物址1、暗渠遺構1を検出する。

No28センター杭より東毛賀沢川に至る間は氾濫路の砂と疊の深い堆積となり、遺構の存在は認められなかった。
(佐藤謙信)

3 調 査 組 織

(1) 調 査 団

調査団長 佐藤謙信（日本考古学協会会員）

調査員 佐々木嘉和、山下誠一、佐合英治、桜井弘人、吉川豊、馬場保之、小林正春

調査補助員 牧内佳子

作業員 福島明夫、松下真幸、柳沢八重子、宮島平之、牧島茂実、高橋収二郎、細田七郎、市瀬長介、土屋ミチ子、林庄蔵、下平米一、牧内恒子、柳沢豊茂、小林弘

吉沢浩三，下平幸江，片桐鈺一，佐藤いなゑ，出口さなゑ，今牧富士夫，宮内孝人，北原康夫，高橋寛治，木下当一，平沢今朝光，木下伝，本多正司，桐生清志，高島亜矢子，岡島定治，今井寿男，清水五郎，秦清平，平沢秀雄，小池伸二，武藤弘，中野充夫，中野裕顯，久保田八尋，清水良子，池田幸子，吉川紀美子，小平不二子，木下恒子，櫛原勝子，唐沢右千代，武田恵美，木下玲子，牧内八代，丹羽由美，宮内真理子，松本基子，吉川悦子，大口方富士子

(2) 事務局

事務局長	塙沢正司（飯田市教育委員会社会教育課長）
事務局員	池田明人（ " " 文化係長）
	小林正春（ " " 文化係）
	吉川 豊（ " " " " ）
	馬場保之（ " " " " 62. 4～）
	新井智子（ " 庶務課 ～61. 10）
	土屋敏美（ " " 61. 10～）

II 遺跡の立地と環境

1 自然環境

小垣外遺跡は長野県飯田市北方940番地・964番地ほかに、八幡面遺跡は同北方785番地・788番地、飯田市上殿岡510番地・520番地ほかに所在する。

北方・上殿岡は、昭和32年飯田市合併前は伊賀良村北方、伊賀良村上殿岡であった。伊賀良地区は飯田市街地の南々西にあって、木曾山脈の前山の笠松山(1,271m)・高島屋山(1,397m)の東山麓に位置し、北の松川と南の茂都計川(久米川の支流)の強い押し出しによって広大な扇状地が発達している。特に、松川の扇状地は、下伊那地域の中で模式的な新規扇状地で、扇端の一部が南の下殿岡まで続き第2段丘に連なっている。伊賀良地区は西方の山地帯、松川右岸沿いの段丘面、東の竜丘地区に接する段丘面、南方の茂都計川流域の段丘面を除き、中央部はこの大きな扇状地にあるといえよう。

この新しい扇状地を前山から流れ出る川は小さく、北から毛賀沢川、新川とそのいくつかの支流があり、松川から引水した大井川を含め、いずれもが浅い谷を形成して東流する。大井川のほか、他の川から引水した井水も多く、扇状地で上における人為的水利の占くから開けた地域である。

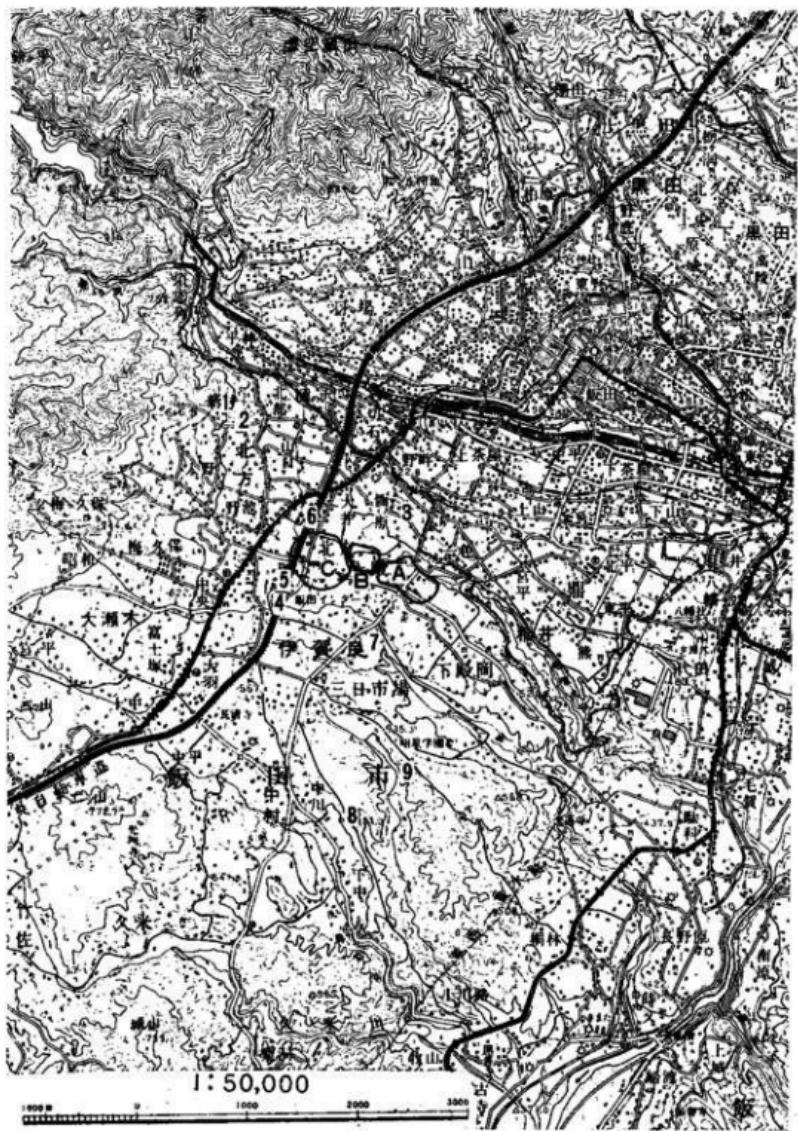
(1) 小垣外遺跡

遺跡は中央道飯田インターインターの東側大井川に至る東西450m南北150~200mの範囲にあり、標高東側で528m、西側で540mを測る。遺跡内を南北に切って県道駄科大瀬木線と南沢川が平行して東西に走っているが同一の遺跡と考えられる。

遺跡の西側は伊賀良扇状地の中央部にあって南北に広がっており、さらに笠松山山麓に至っている。遺跡の中心部から舌状の台地を形成して東南東へと延びている。北側は1.5~2mの比高差をもって一段低くなり、育良・西の原へと東に延びる段丘面となる。東は人工の大井川を隔てて八幡面となる。南側は2m前後の比高差をもって下新井沢川となり、滝沢川と合流して新川の支流アマズラ沢川となって浸蝕谷を形成して東流している。東南東部の舌状台地の先端部は一段低くなっている東に延びる下殿岡の第2段丘面となっている。

昭和36年災害によって遺跡の西は南沢川の氾濫を受け、その余波が遺跡の北の低地と、南側の下新井沢への低地帯に及んでいる。

微地形をみると東に傾く安定した扇状地に遺跡は立地しており、土層は25~30cmの黒色土(耕土)、10cm前後の暗褐色上層があつてローム層となっている。しかし、緩い傾斜地形のた



插図1 調査遺跡位置図及び周辺遺跡図

- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| A. 殿原遺跡 | B. 八幡面遺跡 | C. 小畠外遺跡 |
| 1. 立野遺跡 | 2. 山口遺跡 | 3. 西の宮遺跡 |
| 6. 上の金谷遺跡 | 7. 中島平遺跡 | 4. 酒屋前遺跡 |
| | 8. 大畑古墳 | 5. 流沢井尻遺跡 |
| | | 9. 土器洞窯跡 |

め水田造成時にローム層まで削平された個所、道路用地にかかる建物の撤去、その古材等による破壊箇所も多くみられた。

No17センター杭東で比高差1m余の段をなして下がり、幅40mで大井川に至っている。この間は古い河道とみられ、湿田が大井川に沿って南東へと続いている。

(2) 八幡面遺跡

遺跡は小垣外遺跡の東大井川をはさんで位置し、東流していた毛賀沢川が大きく北北東に流路を変えた部分の西側の約240mの間に殿原遺跡と対峙してある。南は毛賀沢川を境にし、北約80mに幅15~20mの旧河道とみる比高差1~1.5mの凹地帯が西の小垣外から続き、東へ延びて毛賀沢川に至っている。この凹地帯までの扇状地に遺跡は立地し、標高は西端部で525.5m、東端部で519mを測る。

微地形をみると全面に大井川、毛賀沢川の氾濫堆積があり、西から東への傾斜をもつ扇状地といえる。遺跡の西側No23センター杭東は1mの段をもって下がり、さらにNo24センター杭東で1m前後の段をもって東北東方向へと下がっている。No21~No24センター杭間の調査では中心杭北側は深い氾濫堆積の砂層と泥層がみられた。南側の土層は15cm前後の黒色土（耕土）、20cm前後の灰黒色砂土、または荒い砂土があってローム層となるが、ローム層を抉ぐる氾濫流路が3条みられ、その1つは平安時代住居址を切っている。No24センター杭より毛賀沢川の北々東カーブ地点の遺跡東境界地点に至る南側は50~80cmと1段高く舌状台地を形成している。No25とNo26の中間に南北方向に用水路が通っており、この用水路は西が北方、東側が上殿岡と境をしている。

No24東の1段下がる地点からNo27センター杭間は比較的安定した土層が見られたが、氾濫堆積の砂層、粘質土層が主体となり、南側にはローム層を残している。No27センター杭から東100m余の毛賀沢川に至る間は旧河道を示す砂礫の深い堆積層となる。No27センター杭北側にみられ東北東への凹地帯は旧河道とみられ、東に向かってこの旧河道につながっているものとみられる。さらにNo32センター杭付近から現河道を北に大きく迂回する旧河道とみる凹地帯が続いている。笠松山麓前山よりの土石流によって何回かその流路は変わり、洪水により現地形が形成したとみられる。北側の旧河道とみる凹地をはさんで対峙する西の原、東に続く一色の段丘面も古くからの生活の場であったことが推測される。

2 歴史的環境

伊賀良地区の遺跡を概観すると、木曾山脈の前山の山麓には、茂都計川上流の矢平遺跡が弥生時代後期と平安時代の遺跡として知られ、孫兵衛屋敷・牧平・火振原の各遺跡は縄文時代早期押

型文土器をはじめ前期・後期の土器の出土をみている。笠松山の北の山裾にある立野遺跡は縄文時代早期押型文土器の標準遺跡であり（神村1968・69），縄文時代前期・中期・後期の土器の出土もみている。立野の一段下の山口遺跡は縄文時代前期後半の遺跡として知られる（宮沢1966）。この付近から南に続く扇状地上方に立地する縄文時代前期・中期の遺跡が多い。

扇状地の中央部を南北に中央自動車道が通過している。その発掘調査では・ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小堀外（辻垣外）・三塗瀬・上の金谷の10遺跡が調査されている（長野県教委1972）。縄文時代では辻垣外遺跡で前期終末の住居址と土坑群、中期後半では上の平東部・酒屋前・滝沢井尻・辻垣外遺跡で住居址が発掘調査され、辻垣外遺跡では後期の良好な資料が検出されている。弥生時代では大東・酒屋前・滝沢井尻・上の金谷遺跡で住居址が発掘され良好な資料の出土をみており、特に滝沢井尻遺跡の方形周溝墓の主体部より鉄剣2口が出土し注目された。古墳時代では三塗瀬・上の金谷遺跡で住居址が発見され、平安時代では六反田・滝沢井尻・辻垣外・三塗瀬・上の金谷遺跡で住居址が検出され、辻垣外遺跡では綠釉陶器の出土をみている。中世では酒屋前遺跡を中心に集落の存在が予想され、1982年度工場建設に伴う発掘調査では多くのこの時期の資料が得られ（佐藤1982）、鎌倉時代後半から、室町時代初頭に位置づくもので、歴史的背景が考慮されるものであった。

扇端部から段丘面にかけては、扇状面の浸蝕も深まり、台地上の水利は悪く、遺跡は川に面す所に立地する傾向を示している。段丘面の調査は殿原遺跡の北にある西の原遺跡（伴・宮沢1967）があり、縄文時代中期中葉の住居址3軒が発掘され注目された。川に面して立地する遺跡に中島平があり、1976年の農業改良事業に伴う発掘調査で縄文時代早期終末・前期終末の住居址各1、弥生時代後期の集落址、古墳時代、中世の住居址、土坑57基が検出され、径2m余の44号土坑では底部より有舌ボンドの出土をみている（佐藤1977）。

また、本国道バイパス建設に伴う昭和59・60年に発掘調査した八幡面遺跡に東接する殿原遺跡からは、縄文時代9軒・弥生時代後期87軒・古墳時代4軒の合計100軒を数える堅穴住居址や縄文時代後期の配石址など多数の遺構・遺物が発見され、当地域の中で中心的な遺跡として、さらには伊那谷を代表する大遺跡であることが判明している（佐藤・山下1987）。

伊賀良地区の古墳は43基があげられている（市村1965）。

残存するもの9基があるが、石室は破壊され、埴丘をわずかに残すものが大半である。古墳分布は松川に面す扇端部、新川の両岸の段丘端部、茂都計川に面す段丘端部に東西方向に並んでいる。その他散在する古墳がわずかにみられる。多くは後期古墳とみられ、規模も小さい。茂都計川に南面する段丘南東端にある大畠古墳は、伊賀良地区では残存する最大の古墳でほぼ完存し、盤竜鏡の出土で知られ、内部構造は不明であるが、古い古墳ともみられる。

臼井川に面した浸蝕谷に須恵器の窯跡土器洞（かわらけぼら）があり、平安時代の窯跡（通那・1979）である。

伊賀良地区は古代東山道育良駅の所在地ともみられているが、その確証はない。伊賀良の庄の

名は平安時代にあらわれ、文献によれば、中村・久米・川路・殿岡の諸郷が含まれ、松川以南、阿智川以北の竜西一帯とみられているが、その中心が伊賀良にあったものとはいえない。

中世においては、鎌倉時代伊賀良庄地頭は北条時政であり、時政以後は北条氏の一族である北条江馬氏が代々それを継いでいる。江馬氏の地頭代四条金吾頼基は殿岡に居を構えたことは「日連聖人御遺文」に収められているが、「とのおか」の位置については現在の殿岡かははっきりしない（宮下1967）。四条金吾は江馬氏の重臣であり、日連の信者として知られている。

北条氏滅亡後、小笠原氏が伊賀良庄地頭となり、その配下の武将を伊賀良の要所に置き、その一つが三日市場の下の城との伝承もある。戦国動乱期にはいると、小笠原氏は鈴岡・松尾城を築き、その支城が各地にみられ、伊賀良地区には下の城跡・桜山城跡がある。小笠原氏によって伊賀良地区の大開発が進んだ時期とされている（筒井1973）。

（佐藤勝信）

图 2 调查位置及 UJ 围刃图



III 調査結果

1 小垣外遺跡 (K G B)

昭和47年中央道西の宮線飯田インターチェンジ工事に伴う調査で住居址22軒、土坑111基、柱穴群3等が発掘調査されている。今次調査において発掘調査された遺構は次の通りである。

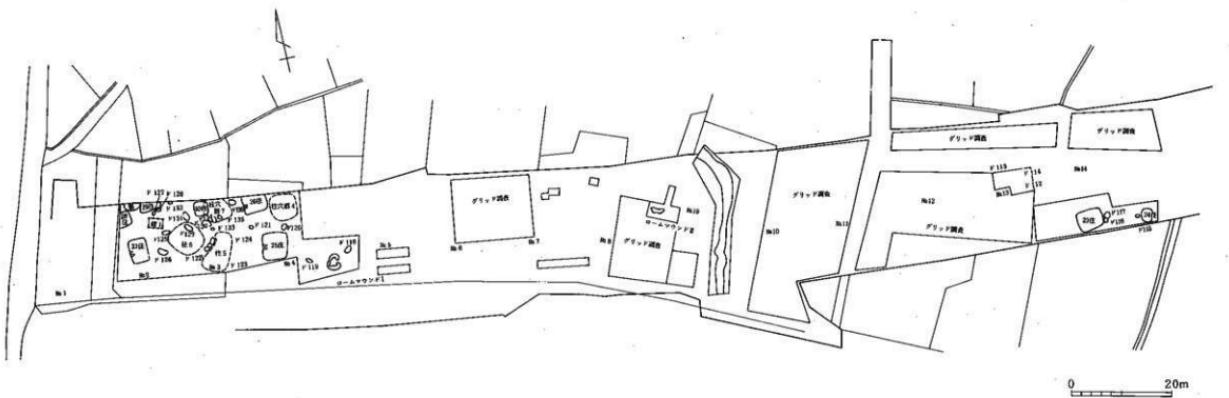
- (1) 積穴住居址 8 軒
 - ① 縄文時代 2 軒
 - ② 古墳時代 4 軒
 - ③ 平安時代 2 軒
- (2) 土坑 25 基
- (3) 溝 址 1
- (4) 建物址 1
- (5) 柱穴群 4
- (6) 積穴遺構 1
- (7) ロームマウンド 2

(1) 積穴住居址

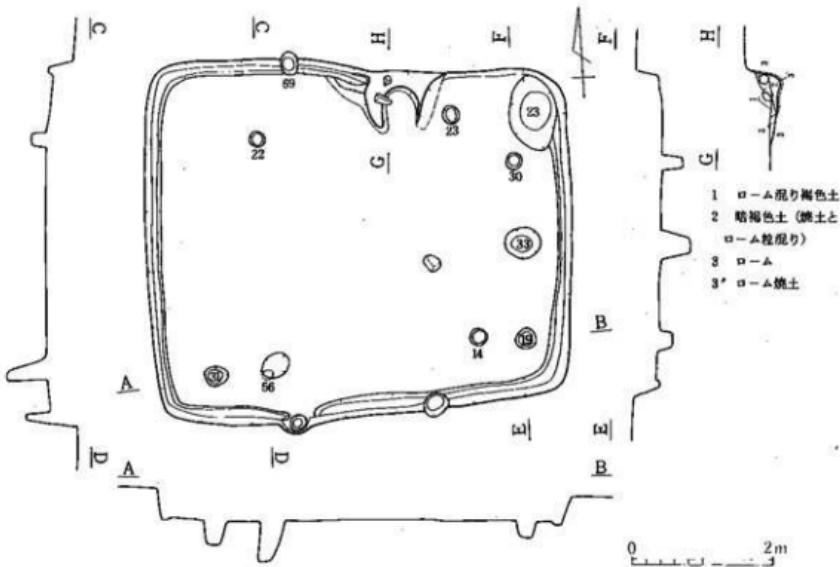
① 23号住居址 (挿図4 第1・2・16図)

遺構 No14の南境界杭に接し、完掘する。5.2×6.1mの隅丸方形をなす積穴住居址で主軸方向 N12°Wを示す。壁高48~27cmを測り、ほぼ垂直に掘りこむ。カマド東側を除き壁下を周溝がめぐり、幅10~20cm、深さは3~7cmと浅い。床面はローム層に掘りこみ堅く、西から東へ僅かな傾斜を示す。主柱穴はP₁~P₄の4個とみられる。P₃・P₄の西に40~50cmの間隔でP₅・P₆の穴があり、P₅の北西90cmにP₇がある。壁に掘りこむP₈~P₁₀の深い穴があり、西側のP₈・P₉は対線的である。P₈とP₉の中間に径45~50cmの楕円形の深さ23cmのP₁₁があり、北東隅に70×108cm、深さ25cmの灰溜とみる掘りこみがある。中心よりやや東に寄って台石1個が置かれている。カマドは北壁中間よりやや東に寄つてつき、粒上カマドの東袖は耕作によって荒れ、西袖上部も削られたとみられ、煙道も確認できなかった。

遺物には十師器の甕、須恵器の壺、紡錘車1の出土をみており、遺物からみて平安時代の住居址である。
(佐藤姓信)







插図4 KGB 23号住居址

遺物 土師器壺・小型壺・环・高杯、須恵器壺・蓋・鉢、灰釉陶器碗、ふいご羽口、石製紡錘車があり、本住居址と直接関連のない混入品もみられる。

土師器壺は5点（第1図1～4・7・8）があり、3点は胴下半から口縁にかけて、2点が底部破片である。1・2は口径26・20cmを測る大型品である。器壁外面の頸部以下及び口縁部内側を柳状工具によるカキ目整形し、内面はナデ整形により器壁を総体に薄く仕上げている。内面は部分的ではあるが帶状の輪積み痕が認められる。底部の7は外面の最下端までカキ目整形され、胴部との接続痕が明瞭に認められる。8は、器面の荒れが著しく詳細不明であるが、古墳時代後期の可能性が強い。

土師器小型壺は2点（第1図3・4）ある。3はほぼ完形で、器高14cm、口径14.5cm、底径6.5cmを測る。外面全体を乱雜にカキ目整形し、下部はケズリ痕も認められる。内面はハケ整形後ナデ仕上げされている。底部には木葉痕がある。4は3とは若干器形が異なるがほぼ同規模の器で、底径6.5cmを測る。外面が二次焼成のため剥落した箇所もあるが全面カキ目整形される。内面は横ナデされ一部に輪積痕が認められる。底部には木葉痕がある。

土師器環は2点（第1図5・6）ある。5は器高3.8cm、口径13.5cmを測り、内面黒色で底部は回転糸切による。6は器高4.5cm、口径12.7cmを測り、口縁下の器壁は2mm弱と薄く

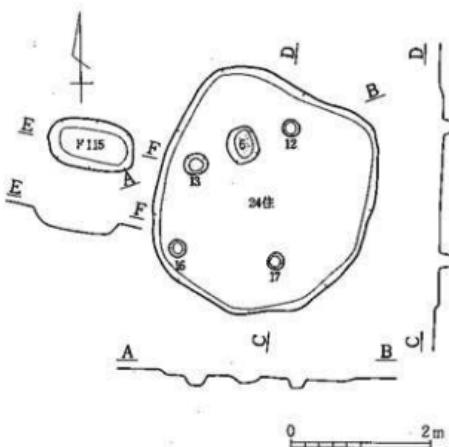
仕上げられている。

須恵器壺は4点（第2図1～4）ある。いずれも底部は回転糸切により、器高3.2～3.8cm、口径12～13cmを測る。

図示した以外に本住居址に関連するものとして須恵器鉢・蓋・灰釉陶器碗の小破片、ふいご羽口片などがある。

また、第16図6は石製紡錘車の破片であるが、他時期の混入品である。

② 24号住居址（挿図5 第2・15図）



挿図5 K G B24号住居址・土坑115

遺構 No14～No15南境界杭の中間部近くにあり、完掘するが上面は耕作の荒れが多い。3.25×3.05mのゆがんだ楕円形の堅穴住居址で、主軸方向N2°Wを示す。壁高は上面が荒れ、6～2cmを残しております。緩やかな傾斜をなすと思われる。床面は堅いが耕作の荒れもみられる。主柱穴はP₁～P₄の4個配置に片寄りをみる。炉址は北側の柱穴間にあり地床炉である。

遺物の出土は少なく、縄文時代後期土器片に中期土器がはつてている。石器に打石斧2個の出

土をみる。遺物からみて縄文時代後期の住居址である。

遺物 縄文時代中期土器6片と打石斧片2点が出土している。土器はいずれも小破片で全体を知るものはない。沈線・縄文などが施され縄文時代中期中葉から後期的な様相を示すものがあり遺物の時期は特定できない。

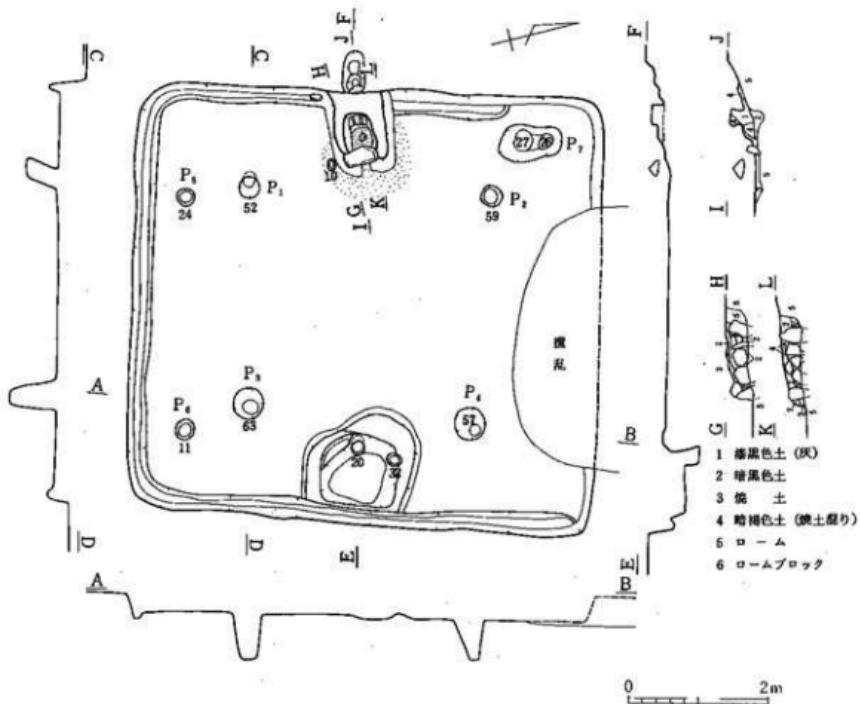
石器は2点ともに破損品であり、全体形不明であるが、いずれも、縄文時代全期を通じてみられるものである。

③ 25号住居址（挿図6 第2～図24～24, 3・4・16図）

遺構 No4センター杭北西2.5mにあり完掘するが、北壁ぎわ1部が建物移転の際に破壊されていた。6.2×6.6mの隅丸方形の堅穴住居址で主軸方向N88°Wを示す。壁高37～23cmほぼ垂直にローム層に掘りこむ。北壁と西壁北側一部を除き壁下を周溝がめぐる。幅15～20cm、7～14cm平均10cmの深さをもつ。床面は平坦でタタキ状に堅い。主柱穴P₁～P₄の4個が整った配置にあり、掘りこみは深い。P₁・P₂の南に等間隔にP₅・P₆の穴があ

り、北西隅近くに 90×55 cmの浅い二つ穴からなるP₁がある。東壁中央下に南北 $1.6 \times$ 東西 $1 \sim 1.5$ mのゆがむ開丸方形をなし、内部は 70×70 cmのゆがむ楕円形、深さ30cmの掘りこみをなし、その外周を幅20~25cm、高さ3cmの盛土が土手状に囲み、掘りこみ壁に40cmの間隔をおく二つの穴がつく。掘りこみの周辺、内部に甕・壺をはじめ土器片多し。カマドは西壁中央部につき、石芯粘土カマドで残存状態は良好。焚口部に天井石を両袖にわたす。煙道は壁外60cmで立ちあがり、焼土は焚口部を中心に両袖外周に広がる。両袖の先端部に対称的に小さな穴がつく。

遺物の出土は多く、下層から床面に検出され、土器片は全面にわたってみられた。特に東壁中央下の入口部、貯蔵穴とみられる掘りこみ内部と周辺に集中し出土をみた。土器器の甕・小形甕・壺・高壺・瓶・壺があり、須恵器の樽形縁がある。鉄器に鉄鍔1・不明鉄器1がある。これら遺物は古墳時代後期前半に位置づくもので、この期の住居址である。



挿図6 KGB 25号住居址

遺物 全体の遺物出土量はきわめて多く、土師器壺・小型壺・壺・壺・高壺・瓶、須恵器壺・壺、鉄製品などがある。

土師器壺(第3・4図)は、最も出土量が多く全体の器形を知るもの2点、口縁部破片7点、底部破片5点を図化した。1は、全体の%程残し、胴下半部に最大径があり、若干長胴氣味の壺である。器高33.1cm、口径18.4cm、胴径27.2cm、底径6.6cmを測る。口縁部が横ナデの他、外面全体をヘラミガキで仕上げ、内面は器壁の剥落が著しいが、部分的に輪積痕が認められる。また、内面の底部及び外面の底部ぎわを除く胴部全体に炭化物の付着が認められる。2は、ほぼ完形品で、全体は球形となり、底も丸底である。器高26.3cm、口径15.8cm、胴径25.3cmを測る。外面の底部付近及び肩部から上位を除く全面に炭化物が付着し、胴部中央付近が顕著である。第4図1～7は口縁部片であり、第3図1あるいは2と共通する点が多く、口径14～20.1cmを測る。そのうち2は頸部以下の外面をハケ整形しており他とは若干異なる。1は口縁部外面の1ヶ所に斜めに列点状のヘラによる刻みを施している。土師器壺の底部は5点あり、あげ底状になるもの(4図18・9)や平底のもの(4図10・11)がある。土師器壺については、全体形及び各部位の差により、壺と解するのが妥当といえるものもあるが、3図1と2で示されるようにどちらの形態も炭化物の付着から煮沸用具として用いられており、一括して壺とした。

土師器小型壺(第2図12～18)としたものは7点ありこのうち2点が全体形を知るもの、1点が底部片で、他は口縁部片である。規模や細部の状態に若干の差はあるが、口径10.3～15.7cmで、小さく外反する口縁部を持つものを一括して小型壺とした。壺と壺の中間的な形態を示すもので、底部は丸底の平底である。

土師器壺(第2図19～21)は、完形品が1点の他口縁部3点、底部1点がある。19は受け口状にわずかに立ち上がる口縁部で口径13cmを測る。20・21は同形態のものでほぼ球形胴部の上に垂直に近く口縁が立ち上がるもので、総体に丁寧な作りである。このうち21のみは器形も若干異なり、胎土等に劣る点もみられ、用途等の差も考えられる。

土師器壺(第3図9～14)は3点があり、9は底部・口縁部とも欠くが、底部ぎわの形状から多孔となる可能性もある。10と11はいずれも単孔で孔径7cm・10cmを測るもので3点ともに大型の壺と考えられる。

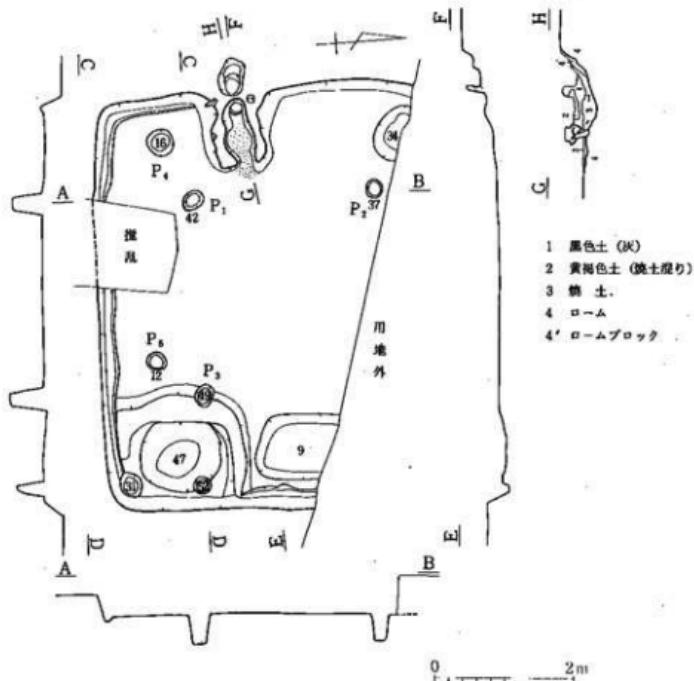
土師器壺(第4図12～17)は完形品1点の他は、口縁部片6点、底部片1点がある。完形品が1点のみのため、全体形での比較は困難であるが、口径12.5～15cmを測り、深さ、口縁部形態の変化、内面黒色とそうでない物等々の差異があり、かなり変化に富んだ器種である。また、口縁部片のうちには、高壺の壺部の可能性のあるものもある。

土師器高壺(第3図3～7)は5点を図化したが、3が壺部で他は脚部片である。3は梭を持つ大型の高壺で、脚部4の段を持つものとの関連が考えられる。他の脚部3点はいずれもラッパ状に外反するものである。

須恵器（第2図22～24）は小破片が3点出土したのみである。いずれも全体形は不明であるが、整形等きわめて良好なものである。22は樽型縁で施文等は認められないが、ロクロ痕が顯著にあり、一部自然釉も認められる。23は、壺などの口縁部片で細かな波状文が施され、22の樽型縁の口縁部である可能性もある。

土器以外の遺物として鉄鎌（第16図7）と用途等不明の鉄製品（第16図8）がある。鉄鎌は、片側にのみ逆刺の付く尖根鎌で茎以下を欠く。第16図8は3.8×2.5cmの不整形の鉄製品で、厚さ1cmを測るが、鏽化が激しくそのためのヒビ割れかもしれないが、断面は、3～4枚の板をはり合わせたようにも観察されるが、元の形態、用途等不明である。（小林正春）

④ 26号住居址（摺図7 第5～7図）



摺図7 K G B 26号住居址

遺構 No 3～4 北境界杭の中間にあって3分の1北は用地外となり、3分の2弱を調査した。また、南壁に沿って1.2×1.2mの井戸跡があり、荒れていた。東西6mを測る隅丸方

形の竪穴住居で主軸方向N95°Wを示す。壁高38~23cm、南壁はやや直に、東西壁はやや緩やかな壁をなしローム層に掘りこむ。周溝が西壁カマド南側より南壁下をめぐり、東壁下で南1.8mが切れ、さらに北へ用地外へと続いている。幅10~15cm、深さ4~6cmである。床面は平担でタタキ状に堅い。主柱穴はP₁~P₃が検出されており、配置から用地外に1個あり、整った配置にあるとみられる。カマド南40cmにP₁、P₃の東西にP₁の穴がある。カマド北1.4mに東西径80cm、深さ35cmの大きな掘りこみがあり、北半分は用地外となる。内部は灰・炭を多く含み、壺・完形の瓶の出土をみ、灰溜とみられる。南東隅に1.6×1.9mの隅丸方形をなし、その内部は1.3×1.0m、深さ52cmの楕円形の掘りこみをなし、外周を幅15~35cm、高さ3~5cmの盛土が土手状に囲む。掘りこみ部の南東隅と北東隅に穴がつく。土師器壺、須恵器甕等の出土をみる。この北に接し北側は用地外となる東西95cm×南北は110cmをこえる（用地外に続く）隅丸長方形の深さ7~9cmの掘りこみがあり、内部より土師器片の出土が多い。用地外にかかるためその性格は不明であった。カマドは西壁のやや南寄りにあり、石芯カマドで残存状態は良好。大形甕が火床の支脚の上にのった、カマドにかけられたままの姿で出土している。カマド内部の焼土は著しく、煙道は壁外55cmで立ち上がりがみられる。

遺物は多く、まとまった資料がある。カマド周辺と北西隅の掘りこみ内部、貯蔵穴とみる西東隅の掘りこみ内に集中出土をみる。土師器に壺・壇・甕・高杯・杯・瓶がある。古墳時代後期前半に位置づき、この期の住居址である。

遺物 25号住居址同様に全体の遺物出土量は多い。土師器甕・小型甕・瓶・壺・小型壺・高杯・杯などがある。

土師器甕（第5図1~2）は、1がほぼ完形の他口縁部3点、底部2点がある。1は器高30.4cm、口径15.1cm、胴最大径25.8cm、底径4.8cmを測る。器面は内外面の全体を丁寧なハケ整形しており、その後口縁部と内面底部付近をナデ仕上げしている。内面の一部に輪積痕が認められる。他の口縁部は口径13.6~16.3cmを測り1と共通する。底部片は、1・2と同様の平底を呈するものがある。

土師器小型甕（第5図3~9）は完形品3点、ほぼ完形品1点、口縁部破片4点、底部破片3点がある。口径9.6~12.6cmを測り、器高は7.5~10.3cm程度となる。底部形態は平底と丸底と两者あり、器壁の厚い物や薄い物と個々による変化も各所で認められ、用途等も様様な器である可能性が強い。

土師器瓶（第6図1）は完形品で、器高13.2cm、口径22.0cm、底径7.5cmを測る。単純に立ち上がる口縁部で、胴中央部の若干上位に上方へ湾曲する一对の把手を持つ。底部は径7.5cmの範囲内に6ヶの孔を穿ったいわゆる多孔式の瓶である。

土師器壺（第6図2~8）は2点あり、2は、口縁部片で、外面に稜を持ちその内側がわずかに凹む有段口縁となる。8は、胴部以下の破片で、丸底となり、全体が球形状となり頑

と考えたが、小型壺の可能性もある。

土師器小型壺（第7図11・12）は、11が $\frac{1}{2}$ 、12が口縁部破片である。11は口径6.1cm、器高7.2cm、底径3.5cmを測り、口縁部がわずかに外反して立ち上がるもので、他の壺と区別して捉えた。12も口径6.3cmと小さく、11と同様の器と考えられる。

土師器鉢（第7図3）は口縁部破片が2点ある。3は口径26.6cmと大型の桃状を呈する。口縁部は他より若干厚く、復合口縁状となり、その内面は指頭による押え痕が認められる。

土師器壺（第7図4～10）は、器形の知れるもの5点、口縁部破片2点、底部破片2点がある。口径11.8～14.4cm、器高4.6～5.6cmとバラつきがある。形態的には丸底が主体でわざかに平底が認められる。口縁部形は2大別でき、底部から単純に立ち上がり終息するものと、口唇部がごくわずか外反するものとがある。また、何点かは暗文が施されている。

土師器高壺（第7図13～19）は壺部3点、脚部4点がある。壺部は口径13.9～17.1cmで立ち上がりの状況に若干の差はあるが、いずれも単純な口縁をなす。脚部は、単純にラッパ状に開くもの、途中で強く屈折して外反するもの、外面のみに稜状の段を有するものと変化に富んでいる。

以上が、本住居址に直接関連する遺物であるが、それ以外に他時期からの混入品が何点か出土している。

縄文時代の遺物として、前期末の半裁竹管文の土器片（6図11～13）、中期と考えられる縄文のみ認められる破片、晩期の条痕文土器片、同じく晩期と考えられるが当地方にほとんど類例の認められない台付土器（第7図20）がある。

第6図14は上からの出土品であるが、深緑色の釉薬を施した須恵質の陶器があり、近世に属すると考えられる。
（小林正春）

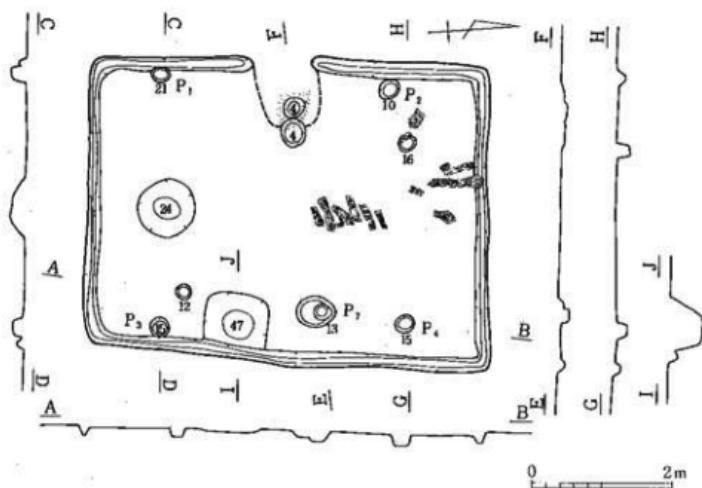
⑥ 27号住居址（押図8 第8図）

遺構 №2センター杭北2mにあって完掘するが、上面は水田造成時に削平されていた。5.7×4.4mの隅丸方形の壁高は削平され4～1cmを残すのみである。壁下をカマド部を除き周溝が全周をめぐる。幅10～15cm、深7～12cmであり、この周溝によって住居址の規模が明確になった。床面はローム層に掘りこまれ、タタキ状に堅い。被火災の住居址で焼土・炭灰が全面にみられ、特に炭化木が中心から北西に集中していた。主柱穴は配置からみてP₁～P₄の壁ぎわにあるものとみる。P₁・P₂のはば中間に径80cm、深さ27cmの円形の掘りこみがあり、東壁下やや南寄りに75×95cmの隅丸方形、深さ47cmの掘りこみがあり貯蔵穴と思われる。この北にあるP₁は位置からみて入口施設ともみるが不明。カマドは西壁中央につき、破壊されているが、周溝の切れと、顕著な焼土を浅い掘り凹みによって確認されたが、その規模は不明である。

遺物は上部が床面上まで削平され、このため出土量は少なかった。カマド両側の壁ぎわに床面に接して出土をみている。土師器の壺・鉢・高壺・壺・手づくね土器等があり、古墳

時代後期前半に位置づき、この期の住居址である。

(佐藤姓信)



插図8 KGB 27号住居址

遺物 上部器蓋（第8図3・4）は口縁部破片1点、底部破片1点がある。口縁部破片は小さく外反する口縁部のみで、口径15.3cmを測り、内面黒色である。底部は丸底であり、口縁部破片とともに小型甕とした方が妥当と考えられる。

土師器瓶（第8図1）は単純に立ち上がる口縁部破片で、口径21.2cmを測り、大型単孔の瓶である。

土師器鉢（第8図2）は、器高19.8cm、口径25.1cm、底径6.7cmを測る。胴上半に最大径を持ち肩部を成し、小さく外反する口縁部となる当地方該期に類例の少ない器である。外面は全体をハケ整形し、その後ミガキ仕上し、内面は全体をミガキ仕上している。胎土はきわめて精良で焼成も良好であり、胎土・製法ともに当地方の一般的な土師器とは異なる。

土師器壺（第8図5～12）は器形の知れるもの5点、口縁部破片3点、底部破片1点がある。口径9.3～13.4cmとバラつきがあり、深さも同様である。口縁部形態は単純に立ち上がるものと、口唇部が小さく外反するものの2者がある。底部はいずれも丸底もしくはそれに近いもので意図的に底部を作ったものはない。器面全体をヘラミガキしたものや内面に暗文を施したものもある。

土師器高壺（第8図13～15）は壺部2点と脚部1点がある。壺部は口径17.9cmと14.5cmで深さは前者が3.3cm後者が3.9cmを測る。脚部は、底径10.3cmを測り、ラッパ状に垂下後途

中で強く外反して端部に至る形態である。

土師器小型壺（第8図16）は、器高4.8cm、口径4.1cmを測り、全体にゆがみのある手づくね土器である。
（小林正春）

⑥ 28号住居址（挿図9 第9図）

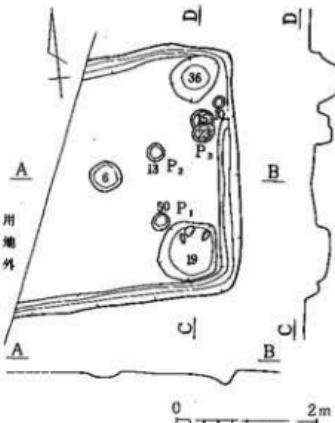
遺構 27号住居址の北4mにあり、西2分の1以上は道路にかかり、半分以下の調査となり、上面は水田造成時に削平されている。南北3.6mを測る隅丸方形の堅穴住居址で、主軸方向N75°Wと推定される。壁高は上面削平のため12~4cmを残し、緩やかな壁面をなすとみられる。周溝は北東隅の掘りこみを除き壁下を幅10~15cm、6~9cmの深さに掘られている。床面はローム層に掘りこみ平坦で堅く、焼土が部分的にみられる。主柱穴はP₁とP₂ともみられるが、P₂はP₁に接しそう掘りも浅い。P₂は配置からは不整形な位置にあり不明であり、他は用地外にあってはっきりしない。中心よりやや東に寄って径45、深さ6cmの円形の浅い掘りこみがあり内側に焼土をみる。北東隅に75×60cmの楕円形、深さ35cmの掘りこみがあり、南東隅に80×80cmのゆがむ隅丸方形、深さ22cmの掘りこみがあり、ともに内面に焼土があり、内部より土器片多く、特に後者に多くみられた。形態から貯蔵穴・灰溜とも考えられる。焼木等はないが焼土の状態から火災の住居址とも思われるがはっきりしない。

遺物は比較的少ないが、北西・南東隅の掘りこみ内部に集中出土をみた。土器は土師器の壺であり、古墳時代の住居址と考えられる。

遺物 土師器壺と壺の破片が出土している。

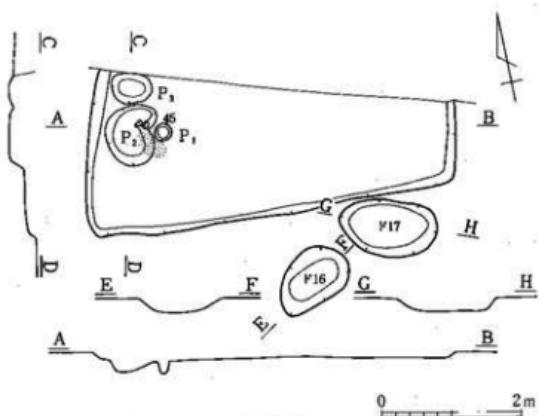
土師器壺（第9図2~6）は口縁部破片2点と底部破片2点の4点がある。口縁部破片は口径13.3cm、13.8cmを測り、いずれもゆるく外反する口縁となり比較的小型のものである。底部は1点が底径6.7cmで底となり比較的薄く仕上げられた大型品で、一方は底径6.2cmで全体にぶ厚い作りで内面黒色である。

土師器壺（第9図1）は口縁部破片で、肩部から垂直に立ち上がり、口縁部中央部からゆるく外反する有段口縁状となり、中央部が厚くなる。外面はハケ整形後にナデによりそれを消している。口径19.6cmを測る大型品である。
（小林正春）



挿図9 K G B 28号住居址

⑦ 29号住居址（挿図10 第9図）



挿図10 K G B 29号住居址

遺構 No.2 北境界杭東2.2mにあり、北は用地外にかかり、3分の1弱の調査となる。南壁で5.25mを測る隅丸方形の竪穴住居址で推定主軸方向N110°Wを示す。上部は水田造成時に削平され残る壁高は13~3cm、緩やかな壁面をなすとみられる。床面はローム層に掘りこまれ堅い。支柱穴とみるとP1の1個で他は用地外となる。

西壁下中央より南に寄ってP₂・P₃の掘りこみが並ぶ。P₂は85×65cmのややゆがみを持つ楕円形、深さ21cm、東側にP₁から内部にかけ50×25cmの楕円に焼土がある。P₃は50×55cm、深さ8cmの楕円形の掘りこみで内部に焼土がつく。P₂・P₃の掘りこみは西壁中央部につくとみるカマドに続く施設とも考えられる。

遺物の出土は少ない。土師器の壺、須恵器の蓋環があり、古墳時代後期前半であり、この期の住居地である。
（佐藤魁信）

遺物 土師器壺・高壺・壺、須恵器蓋環・壺などがあるが大半が小破片で図化できたものは、土師器壺1点と須恵器蓋環1点のみである。

土師器壺（第9図7）は底部破片で、径5.4cmを測る。ぶ厚く仕上げられた底部となり、かなり人型の器と考えられる。

須恵器蓋環（第9図8）は1%程度残存し、口径14.6cmを測り、比較的大型の壺身である。

図示できなかったが、他に小型の土師器高壺脚部破片・壺破片、須恵器壺小破片・蓋環小破片などがあり、いずれも、同時期の遺物と考えられる。
（小林正春）

⑧ 30号住居址（挿図11 第15図）

遺構 No.3 北境界杭南西2mにあり、完掘する。3.7×3.85mのゆがむ隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N50°Eを示す。壁高19~9cm、ややゆるやかな壁面をなす。床面はローム層まで掘りこまれ堅いが、移転家屋のゴミ焼き跡があり荒れがみられた。支柱穴は壁に接した外側にあるP₁~P₄の4個とみられ、住居内のP₅・P₆は支柱穴的なものと思われ

る。炉址は中心より南に寄ってあり、地床炉であるがゴミ焼のため荒れていた。

遺物は少なく、縄文時代後期土器片の僅かと打石斧3の出土をみたにすぎない。縄文時代後期の住居址とみたい。
(佐藤魁信)

(2) 土 坑

① 土坑112（挿図12）

No.13センター杭北東1mにあり、土坑113の南側を切る。130×74cmのゆがむ楕円形をなす。内部は2段となり、深さ28cmと44cmを測り、ローム層に至り、緩い壁面をなす。

遺物 縄文時代晩期と考えられる条旗文土器の口縁部破片が1片出土している。

② 土坑113（挿図12）

土坑112に南側2分の1近くを切られている。径70cmのゆがむ円形をなし、深さ34cmを測り、ローム層まで掘りこまれている。

遺物の出土はない。

③ 土坑114（挿図12）

土坑112・113の北に並ぶ。112×88cmの楕円形をなし、内部は2段となり、深さ41cmと63cmを測り、緩やかな壁面をなしてローム層に至っている。

遺物 縄文時代中期初頭の半截竹管文土器片と晩期と考えられる土器片が出土している。

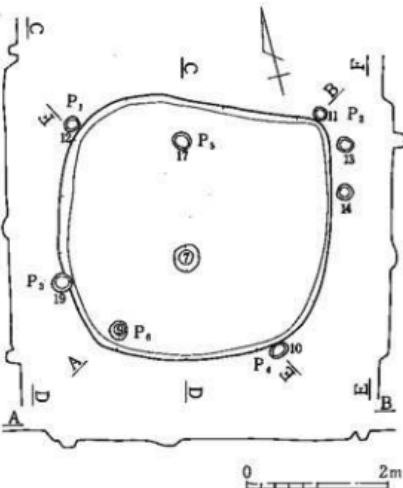
④ 土坑115（挿図4）

24号住居址の西40cmにあり、123×74cmの長楕円をなす。深さ26cmを測り、やや緩やかな壁面をなしてローム層に至る。断面形は逆台形をなす。

遺物の出土はない。

⑤ 土坑116（挿図12）

平安時代の23号住居址の東に接し、西壁の一部は切れ東は土坑117に接し、東壁の一部は切れている。150×推定130cmの僅かにゆがむ楕円形をなす。深さは南側19cm、中央32cm、北壁下25cm緩やかな壁面をなし、ローム層に至る。断面は皿状を呈する。



挿図11 K G B 30号住居址

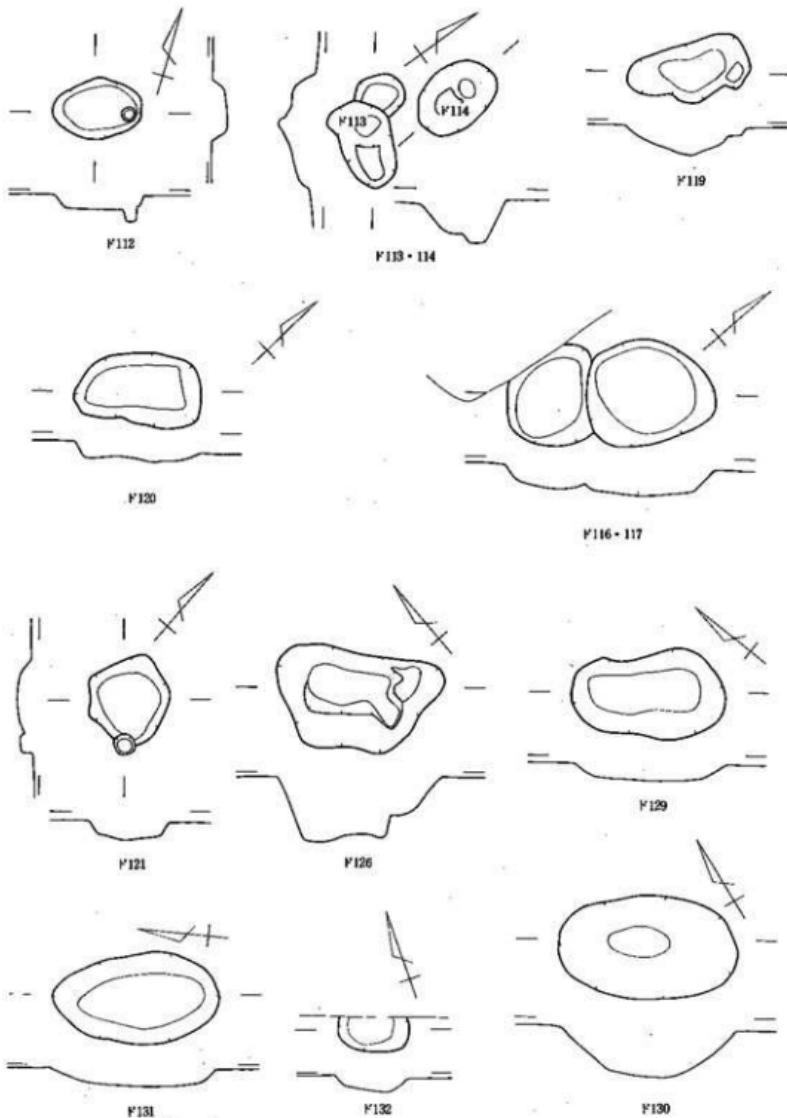


插图12 K G B 土坑112~114+116~119~121+126+129+130~132

遺物の出土はないが、平安時代住居址に一部切られており、それ以前の土坑である。

⑥ 土坑117（挿図12）

土坑116の東壁の一部を切って東に並ぶ。180×155cmのゆがむ楕円形をなす。深さ32cmを測り、緩やかな壁面をなし、ローム層に至る。断面形は皿状を呈す。

遺物の出土はない。

⑦ 土坑118（挿図14）

No 4～5センター杭東寄りにあり、ロームマウンドⅠの東2.1mにある。2.15×1.0mの大きくゆがんだ楕円形をなし、深さ57～34cmと中央部が深く、東壁下が浅くなる。東壁は大きく緩やかな壁面をなしてローム層に至っている。

遺物の出土はない。

⑧ 土坑119（挿図12）

No 4センター杭東南東2mにある。170×85cmの西側に2ヶ所突出部をもつ不整楕円形をなす。東側は2段に掘りこみ、深さ12cmと41cmを測る。特に西側は緩い傾斜をもって掘りこみローム層に至っており、断面形は南北方向では逆台形、東西方向は舟底形をなす。

遺物の出土はない。

⑨ 土坑120（挿図12）

25号住北0.8mにあり、180×104cmのゆがみをもつ楕円形をなす。深さ24cmを測り、緩やかな壁をなしてローム層に至る。断面形は逆台形を呈する。

遺物の出土はない。

⑩ 土坑121（挿図12）

25号住居址の北西3mにあり、120×115cmの突出部をもつ不整円形をなす。深さ25cmやや緩やかな壁面をなしローム層に至る。南壁に深さ27cmの穴が付く。断面形は逆台形を呈す。

遺物の出土はない。

⑪ 土坑122（挿図17）

No 3センター杭北北西4.5mにあり、土坑123の南に接する。180×115cmの西側に突出部をもち、やや不整隅丸方形をなす。深さは突出部で14cm、一段下がって20cmとなり、緩やかな壁面をなし、ローム層に至る。断面形は逆台形を呈す。

遺物の出土はない。

⑫ 土坑123（挿図17 第13図）

土坑122の西に接し、土坑124に北壁を切られて接しあう。140×85cmのゆがむ楕円形をなし、東壁に径25cmの穴がつく。深さ17cm緩やかな壁面をなし、ローム層に至る。断面形は逆台形をなす。

遺物 条痕文土器片の出土をみ、縄文時代晚期の土坑とも思われる。

⑬ 土坑124（挿図17）

土坑123の北壁を僅か切って北に接する。170×120cmの変形の楕円形をなす。緩やかな壁面をなし、深さ18cmローム層に掘りこみ、断面形は逆台形を呈す。

遺物の出土はない。

⑭ 土坑125（挿図16 第13・16図）

建物址1号の南東0.6mにあり、190×95cmの長楕円形をなす。深さ25cmを測り、緩やかな壁面をなし、ローム層に至る。断面形は皿状をなす。

遺物 繩文時代中期土器片と黒曜石の剥片石器1の出土をみ、この期の土坑とみる。

⑮ 土坑126（挿図12）

27号住居址の東2.5mにあり、2.4×1.4mの隅丸台形をなす。内部は二段となり、55cmと80cm、南面と東面は段をなして底部に至り、緩やかな壁面をなす。断面形は逆台形を呈す。その規模、内部の状態から自然的なものとも思われる。

遺物の出土なし。

⑯ 土坑127（挿図3）

29号住居址の南0.5m余に、東に土坑128が隣接する。115×75cmの楕円形をなす。深さ20cm緩い傾斜をもってローム層に掘りこむ。断面形は逆台形を呈す。

遺物の出土なし

⑰ 土坑128（挿図3 第16図）

29号住居址の南に接し、西に土坑127が隣接する。140×82cmの楕円形をなす。深さ17cm緩やかな壁面を呈し、ローム層に至る。断面形は浅い逆台形をなす。

遺物 打製石鎌1個の出土をみ、繩文時代の土坑とみられる。

⑱ 土坑129（挿図12）

柱穴群6号の北に接す。215×75cmのややゆがむ楕円形をなす。深さ25cm、緩やかな壁面をなし、ローム層に至る。断面形は逆台形を呈す。

遺物の出土なし

⑲ 土坑130（挿図12）

30号住居址の南1.2mにある。252×145cmの楕円形をなし、深さ65cmを測る。緩やかにローム層に掘りこみ、断面形はナベ底状を呈す。

遺物の出土なし

⑳ 土坑131（挿図12）

30号住居址の南1.2mにあり、236×130cmの楕円形をなす。深さ25cmを測り、緩やかにローム層に掘りこんでいる。断面形は逆台形を呈す。

遺物の出土なし

④ 土坑132（挿図12）

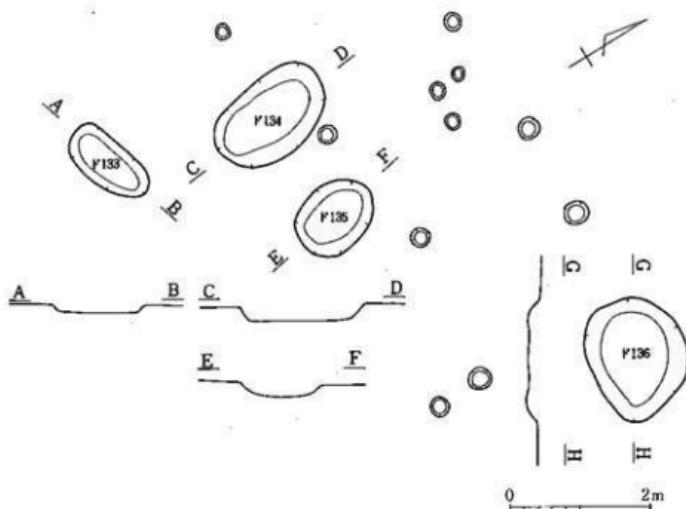
29号住居址の東1.5mにあり、北2分の1は用地外となる。長軸98cmの楕円形をなすとみる。深さ20cm、緩やかにローム層に掘りこまれている。断面形は逆台形を呈す。

遺物 黒曜石製の石鏃1点が出土している。

⑤ 土坑133（挿図13）

No 3 センター杭北9m、土坑134の南1.05mにある。130×60cmのややゆがむ長楕円をなし、深さ13cm浅くローム層に掘りこむ。断面形は逆台形を呈す。

遺物の出土なし



挿図13 K G B 土坑133~136・柱穴群7

⑥ 土坑134（挿図13）

No 3 北境界杭の南3.2mに、土坑133の南に隣接する。178×110cmの楕円形をなし、深さ20cmを測る。緩やかにローム層に掘りこみ、断面形は逆台形を呈す。

遺物の出土なし

⑦ 土坑135（挿図13）

土坑134の西65cmにあり、120×92cmの楕円形をなす。深さ22cmを測り、緩くローム層に掘りこみ、断面形は皿状を呈す。

遺物の出土なし

◎ 土坑136（挿図13）

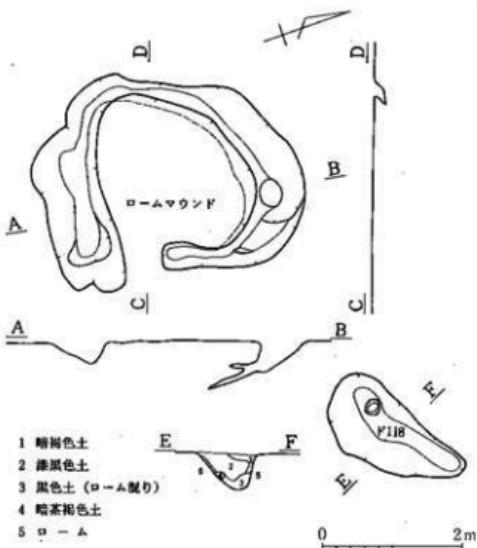
26号住居址の西1.5mにある。173×140cmの楕円形をなす。深さ16cmを測り、緩くローム層に掘りこみ、断面形は浅い逆台形をなす。

（佐藤聰信）

遺物の出土なし

(3) ロームマウンド

① ロームマウンド1（挿図14）



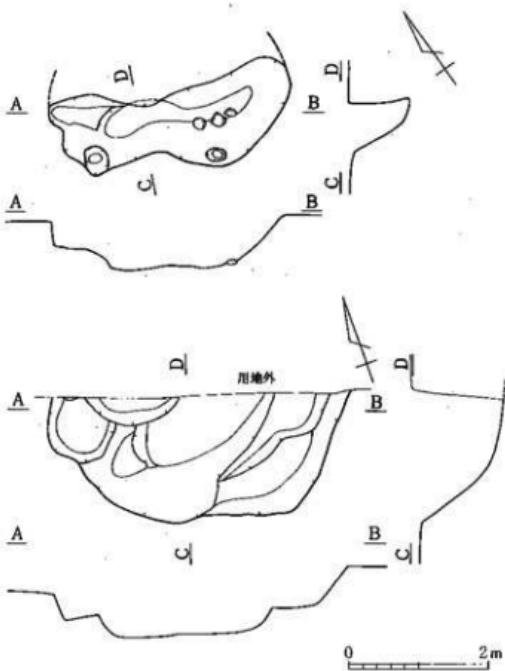
挿図14 KGB 土坑118・ロームマウンド1

(4) 壺穴遺構

① 壺穴遺構1（挿図15 第13図）

今次調査区の北西部にあって北は用地外にかかり、東は29号住居址・南は28号住居址に接する。径4.2mのゆがむ円形の壺穴遺構とみるが、北は用地外のため2分の1程度の調査に終わる。2~3段の段をもってローム層に掘りこまれ、105cm前後の深さをなし、黒色土で埋まる。

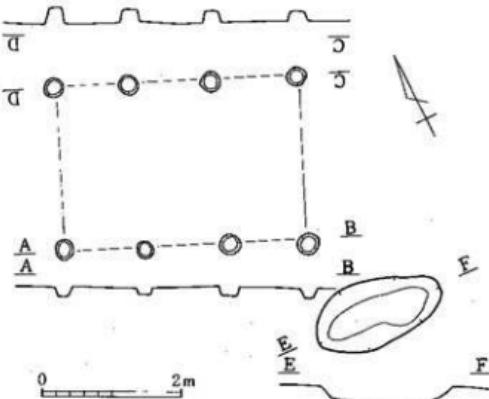
遺物 土師器甕・高环がある。甕は口径16.0cmを測る口縁部破片である。高环はラッパ状に開く脚部破片で底径9.2cmを測る。いずれも古墳時代後期に属する。（佐藤聰信）



挿図15 K G B ロームマウンド2・竪穴1

(5) 挖立柱建物址

- ① 挖立柱建物址1（挿図16）
29号住居址の南1.5mに
あり、 $3.5 \times 24m$ の長方形
で、3×1間の側柱のみの
建物址である。
遺物はなく、時期を決め
がたいが、中世以後のもの
と思われる。（佐藤聰信）



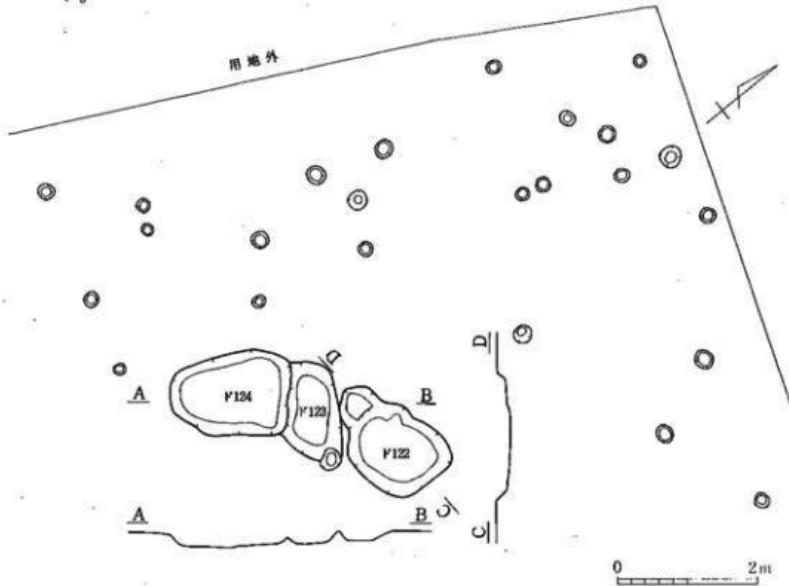
挿図16 K G B 挖立柱建物址1・土坑125

(6) 柱穴群

① 柱穴群4 (挿図17 第13図)

26号住居址の東に隣接し、北は用地外となる。6×5mの範囲に27個の穴が散在する。これら穴のうち、5個・4個・3個といくつかが直列し、何らかの遺構である可能性も考えられる。

遺物 中世陶器片と弥生時代後期底部片、打石斧1個の出土をみる。中世の柱穴群とみたい。



挿図17 K G B 土坑122~124・柱穴群4

② 柱穴群5 (挿図18 第13・15図)

No 3センター杭北に広がり、西に土坑122・123・124が並ぶ。東側は建物移転の際に破壊され不明。9×3~6mの範囲に24個の穴が散在する。性格等は不明である。

遺物 近世透明片面・打石斧・横刃形石器各1の出土をみるが、時代を決めるものはない。

③ 柱穴群6 (挿図19)

No 2~3センター杭線上の北側中間部にあり、土坑122~126、土坑129・130にとり囲まれた状態にある。6×5mの不整形の範囲に21個の穴が散在する。これら穴のうち4個・

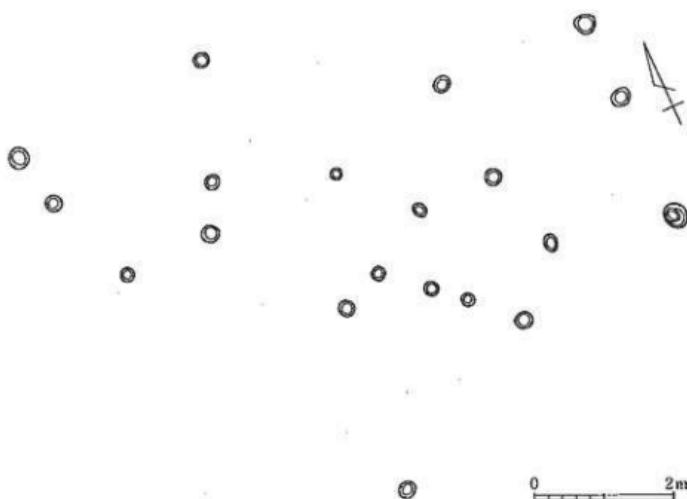
3個といくつかが直列し、何らかの遺構の存在も考えられるが、その性格は不明である。
遺物はなく、その時期は決めかねる。

田地外



挿図18 K G B 柱穴群 5

0 2m



挿図19 K G B 柱穴群 6

0 2m

④ 柱穴群7（挿図13）

30号住居址の東に接し、北は用地外となる。3.5~6×3.5mの範囲に11個の穴が散在する。北は用地外のため、その広がりは不明である。

遺物はなく、その時期は不明である。

（佐藤麿信）

(7) 溝 址

① 溝址I（挿図20 第9~13・15・16図）

南はNo.9南境界杭の東5mで県道駄野大瀬木線で切られ不明となるが、北へN20°Eの方向に向かい、No.9センター杭東7mを通り、南より28m地点で北西へとカーブし、N45°Wの方向に向かい、No.9北境界杭東1.5mで用地外となり、長さ39mを調査する。

溝幅は南からカーブ地点近くまで1.5~2m前後、カーブ地点に最大幅があり、3.5mを測る。それより北は3m前後で用地外となる。溝の深さは南端から2.8m間は40~45cmで、下層は砂利、砂混りのロームで埋まり、荒れが甚だしい。そこより段がついて下がり、90cm余と深さを増すが、南より12mまでは水の抉りこみがあり、底部に砂利・荒い砂の堆積が多い。それより以北は砂利・荒い砂の堆積はなくなり、深さ70~90cm、底部は北へ緩い傾斜をなしている。北西へのカーブ地点で急に70cm程落ちこみ、150~170cmの深さとなり、底部の傾斜はなくなる。また覆土は黒色土系の堆積が多い。

遺物の出土状態としては、南端よりカーブ地点までは溝壁内中層から底部にかけて、弥生時代後期の遺物の出土をみている。北西カーブ地点からは溝縁部・内部上層から中層にかけて古墳時代の遺物を下層から底部は弥生時代後期の遺物の出土となる。

弥生時代後期土器には中島式の壺・甕・高环・手づくね土器があり、石器には有肩扁状形石器・横刃形石器・乳棒状石斧・石鐵・紡錘車等各1個の出土をみている。古墳時代では土師器の甕・高环・須恵器の蓋環があり、東側縁より石製模造品剣形1の出土をみた。

溝址は南側の氾濫の余波とみる荒れを除いて、溝壁の荒れはなく、底部の抉りこみもなく安定したV字形をなしている。遺物の出土状況と、その溝壁の形態からして人工的なものと考えられる。溝址の性格は知ることはできなかったが、今後行なわれると予想される北用地外の調査によって明らかにされるであろう。

遺物 繩文時代・弥生時代・古墳時代の土器・石器が出土しており、主体は弥生時代後期と古墳時代後期である。

（佐藤麿信）

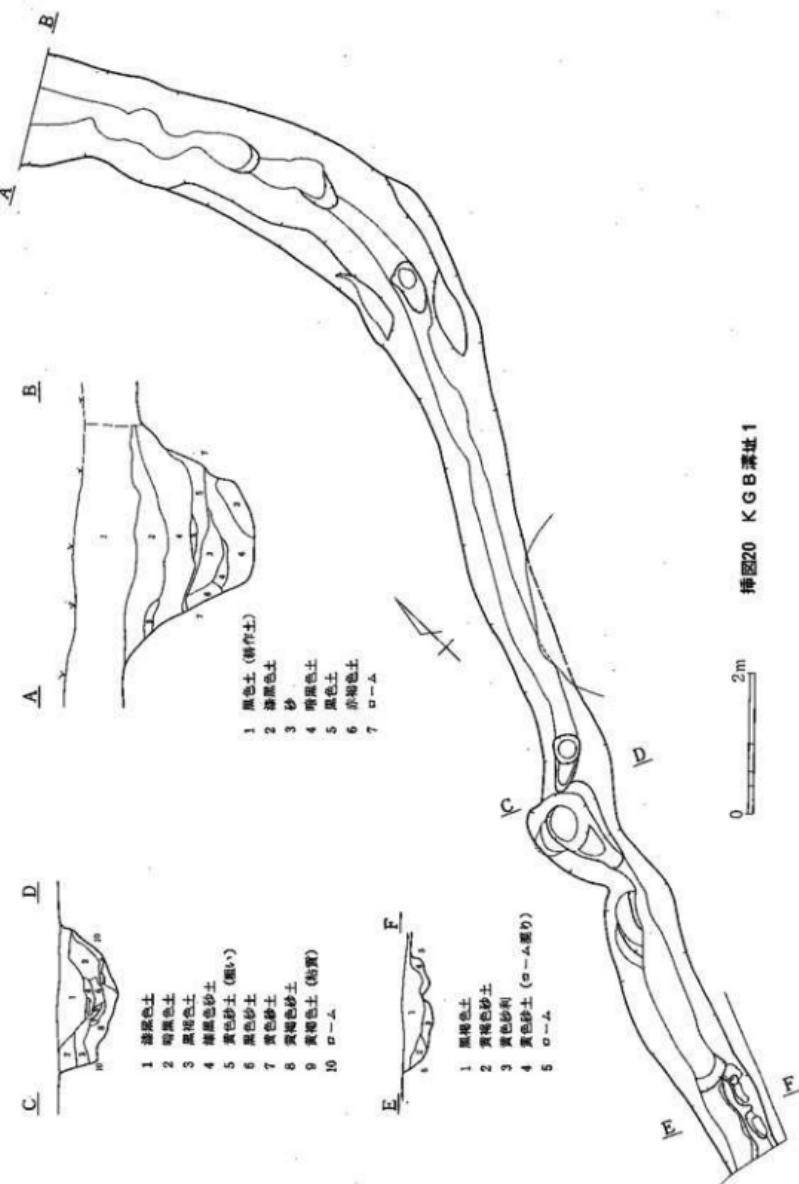
繩文時代の遺物としては、前期とみられる繩文施文の土器片、中期とみられる半裁竹管・沈線文の土器片、晚期の条痕文土器片と乳棒状磨石斧1点、チャート製石鐵1点がありいずれも周囲からの混入品と考えられ、本遺構の時期を示すとは考え難い。

弥生時代後期の遺物としては、甕・台付甕・壺・高环・石器類などがある。

甕はいずれも当地方弥生時代後期の特徴を示すもので、くの字状に外反する口縁部形態で、

插圖20 KGB測址1

0 2m



器面をハケ及びヘラで整形している。頸部に施文したものと無文のものとある。11図の3と6はゆるやかに外反する口縁形態で、3は2段、6は1段の波状文を施す。4は口縁部が強く外反し、1段の波状文の下に斜走短線文を施す。5と7は無文で、ゆるやかに外反する口縁形態となり、台付甕の可能性もある。

13図—17は台付甕の台部破片で、前述無文甕との関連が考えられる。

壺は5ヶ体以上あるが、全体形を判断できるものはなく、磨滅のため文様不鮮明なものもあるが、甕同様に当地方弥生時代後期に通例のものである。

10図—2は口縁部と胴下半を欠くが、ほぼ全体形が知れ、全体的には球形の胴部といえる。文様は、肩部の1/2円弧文が認められる他頸部の施文は磨滅のため不明である。

11図—2は口縁折立部に連続する縦の沈線、順次下位へ向って大きい波状文、細い波状文を2段、次に再び大きい波状文、最下段に1/2円弧文と肩部以高を全面施文する。

11図—1は全体に磨滅が著しく頸部に波状文と斜走短線文を交互に施したのが認められるのみであるが、口縁部及び頸部全体に施文したものと考えられる。

10—3は口縁折立部に連続する沈線、その下段頸部に大きい波状文を施す。

10—4は口縁折立部のみの破片であるが、ここに1/4円弧文を連続して施文する。

10—1は肩部から胴部にかけての破片であり、全体形は不明であるが、残存部の最大径は59cmを測り、超文型の壺となる。文様は肩部上位に斜走短線を多設施文し、その上位に小さな波状文がみられる。

10—5～7は底底部とみられ、底径は7.7～12.4cmを測り、前述口縁部のいずれかと関連するものと考えられる。なお、壺の外面はハケ等による仕上げにより比較的良好に残存するが、内面は例外なく器面が剥落している。

高坏は、12—5の1点のみ図化可能であったが脚部はラッパ状に開き3孔を有し、坏部は縫を有して外反するもので、坏・脚の接続部坏内面は凹みがみられる。

弥生時代に属すと考えられる石器としては有肩扁状形石器1点、横刃型石器1点、紡錘車1点がある。

弥生時代の遺物を総合すると、すべてが单一の時期とは考えられず、後期中頃から後半にかけてのある程度の時間幅を持つものと考えられる。

古墳時代の遺物には、土師器甕・坏・高坏・須恵器蓋坏・石製模造品などがある。

甕は、3点を図化し、12—1は推定高27.0cm、口径14.5cm、底径5.4cmを測る長胴形を成す。2は底部を欠くが、口径17.6cmを測り、内外面全体をハケ整形している。3も底部を欠くが、肩部に最大径のある器形となり、口径14.0cm、胴部最大径15.6cmを測る。

坏は口径11.8cmを測る小形品と、甕状の小さな口縁部を持つ薄い作りで、口縁外面に刺突状の施文をした椀形のものとある。

高坏は坏部5点、脚部4点がある。坏部は浅い皿状のものが主体で、暗文を施すものもあ

る。脚部はいずれもラッパ状に外反するもので、屈折し外反するものもある。

小形の無頸壺（第10図8）は手づくねと考えられ、口径4.4cm、推定高5cmを測る。

須恵器壺（第13図6）は全体の1/4程残存し、口径12.3cmを測る。

石製模造品（第16図4）が1点出土しており、長さ4.3cm、幅1.85cm、厚さ0.45cmを測り、2孔を有する劍形の模造品である。

古墳時代の遺物は、時期の特定できにくいものもあるが、総体としては後期に位置づけられ、後期の前半から中頃にかけての所産といえる。

(8) その他の

① 遺構外出土遺物

遺構外の出土遺物は、遺跡内のかなりの部分が削平等の搅乱を受けていたために、出土量は少ない。

縄文時代中期土器片、磨製石斧、鉄斧などが出上している。

磨製石斧（第15図12）は長さ5.4cm、最大幅3.65cm、厚さ1.15cmを測り、全面丁寧に磨かれており、一般的に用いられる磨製石斧というよりは飞斧的な性格も考えられる。時期の特定はできない。

鉄斧1点があり、一端に曲面部を有し壊などを利用した用器に入れられたものとも推測され、時代的にも平安時代以降の所産と考えられる。

② 用地外出土遺物

今回調査したバイパス用地の北側に接した用地外部分において、以前耕作時に出土した土器が一括保管されており、いずれも弥生時代後期の良好な資料であり、遺跡全体の様相を知るに欠くことのできないものである。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器類で、壺・台付壺・壺・高壺などがある。

壺（第14図1）は、器高31cm、口径25.8cm、底径7.7cmを測る比較的大型品で、頭部に1段の波状文を施す。

台付壺（第13図17）は、全面をハケ状工具で整形し、単純口縁を成すもので、口径16.0cmを測る。

壺は2点（第14図2・3）あり、2は当地方に類例の乏しいもので、ぶ厚い口縁部が単純に外反し、口唇端部を交差するように沈線で刻みを入れたものである。3は、いわゆる壺型の壺で、口縁部を欠き、胴部は球形状となる。

高壺（第13図18）は、全体の1/4程残存し、全体形を知ることができる。壺部は下位でわずかな稜を成し、やや内湾気味となり、脚部は4孔を有し、孔部以下がわずかに内湾しながら終息する均整のとれたもので、胎土は良好であるが、全体に軟質の感を受ける。

14-4は高壺もしくは、器台脚部で底径15cmの小型品である。3孔を有しラッパ状に外反

する。

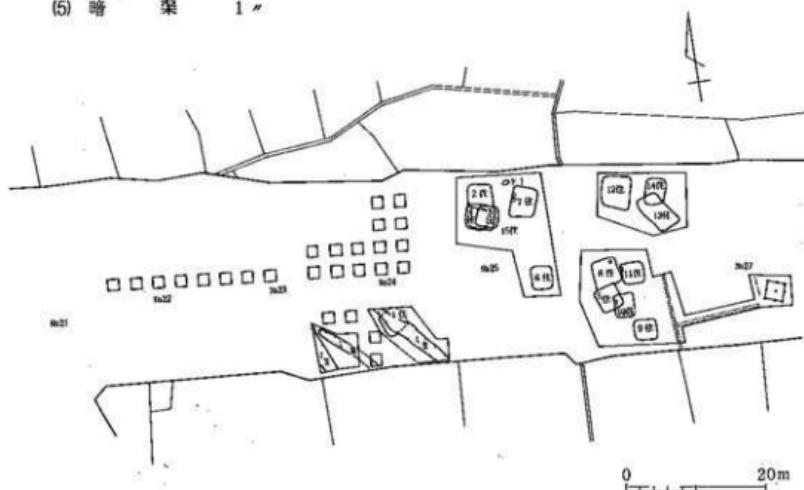
用地外一括出土品のうち、甕のみは当地方に普遍的にみられるものであるが、それ以外はすべて、他地域からの流入品と考えられるもので、時代的にも弥生時代後半から古墳時代初頭に位置づけられるものと考えられ、用地内の調査で確認できなかった時期の資料である。用地内も含めた周辺一帯が弥生時代から古墳時代にかけての連続した集落であることを示す貴重な遺物群といえる。

(小林正春)

2 八幡面遺跡

今次調査において発掘調査された遺構は次の通りである。

(1) 積穴住居址	15軒
① 繩文時代	4 "
③ 古墳時代	2 "
⑥ 中世	2 "
(2) 土坑(中世)	1基
(3) 溝 址	3 "
(4) 建 物 址	1棟
(5) 墓 墓	1 "



摺図21 八幡面遺跡調査範囲及び遺構分布図

(1) 住居址

① 1号住居址（挿図22、第17図）

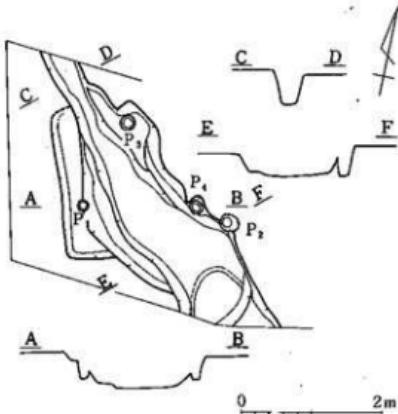
No24センター杭～南境界杭の中間にあり、大半は溝址1の氾濫流路によって切られ、西壁の1部と主柱穴ともみるP₁・P₂の他P₃・P₄の穴を検出したにすぎない。このため住居址の規模を知ることはできなかった。南西隅のコーナーからみて隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は測れない。壁高12cm、緩やかな壁面をみる。ローム層に掘りこみ僅かに残る床面は堅い。P₁のP₂を主柱穴とみると、その間隔は2.1mで小型の住居址とみられる。

遺物は少なく平安時代の土師器鉢1、須恵器壺1の出土をみている。この期の住居址である。

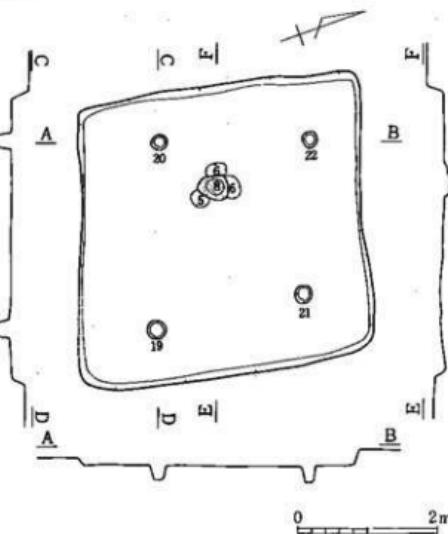
② 2号住居址（挿図23、第17図）

3号・4号住居址の北に接し、完掘する。4.1×4.1mのゆがむ隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方N72°Wを示す。壁高25～17cmや直に褐色砂質土に掘りこみ、壁面は堅い。主柱穴はP₁～P₄の4個、炉址は中心より北に寄ってあり地床炉とみるが、3個の石のはずされた跡を残している。

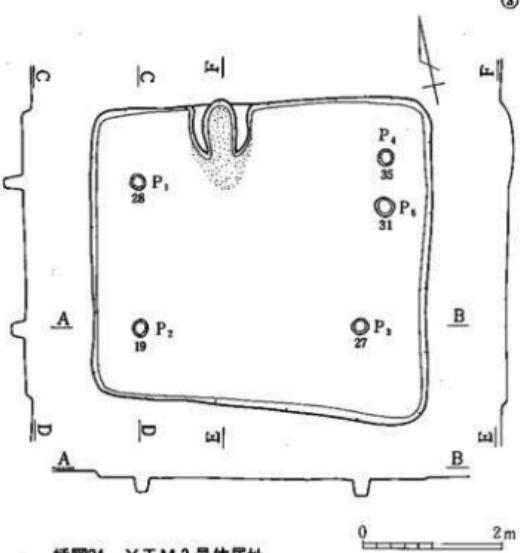
遺物は少なく、縄文時代晩期の条痕文土器片5点と打石斧1の出土をみたにすぎない。縄文時代晩期の住居址とみたい。



挿図22 YTM 1号住居址・溝址1



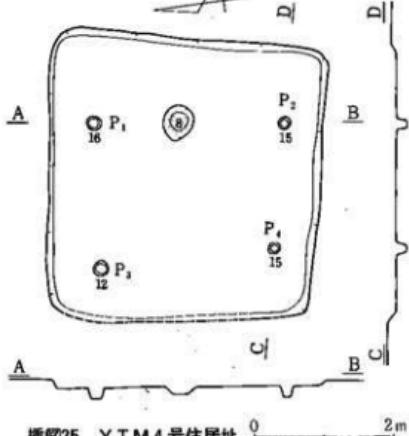
挿図23 YTM 2号住居址



挿図24 YTM 3号住居址

③ 3号住居址 (挿図24, 第17図)

No25センター杭7mにあり、4号住の上にのり、2号住の南に接し、完掘する。4.5×4.8mのゆがむ隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N18°Eを示す。壁高10cm前後、やや直に掘りこまれ、東側は15号住、西側は4号住、北の一部は2号住の上にのり、床面は砂質褐色土となり、部分的に堅い。平坦ではなく、東側は低くなる。上面の状態をみると、水田造成時に削平され、砂質土のため床面には荒れている箇所もある。



挿図25 YTM 4号住居址

遺物はカマド両側に集中して出土をみている。古墳時代後期の土師器壺・小形壺の出土をみ、この期の住居址である。

④ 4号住居址 (挿図25, 第17図)

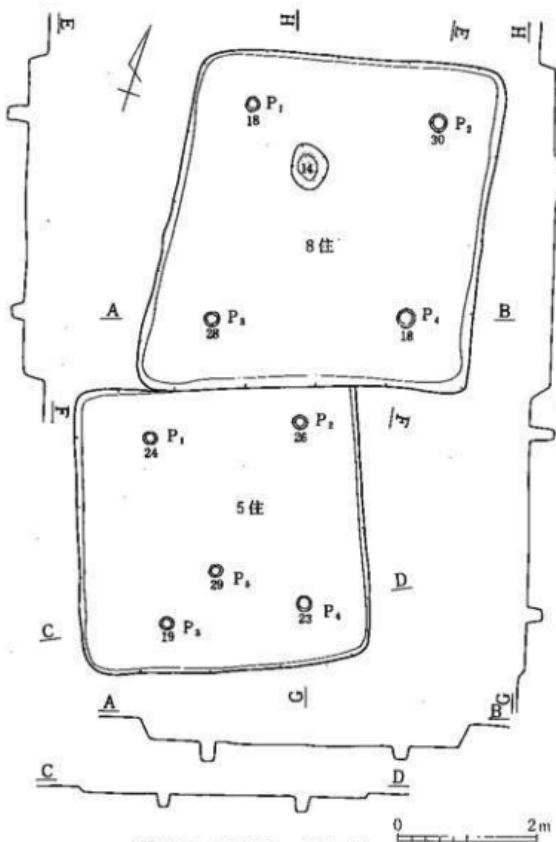
3号住居址と重複し、僅かに下層にあり、西壁は水田の水路によって調査不能となった。南北3.9mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N115°Eを示す。壁高13~6cm緩やかな壁面をなす。床面は砂質褐色土となり堅い。支柱穴はP₁~P₄の4個であり、その配置は良くない。炉址は東側柱穴間中央にあり、円形の地床炉である。

遺物は少なく、弥生時代後期の壺・甕・碗片の出土をみる。弥生時代後半中島式の住居址である。

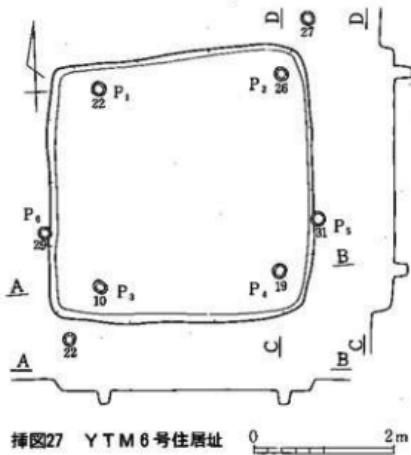
⑥ 5号住居址（挿図26、第18回）

8号住居址の南に接し、南東側は平安時代の10号住居址の上にのり、完掘する。4.05×4.1mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向推定N 12°Wを示す。壁高8～7cm、やや直に黄砂土に掘りこみ、床面は堅く、平坦である。主柱穴はP₁～P₄の4個、住居の中心より南によってP₅がある。焼土は検出できなかった。

遺物は青磁片1点があり、縄文時代中期後半土器片の混入をみるが、中世の住居址である。



挿図26 YTM 5・8住居址

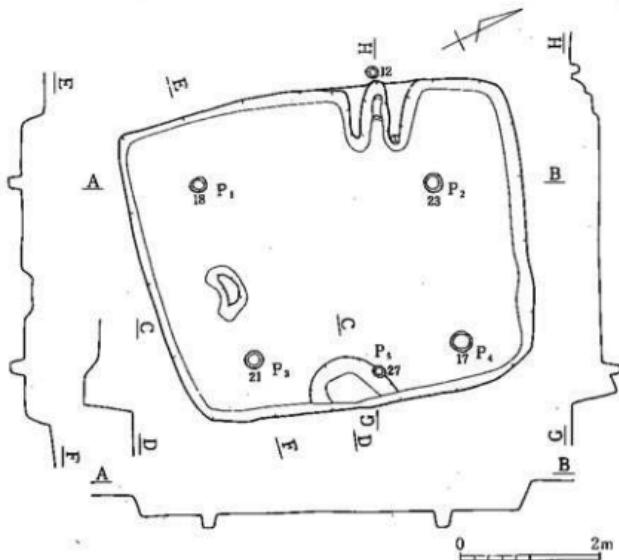


⑥ 6号住居址（挿図27）

No.25センター杭東5.5mにあり、完創する、3.9×3.75mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N5°Eを示す。壁高15~10cm、緩やかな壁面をなす。床面は暗乳白色砂土に掘りこみ、あまり堅くなく、平坦である。主柱穴はP₁~P₄の4個があり、東・西壁に対称的につくP₁・P₄がある。焼上はない。炉址・カマドの痕跡は検出できなかった。

遺物は山茶碗片の出土をみたのみであり、中世の住居址とみる。

⑦ 7号住居址（挿図28、第18図）



挿図28 YTM 7号住居址

No25北境界杭の東3m、2号住居址の東3.5mにあり、完掘する。4.55×5.5mのややゆがむ隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向N48°Wを示す。壁高45~30cm、緩やかな壁面をなす。床面は粘質黄褐色土に掘りこみ、平坦で堅い。主柱穴はP₁~P₄の4個、比較的残りこみで、不整形な配置にある。P₁・P₂のはば中間に80×35cmゆがむ楕円形の高さ10cmの焼土がある。東壁ドやや南寄りに径125cm、深さ23cmの掘りこみがあり、北西部にP₃がつく。貯蔵穴と入口部を兼ねるものと思われる。カマドは西壁中央より北寄りにつき粘土カマドである。火床に支脚の石が残る。

遺物 中層から下層にかけ、カマドから焼土塊の間に多くみられ、床面出土は少なく、カマド内の遺物はない。土器は古墳時代後期土師器壺・小形甌があり、混入の縄文時代中期後半土器片1・打石斧1・磨製小形石器の出土をみている。古墳時代後期の住居址である。

⑧ 8号住居址（挿図26、第18図）

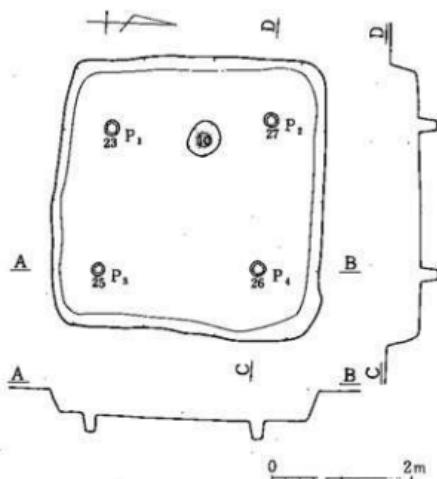
No26センター杭に北東隅にかかり、南に5号住、東に11号住に接し完掘する。4.75×4.5mゆがむ隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向N5°Eを示す。壁高30~26cm、やや直に黄砂土に掘りこみ床面は比較的平坦で堅い。主柱穴はP₁~P₄の4個、比較的整った配置にある。炉址は北側柱穴間の中間より内側にはいっており、円形の地床炉である。

遺物は僅少で、土師器の坏片1点と条痕土器1点がある。住居址の時期は決めがたいが、その形態からみて、縄文時代晚期の住居址と思われる。

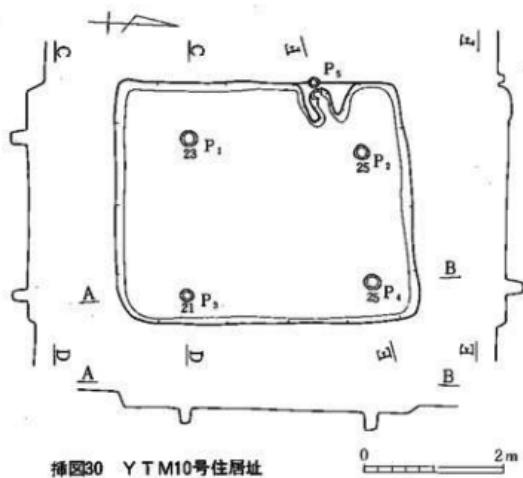
⑨ 9号住居址（挿図29、第18図）

10号住居址の東0.7mに、No26南境界杭北2.2mにあり完掘する。4×3.9mの隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向N84°Wを示す。壁高43~33cm、ゆるやかな壁面をなす。床面は粘質褐色土に掘りこみ、ロームの貼り床となり堅い。主柱穴はP₁~P₄の4個、比較的整った配置にある。炉址は西側P₁・P₂柱穴中間を僅かに内に寄っており、楕円形、深さ10cm掘りこみの地床炉である。

遺物は中世末の燈明皿1の出土のみであるが、住居址の形態からみると弥生時代か、縄文時代晚期ともみられるがその確証はなく、その時期は不明である。



挿図29 YTM 9号住居址



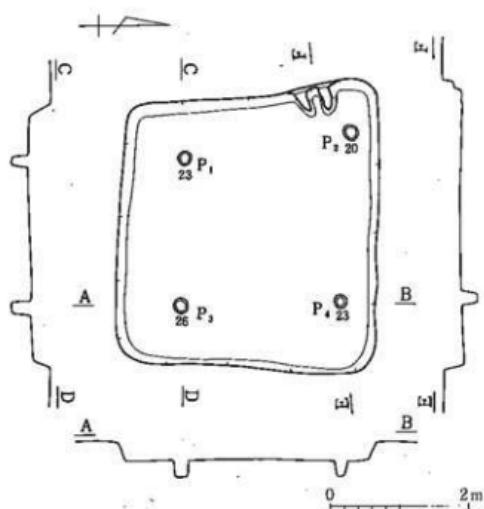
挿図30 Y T M10号住居址

⑩ 10号住居址（挿図30）

中世の5号住居址が北西4分の1弱にのり、南東0.5mに9号住があり完掘する。3.45×4.3mのややゆがむ隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N92°Wを示す。壁高25~11cmやや緩やかに粘質褐色土に掘りこみ、床面は平坦で堅い。主柱穴はP₁～P₄の4個が配される。カマドは西壁北寄りにつき小型の粘土カ

マドで、壁外に突出とみる穴P₅がつく。

遺物は小片のみではっきりしないが、住居址の形態からみて平安時代と思われる。



挿図31 Y T M11号住居址

⑪ 11号住居址（挿図31）

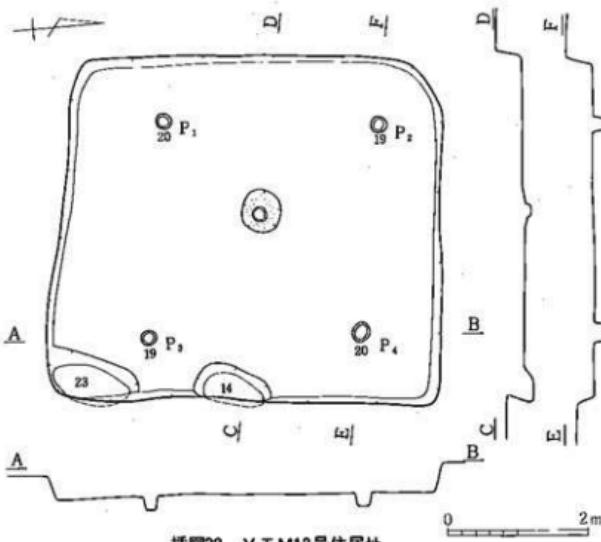
No.26センター杭東1.5mにあり、8号住居址東に接し完掘する。4.1×3.7mのややゆがむ隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N88°Wを示す。壁高30~24cm、緩やかな壁面をなす。床面は黄砂土に掘りこまれ、粘質黄褐色土の貼り床となり堅い。主柱穴はP₁～P₄の4個を配す。カマドは西壁の北に寄ってつき、小型粘土カマドである。

遺物は少なく小片のみで、はっきりしないが住居址の形態からみて、平安時代と思われる。

⑫ 12号住居址（挿図32、第18図）

No.26北境界杭の南2mにあり完掘する。5.6×4.95mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方 向N85°Wを示す。覆土中層から下層に木炭を含む。壁高38~25cm、東壁が低くなり、やや直に黄砂土に掘りこみ、床面はロームのタタキとなり堅い。主柱穴はP₁~P₄の4個が比較的整った配置にある。東壁ほぼ中央部下に長径110cmの半楕円、深さ14cm壁を抉りこむ掘りこみがつき、位置からみて入口部とも思われる。また、南東隅壁下に長径120cmの半楕円形、深さ23cm壁に抉りこむ掘りこみがあり、貯蔵穴と考えられる。炉址が住居址の中心部近くにある。径55cmの円形の浅い掘り込みの地床炉であり、中に径20cmの円形に甕の抜かれたとも見る痕跡を残している。

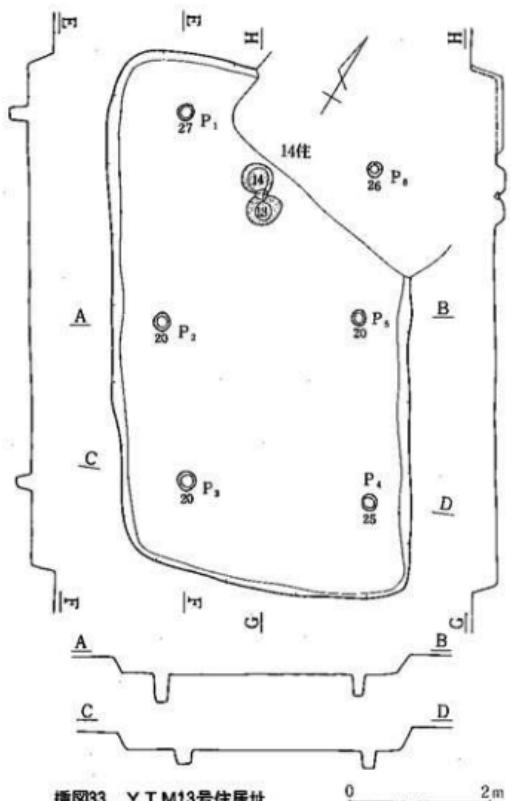
遺物は下層から床面にわたって西と東の壁寄りに多くみられた。土器は弥生時代後期の壺、甕片であり、磨製小形石器の末製品の出土をみている。弥生時代後期中島式の住居址である。



挿図32 Y.T.M12号住居址

⑬ 13号住居址（挿図33）

12号住居址の南東1mにあり、北東側は時代不明の14号住居址に切られ、一部を残し発掘するが、北の用地外の水田より水が溢れ、不十分な調査となる。7.3×4.2mのゆがむ隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向N8°Wを示す。壁高37~33cm緩やかな壁面をなす。淡灰黒色砂土を掘りこみ、床面は植物遺体を僅か含む粘質黒褐色土となり、あまり堅くない。主柱



插図33 YTM 13号住居址

主軸方向N92°Wを示す。壁高45~43cm、緩やかな壁面をなす。床面は黄砂土となり堅い。主柱穴はP₁~P₄の4個が配せられる。炉址は中心よりやや西に寄ってあり、地床がである。遺物は南壁から東壁ぎわにみられ、下層から、床直上の出土である。小片のみではっきりしないが、弥生時代後期後半の住居址とも考えられるが、不明である。北用地外の水田の溢れ水がたまり不十分な調査となつたものである。

⑩ 15号住居址（挿図35）

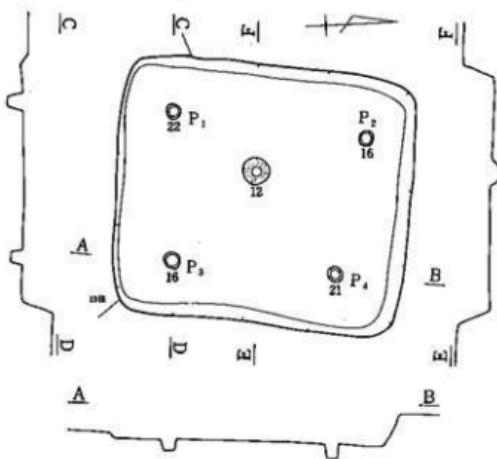
3号住居址が上部21~30cmに大半がのっており、完掘する。3.75×3.5mの隅丸方形の堅穴住居址で、主軸方向N66°Wを示す。壁高33~22cm、ほぼ直に黄褐色砂土に掘りこみ、床面は堅い。床面直上に中央部から西1.2×1.4mの範囲に拳大の石の集石がある。主柱穴はP₂

穴はP₁~P₅の5個が検出されているが、14号住内に検出されたP₆は配置から本址のものとみられ、6個配されたと考えられる。炉址は住居址中心部と北壁の中間にあり、北側に径45・深さ14cm、南側に径50・深さ12cmの円形の地床が並ぶ。南側には焼土が多く、また、少ないながら遺物が周辺にみられた。

遺物 繩文時代後・晩期とみる土器小破片が僅かに出土しており、住居址の形態から縄文時代晩期とも思えるが、不明である。

⑪ 14号住居址（挿図34）

12号住居址の東2mにあり、時代不明の13号住居址の北東隅を切っている。北の用地外の水田より水が溢れ、完掘するが不十分な調査となる。3.8×4.2mの隅丸方形の堅穴住居址で、



挿図34 YTM14号住居址 0 2m

～P₄の4個が配せられる。集石上部をはずすと炉址が検出された。径50～55cmの円形に疊で囲み、深さ18cm掘りこむ石囲炉である。上部集石は住居廃絶時の投入とも考えられる。

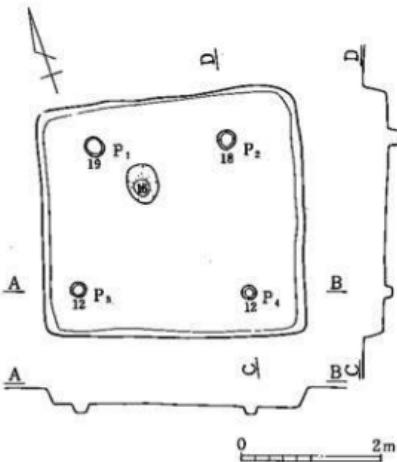
遺物は少なく、縄文時代晩期の条痕文土器片の僅かな出土をみたにすぎない。この期の住居址とみたい。

(2) 土 坑

① 土坑1（第20図）

No25北境界杭より南東2.5mにあり、7号住居址の北西1mにある。東西125×南北84cmの楕円形をなし、深さ23cm黄褐色土をやや緩やかな傾向をもって掘り込み、底部は比較的平らであり、東壁下に深さ20cmの穴がつく。南壁下底部に古銭20個が紐につながれた状態で出土をみている。

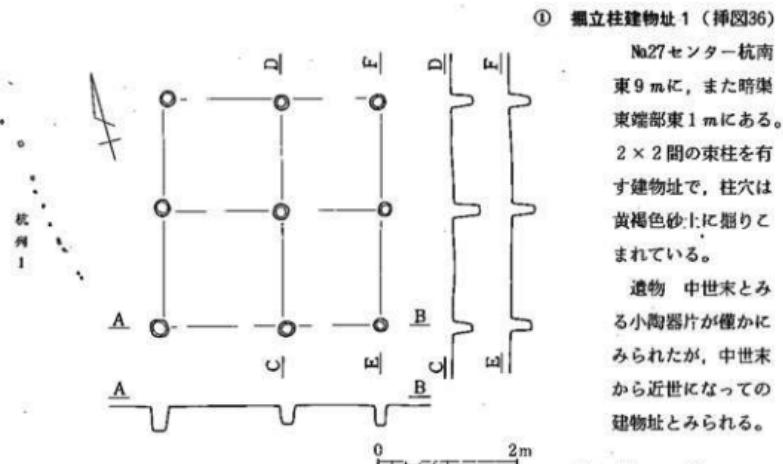
古銭は開元通宝（621）1、淳化元宝（990）1、天禧通宝（1017）1、皇宋通宝（1039）4、



挿図35 YTM15号住居址 0 2m

嘉祐元宝(1056)2, 治平通宝(1064)1, 熙寧元宝(1068)3, 元豐通宝(1078)3, 不明4個あり、いずれも宋錢である。最も新しいものは元豐通宝1078年であり、これからみて中世前半に位置づく土壤とみたい。

(3) 捜立柱建物址



挿図36 YTM 捜立柱建物址 1・杭列

(4) 杭列

① 杭列 1 (挿図36)

建物址1号の西1mに南北方向に並び、2.5mに11本の杭が検出された。現水田の畦下に打ち込まれており、畦の補強のためのものである。杭は栗材とみられ、長さ60cm、割り木の2面を削って底辺が5cm程の三角形に仕上げている。

遺物はなく時期を決めがたいが、伊賀井の関連からみて、中世末から江戸時代にはいってからのものとみられる。

(5) 溝 址

① 溝址 1 (挿図22)

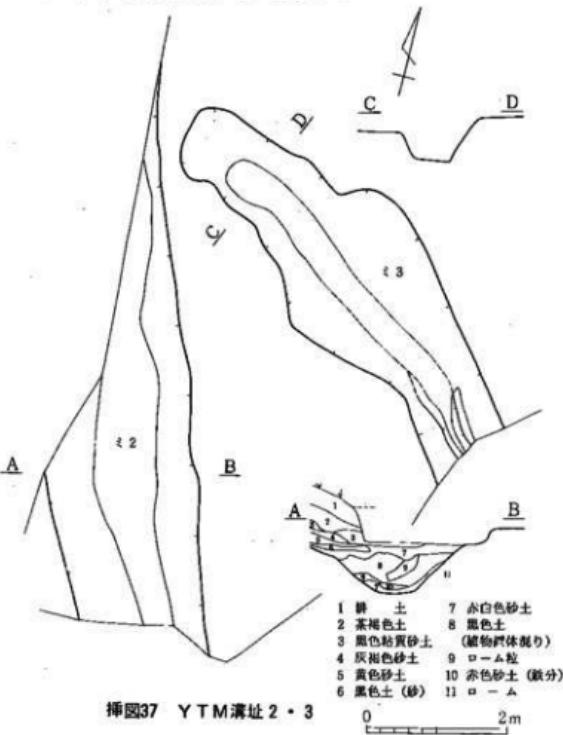
平安時代の1号住居址の大半を切っている。№24センター杭南西6.5~南東18.5m間の14mを調査する。北側は農道となっており、未調査であるが、センター杭北側の調査では氾濫の砂の深い堆積で溝址は検出できなかった。南側は用地外の果樹園となっている。溝址北側は幅0.4m、順次幅を増し、南3mでは1.4mとなる。底部はローム層を掘り、40cm前後の深さで凹凸がみられる。荒い砂で大半は埋まっていた。さらに南0.8mで径1m余の円形、

深さ90cmの抉りこみができる。白砂と疊で埋まる。氾濫の余波を受けた流路とみる。平安時代の1号住居を切っていることよりみて、中世以後のものとみられる。

② 溝址2（挿図37）

No.23センター杭南

10mに検出され、南北に用地外、北西側は移転家屋の残りがある。荒れており調査不能となる。調査は南北8mの範囲に終わる。北側はセンター杭を結ぶ線上のグリッド調査では氾濫の砂の深い堆積となっており、不明であった。溝址は幅約2m、深さ70~50cmで疊混りのローム層に緩い傾斜をもって掘りこみ、断面は逆台形をなす。北北西から南南東への流路を示す。覆土上層は黒色土があってその



挿図37 YTM溝址2・3

下に白砂の浅い堆積があり、中・下層は25~40cmの植物遺体を含む黒色土層は長期の水の流れを示す堆積とみられ、溝址2は井戸水址とも考えられる。

遺物に土師器壊片1点があるが、伊賀良井の変遷からみて、中世後半のものと思われる。

③ 溝址3（挿図37）

溝址2の調査北端部より東50cmより発し、南東へ向い用地外へとはいる。6mの範囲を調査する。幅1.1~2.3m、深さ43~50cmローム層を緩い傾斜の掘りこみをなし、覆土は砂利と砂の堆積で埋まる。底部は凹凸があり、北側が深く、南側が僅かに浅くなっている。氾濫の余波を受けた流路とみられる。

(6) 暗渠

① 暗渠1（挿図38）

No26～27センター杭のほぼ中間より南2.5mに北端部があり、これより南12mで用地外にはいり、主軸方向N20°Eを示し、南境界線より4.5m、北端より7.5mで丁字状に東に折れ、東15mで終わり、主軸方向N72°Wを示す。黄褐色土に幅40～50cmの断面四角の溝を掘り、両側に15cmの前後の石を内側の面を揃えて並べ、10～15cmの溝状をなすようにしている。その上に35cm前後の平らな石をすき間なく並べて天井とし、さらに横と上に小蝶をぎっしり詰めて固めている。溝内部は側石よりさらに下に掘りこまれており、北端から南へ緩い傾斜をなし、南境界へはいる地点での比高差6cmを測る。東へ折れる地点と東2mでは西が3cm低くなるが、これより東は低くなり、東端部との比高差は13mで11cmの緩い傾斜を示すもので、底部に細かい泥のたまりもみられ、水の流れをうかがわせた。

遺物の出土はなく、時期は決めがたいが、中世以後のものであろう。（佐藤魁信）

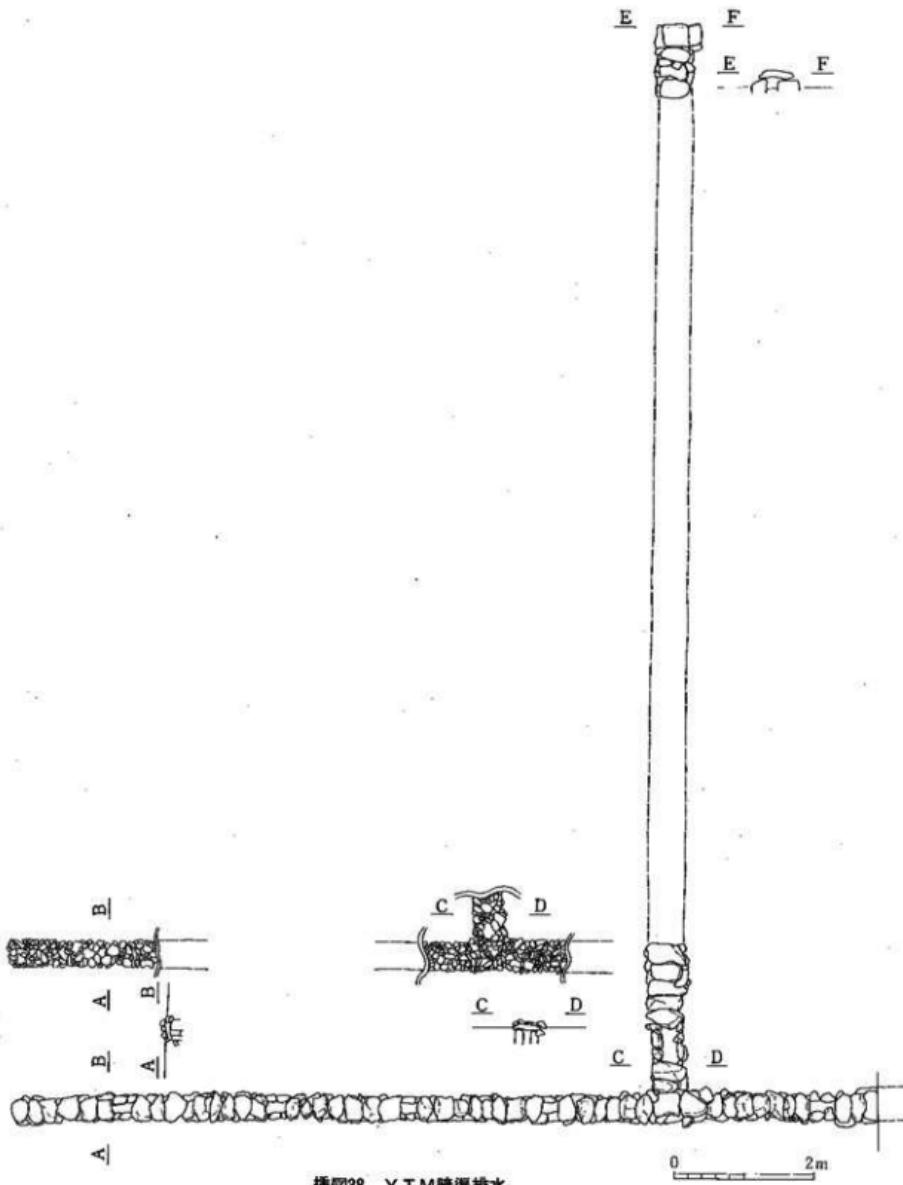


插图38 YTM暗渠排水

IV ま と め

1 小 垣 外 遺 跡

遺跡は中央道飯田インターチェンジを中心に西から東へ延びる扇状地に立地する。昭和47年中央道遺跡発掘調査では南に接する辻垣外遺跡をあわせ一遺跡として扱っており、100m四方の用地内の調査を行っている。その調査の結果、住居址22軒—縄文時代前期末4・縄文時代中期後半4・平安時代2・中世8・不明4—上坑111基、柱穴群3、土器集中地2、焼土群1、配石1を発掘し、遺構は用地外西方に広がることを確認している。この調査で重視されたのは、下伊那地方で数少ない縄文時代前期末住居址4軒と、多くの同時期の上坑群があり、そのあり方である。また、土器集中地・焼土群は縄文時代後期であり、堀之内式の好資料の出土をみている。

国道153号線飯田バイパスに伴う今次調査はインターチェンジ入口東側、国道センター杭No.1～No.19間の長さ350m、道路幅25～35mの範囲であった。遺構の集中検出されたNo.1～No.9間に家屋移転の際、古材焼却の掘り穴による荒れが多い。No.1～No.3の畠、No.6～No.7の田は水田造成時に削平され、遺構は消滅され、また住居址の壁は削られて僅かに周溝・柱穴・焼土等の痕跡を残すだけのものもあった。No.7北境界杭を僅か離れた用地外の畠より、耕作時出土した遺物に弥生時代後期土器・石器、古墳時代後期の土師器があり、水田造成時に消滅した遺構の存在を示すものとして注目される。大井川に接するNo.17～No.19の間は比高差2m程の段をなして下がり、毛賀沢川の旧河道とみられ、湿田帯となっていた。

発掘調査した遺構は住居址8軒・竪穴遺構1・溝址1・土坑25基等であり、中央道調査結果に比しその数は少ない。住居址4軒と竪穴遺構は古墳時代後期前半であり、溝址覆土上層よりは、この期の土師器・石製模造品の出土をみ、さらに下層から底にかけて弥生時代後期の土器・石器の出土をみている。中央道調査でみられなかった弥生時代後期・古墳時代後期の遺構が、インターチェンジ入口から東150mの間に南と北の用地外にわたって展開しているものと推測される。

中央道調査でみられた縄文時代前期末の遺構・遺物の出土ではなく、縄文時代後期住居址1軒は西端部にあって道路にかかり、他の1軒は東端のNo.15の南境界杭近くに検出されており、遺物は少なく、遺構の広がりを知ることはできなかった。

平安時代住居址2軒も縄文時代後期住居址同様西端と東端部近くに検出されており、西端の住居址は中央道調査時検出2軒との関連もみられ、また東端の住居址は南の用地外に続く住居址の存在が予想されるが、小垣外に隣接する三臺測遺跡の中央道調査で検出された平安期住居址は2

軒である。このような分散する平安期住居址のあり方は注視される。

溝址1はNo9センター杭東を中心にし、南から北に向い、北用地境近くで西に大きくカーブする。調査延長40m、南は道路で切られ、西は用地外へと続く。南側の1部は氾濫の余波による荒れをみるが、大部分は安定したV字をなし、幅1.8~2.5m、深さ1~1.5mの溝である。下層から底部に弥生時代後期中島式壺・甕・高坏・小形土器があり、この期の石器の出土をみている。カーブ地点から北西の上層部では古墳時代後期前半の土師器の甕・高坏、須恵器の蓋坏、石製模造品劍形の出土をみている。溝址は明らかに人工的である。溝址東はNo9センター杭東8m~No13の70m間は遺構・遺物の検出はない。西側のNo9センター杭~No5の間は移転家屋によって荒らされ、また西側は水田造成時に削平され、ロームマウンド1以外に遺構の検出はなかった。しかし耕作時北側用地外出土の弥生時代後期の壺・甕・高坏・磨石斧があり、古墳時代後期の土師器壺・台付甕等の出土をみており、これら時期の遺構の存在を推測するものである。溝址の東側には遺構はなく、西側に遺構の存在が予測できる状態にあり、溝が北側で大きく西にカーブする形態から環濠的なものとも考えられ、壺・高坏等の破片の多いことからみて祭祀的行事も行なわれたとも思われる。今後の用地外調査によって解明されるであろう。

2 八幡面遺跡

遺跡は西は大井川、東は毛賀沢川が東流したのが大きく北東へと迂回する地点までの東西200×南北80mの範囲の毛賀沢川氾濫堆積による扇状地に立地している。調査によって大井川よりの国道センター杭No21~No24間の北側は深い砂の堆積層となっており遺構ではなく、南側では遺構の一部を残すのみの氾濫の余波の痕跡を強く残していた。道路用地北側は80cm前後の比高差をもつ低地帯となっており、旧河道を示すものとみられた。No28センター杭以東は旧河道とみる深い砂礫の堆積となっていた。毛賀沢川に面す南側は一部未買収地を含め一段高位となる台地を形成している。

遺構の発見されたのはNo24~No27センター杭間に集中しているが、深い砂層の下に検出されている。

発掘された遺構には住居址15軒・土坑1基・暗渠等があり、縄文時代晚期終末期・弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代・中世と時期的広がりをもっている。しかし氾濫等の影響によるともみられ出土遺物量は少ない。

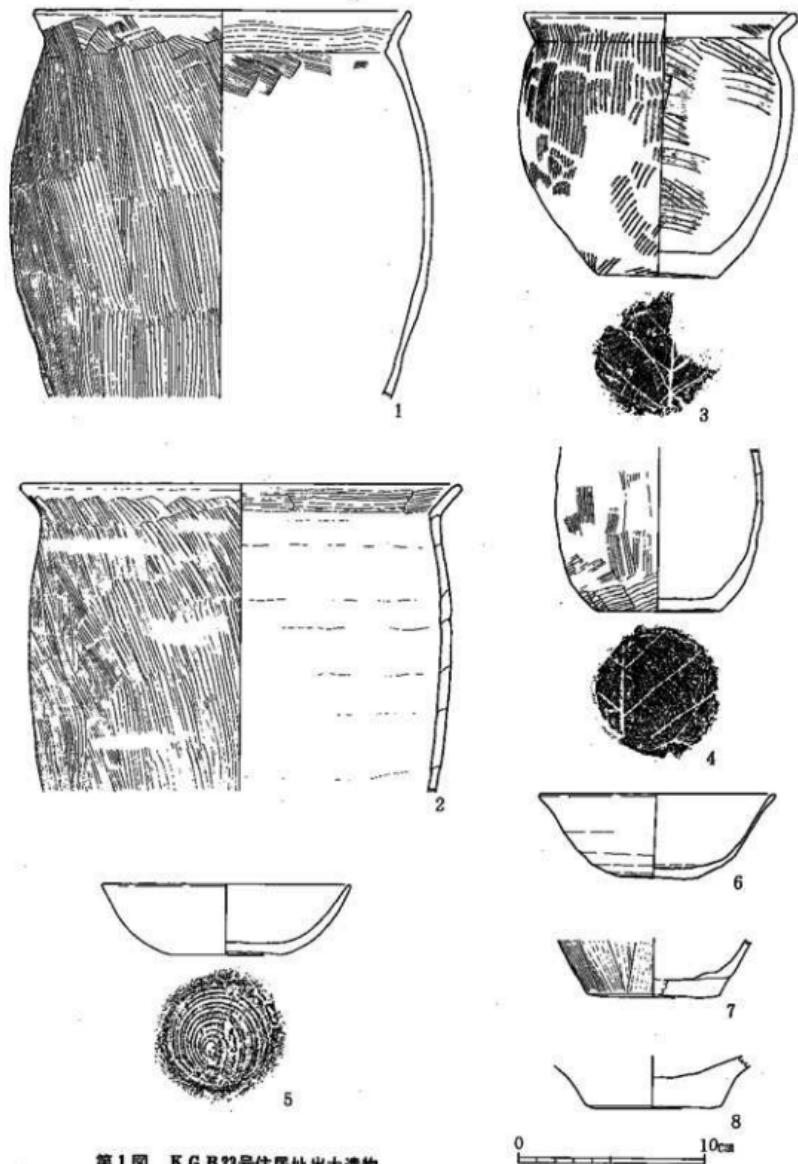
遺構中注目すべきは宋錢20枚の出土をみた土坑1号があり、整然と石を組まれた暗渠遺構のあり方は今後の究明されるべき課題といえよう。

遺構の立地には好適な場とみられたが数次にわたる毛賀沢川の氾濫による流失・埋没した遺構は多いと思われる。毛賀沢川に沿う南側の一段高位となる台地面に遺跡の中心はあるものとも推

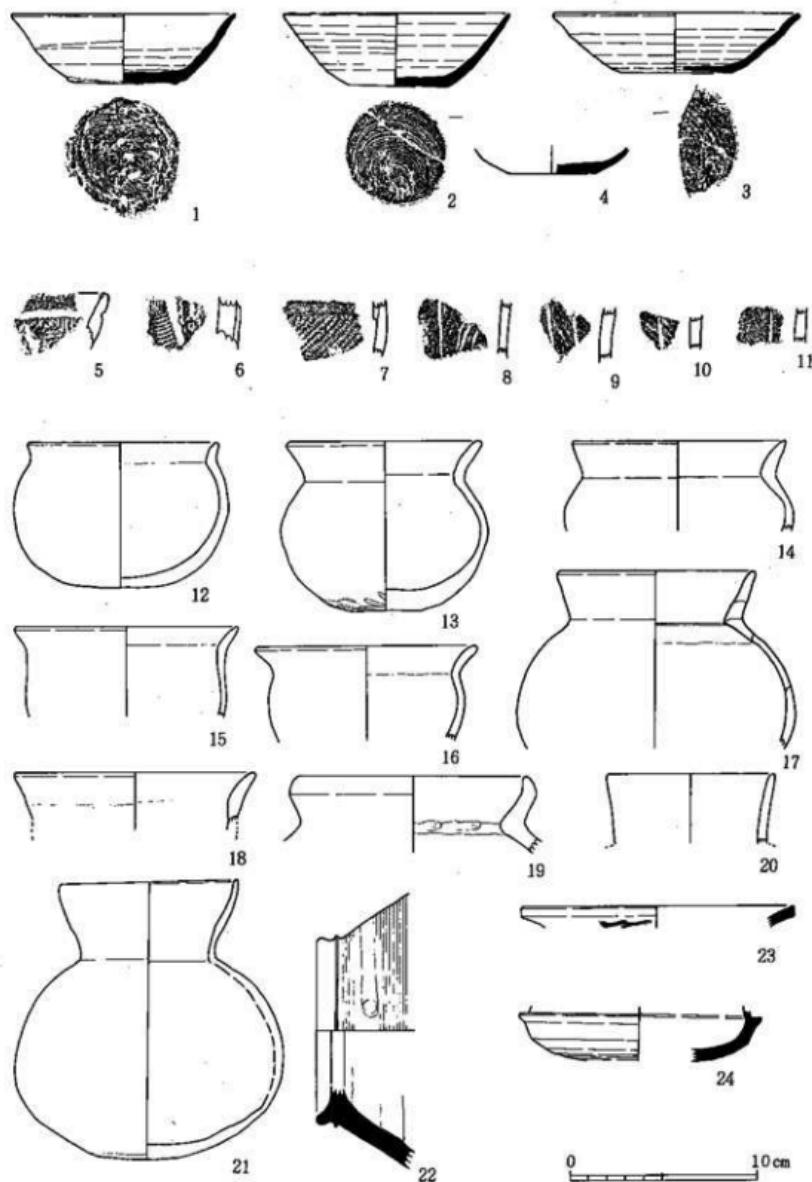
測され、今後の注意が必要である。

本書は資料提示を主とし、今後の問題を提示したものである。本書作成は小林調査員の努力によってなされたことは付記し、深く御礼を申し上げたい。

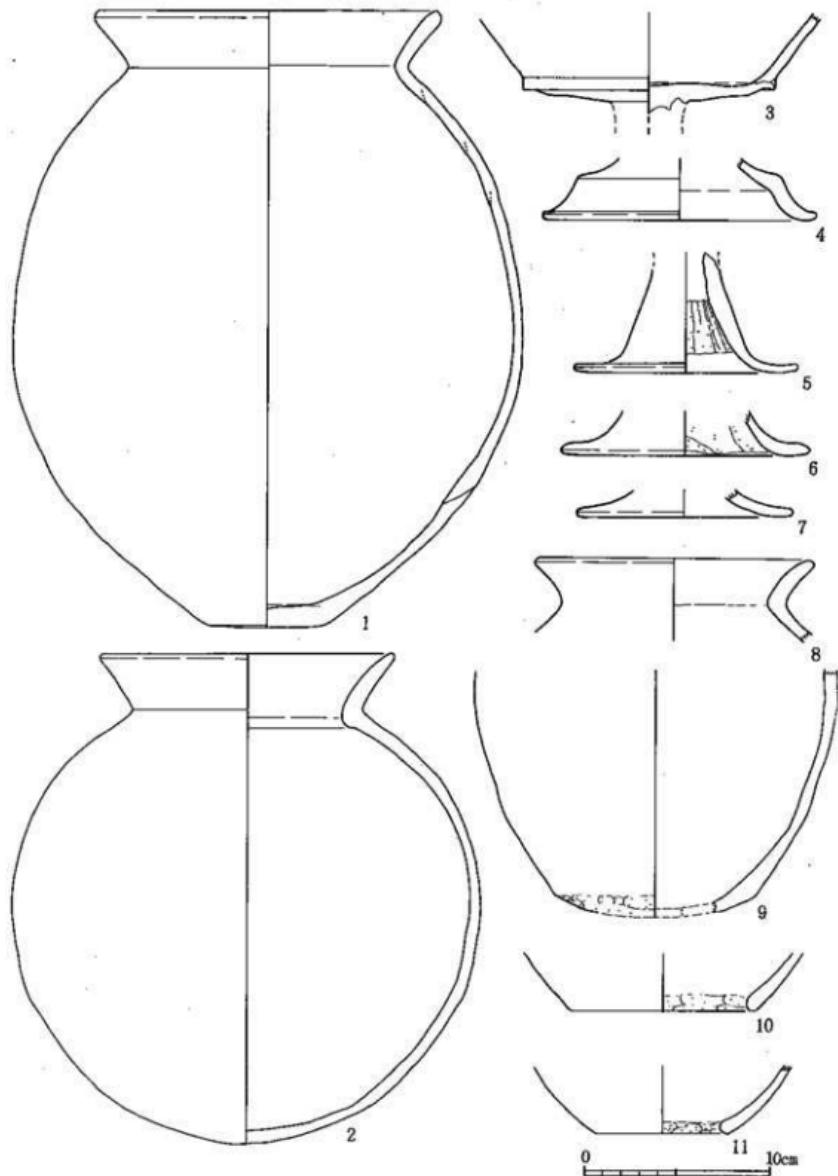
(佐藤健信)



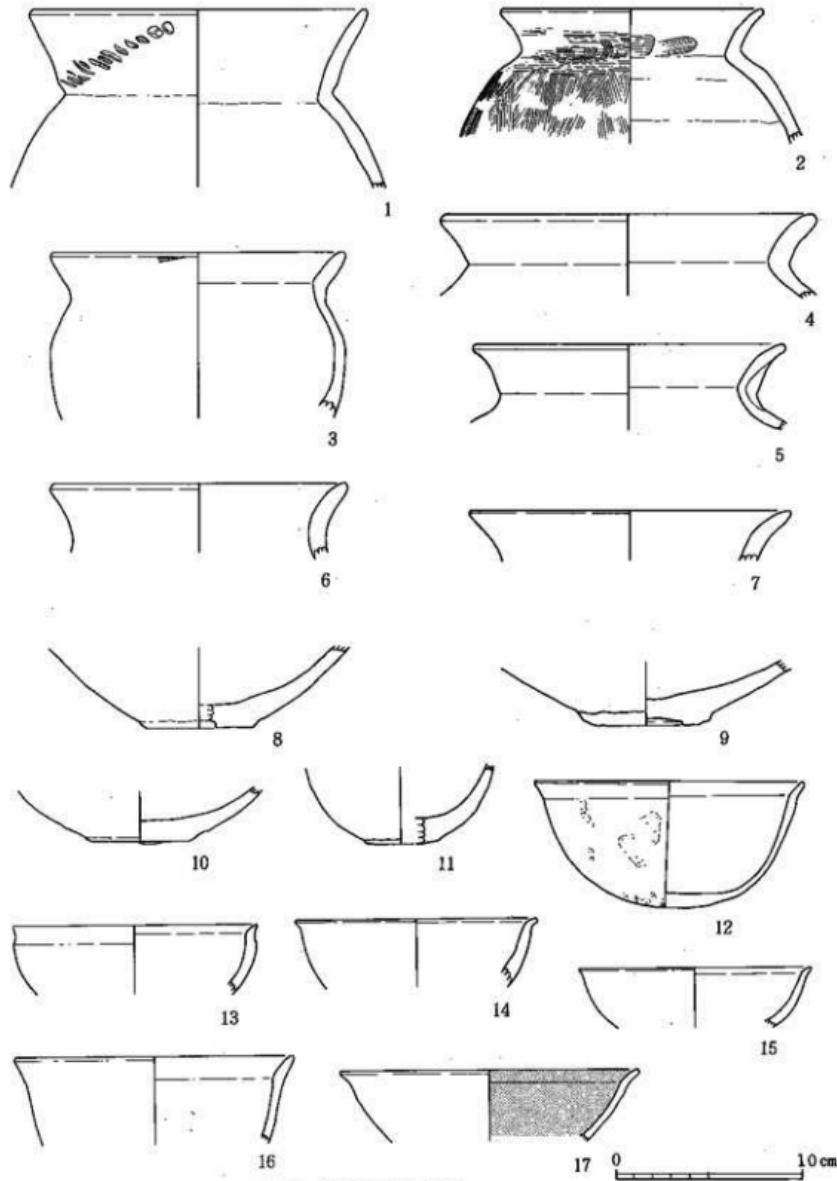
第1図 KG B23号住居址出土遺物



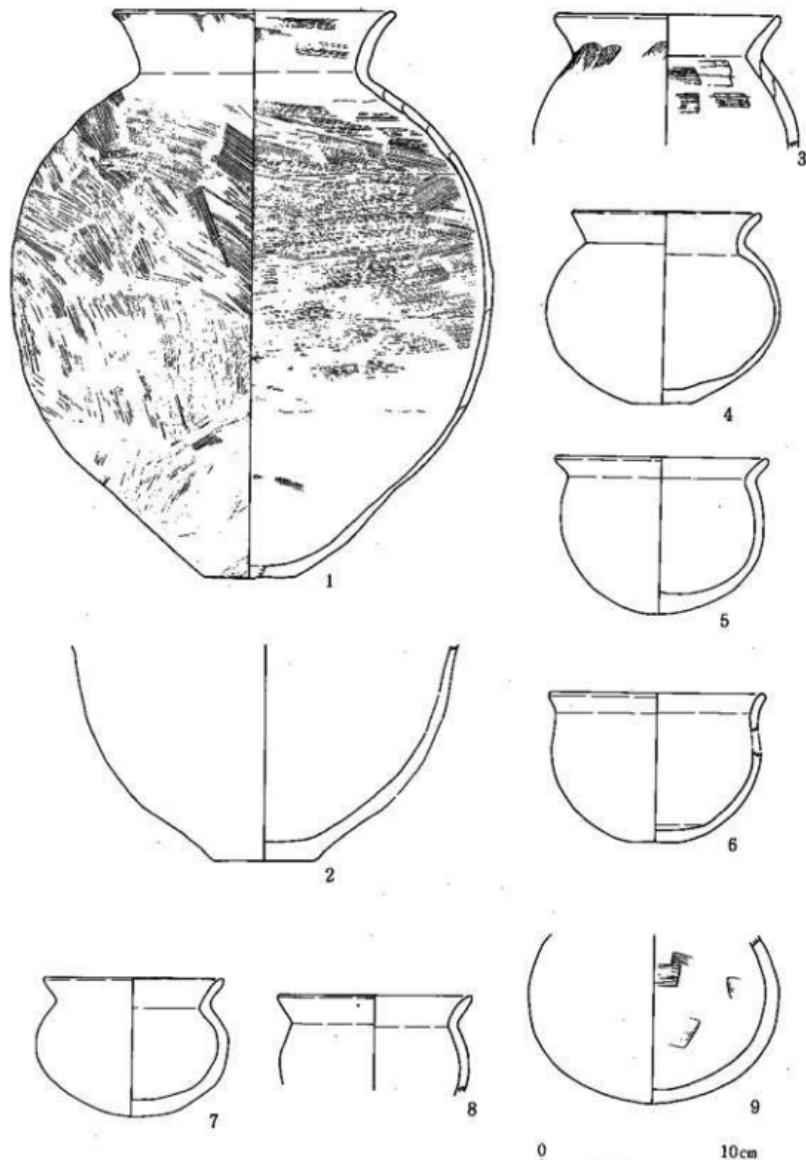
第2図 KG B 23・24・25号住居址出土遺物 (23住1~4, 24住5~11, 25住12~24)



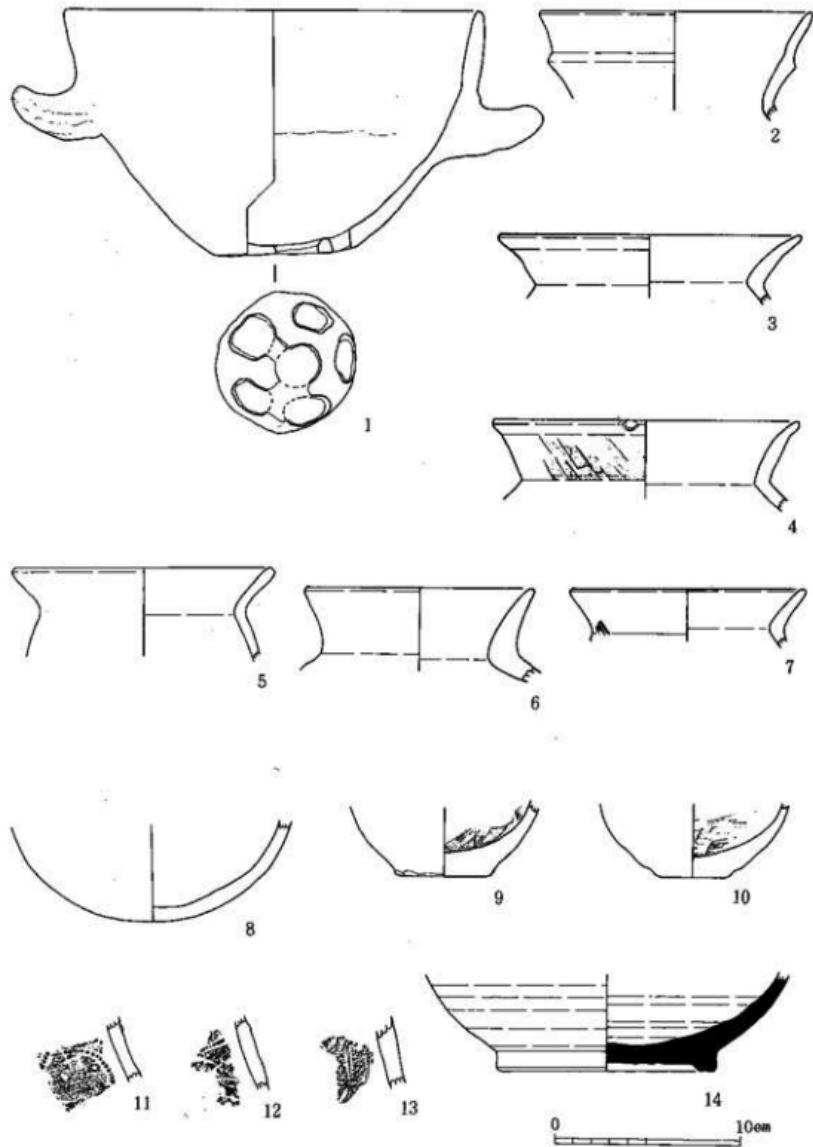
第3図 KGB 25号住居址出土遺物



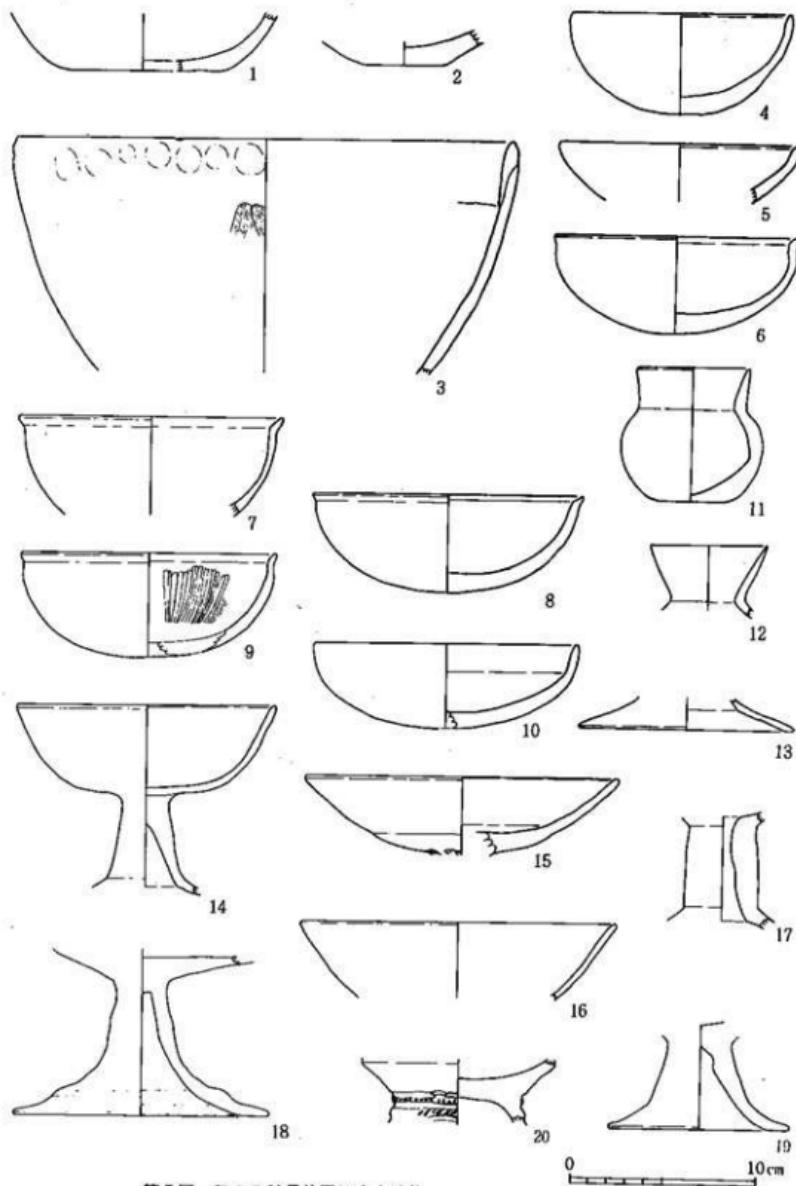
第4図 KGB 25号住居址出土遺物



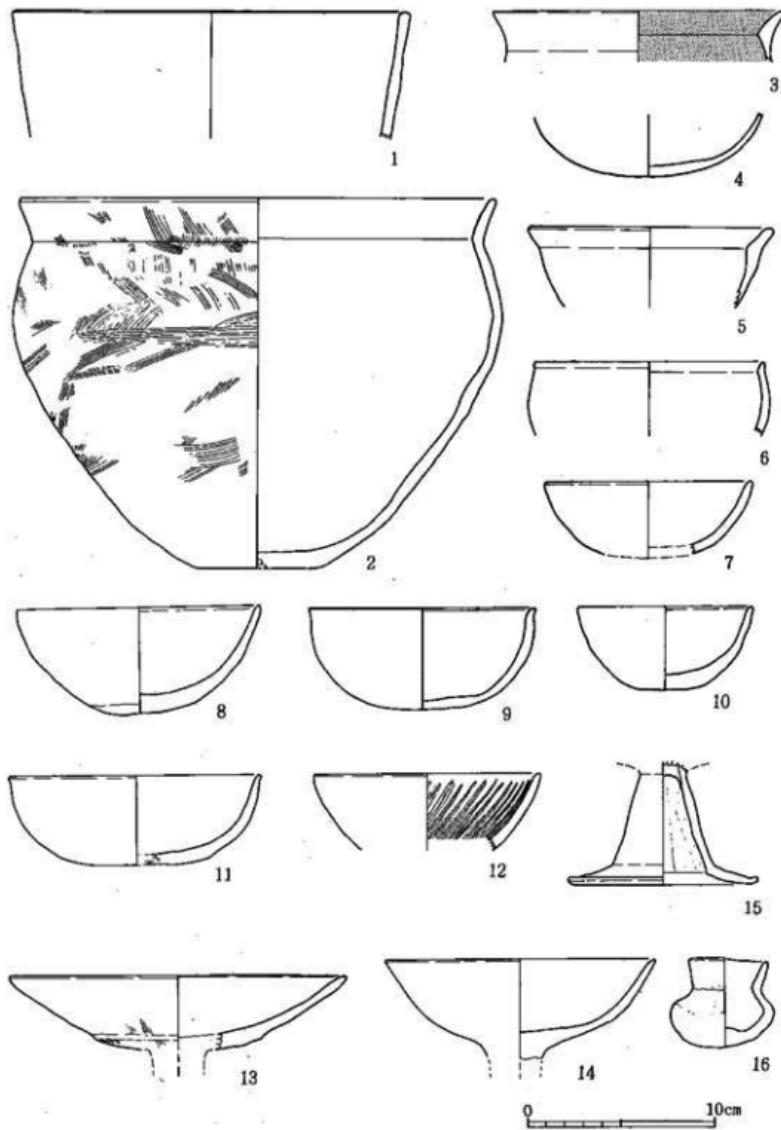
第5図 KGB 26号住居址出土遺物



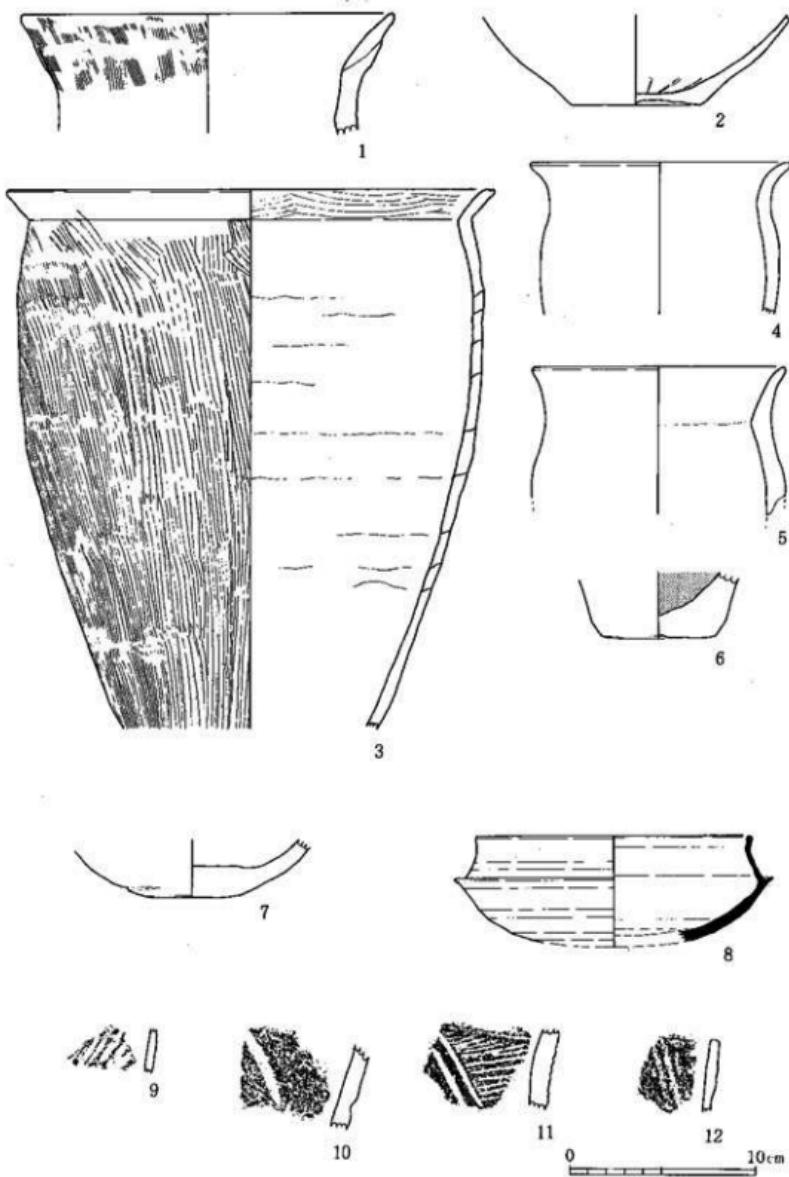
第6図 KG B 26号住居址出土遺物



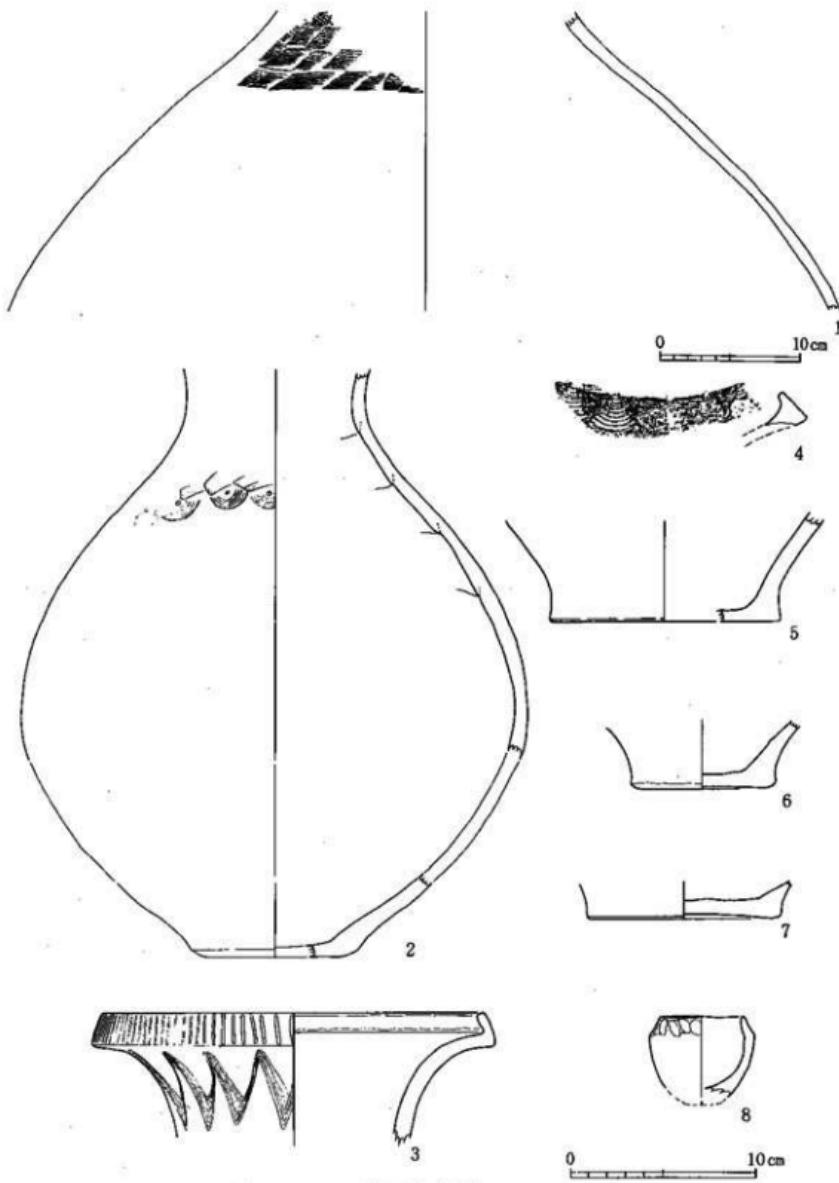
第7圖 KG B26號住居址出土遺物



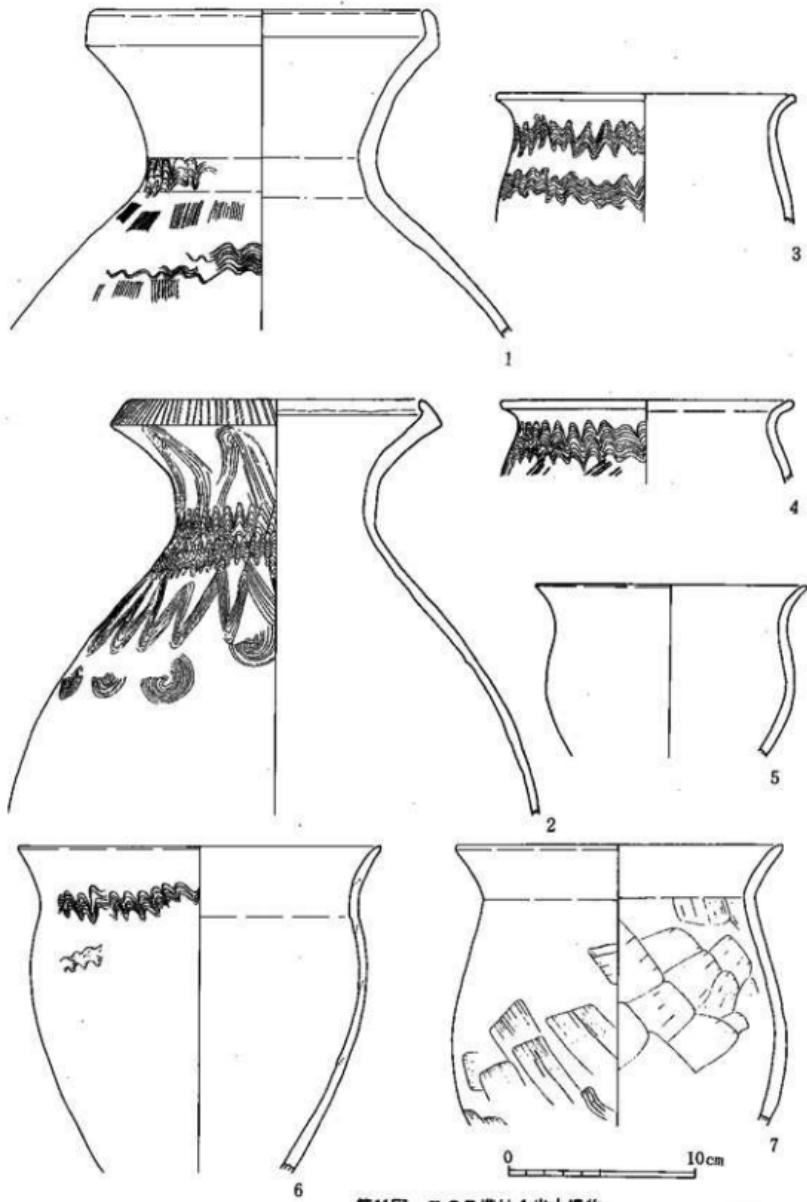
第8図 KGB 27号住居址出土遺物



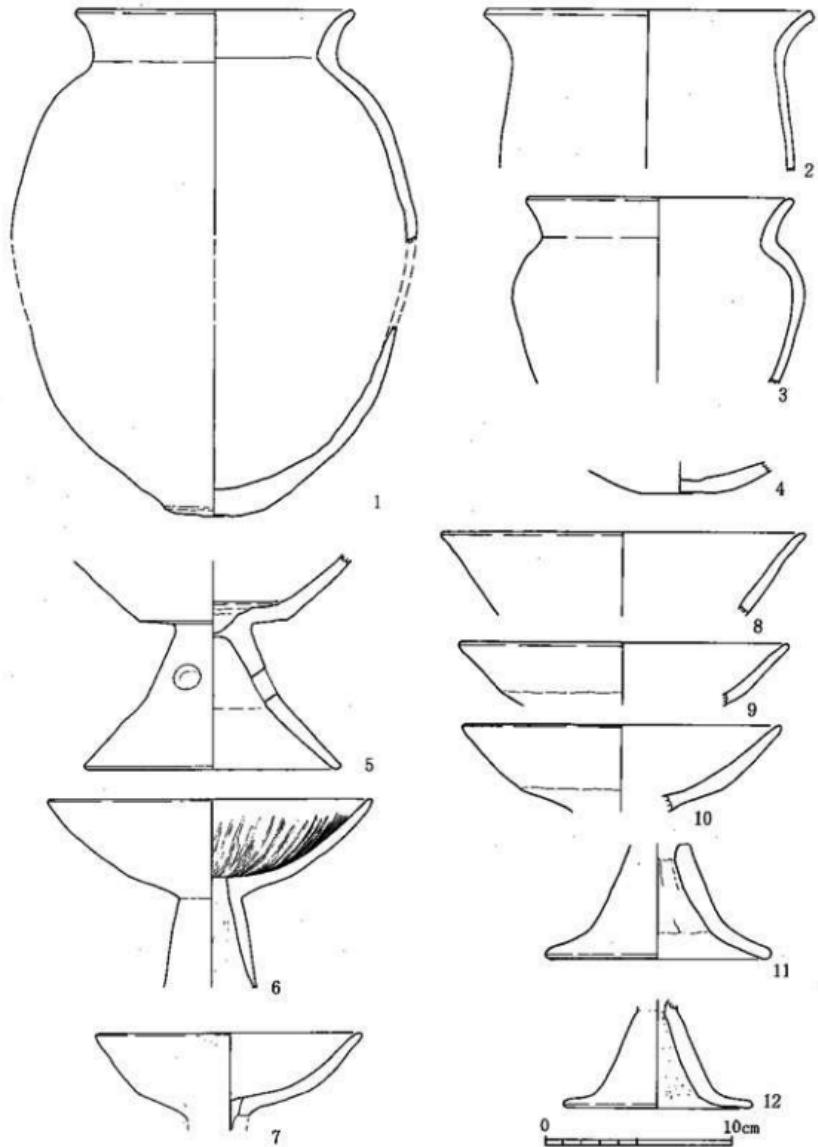
第9図 KGB 28・29号住居址、溝址1出土遺物 (28住1~5, 29住7・8, 溝址1 9~12)



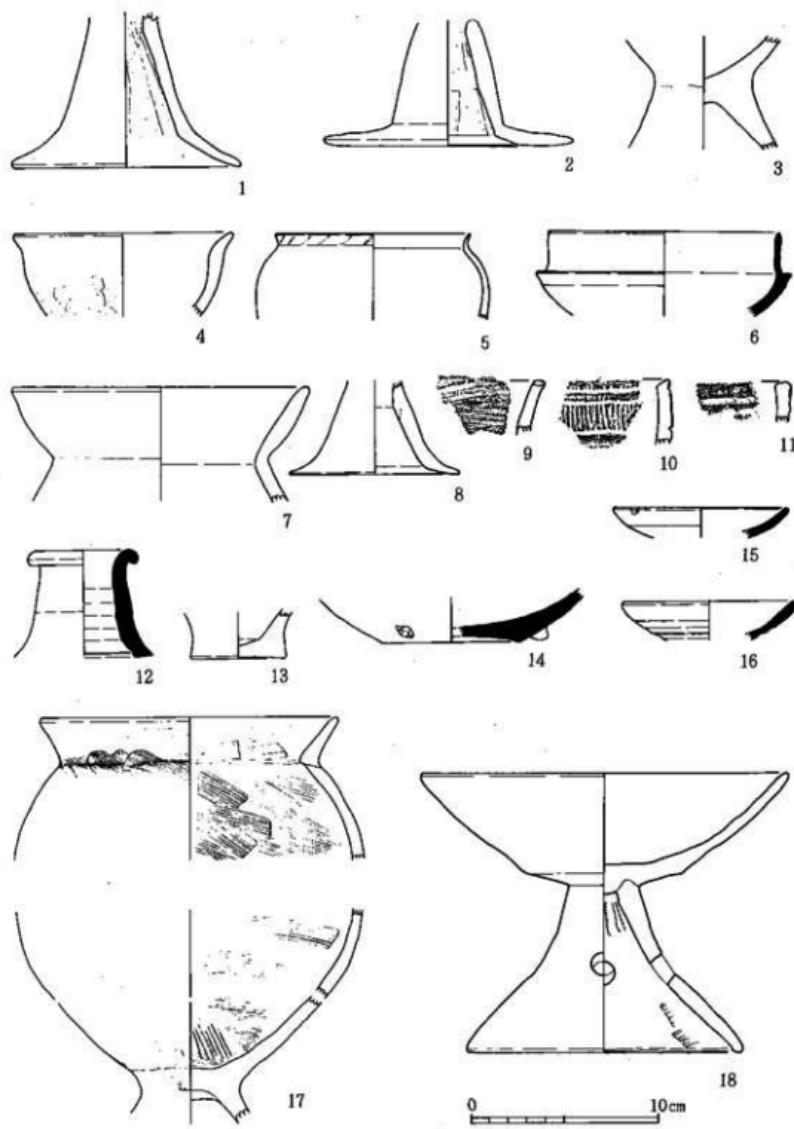
第10図 KGB溝塚1出土遺物



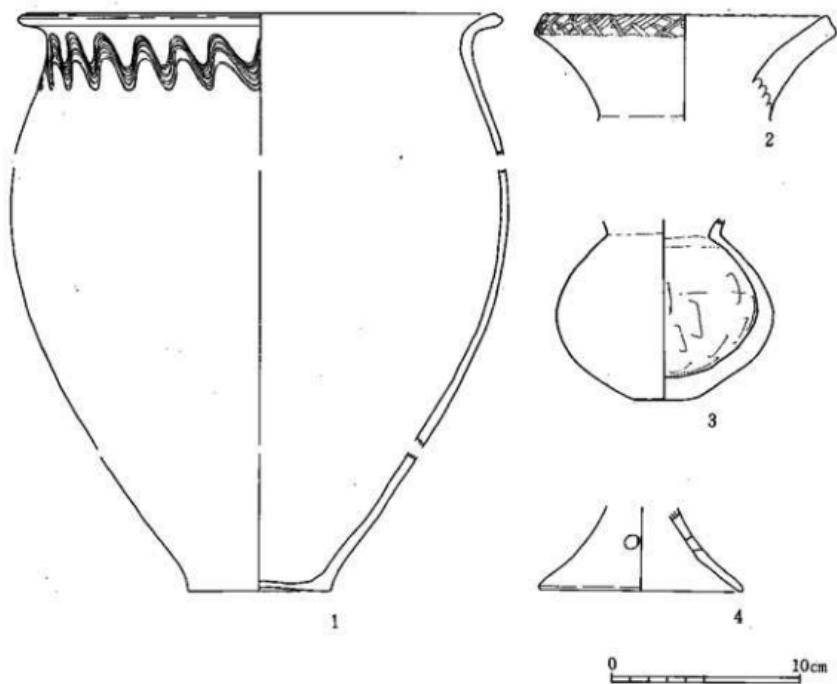
第11圖 KG B溝址1出土遺物



第12図 KGB溝址1出土遺物

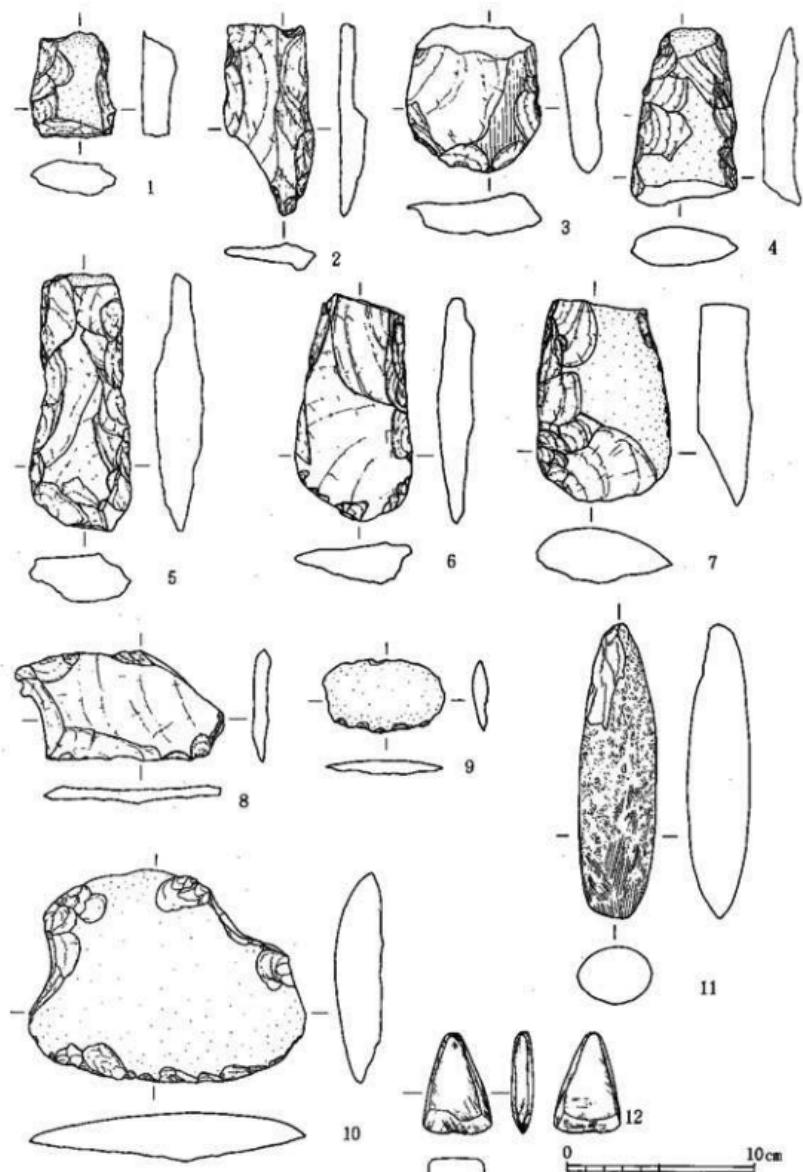


第13圖 KGB 漢址 1, 整穴, 土坑 123・125, 柱穴 4・5, 用地外出土遺物
(漢址 1 1~6, 壓 7~8, F123~9, F125~10~11, 柱 4~12~13, 柱 5~14~16, 用地外 17~18)



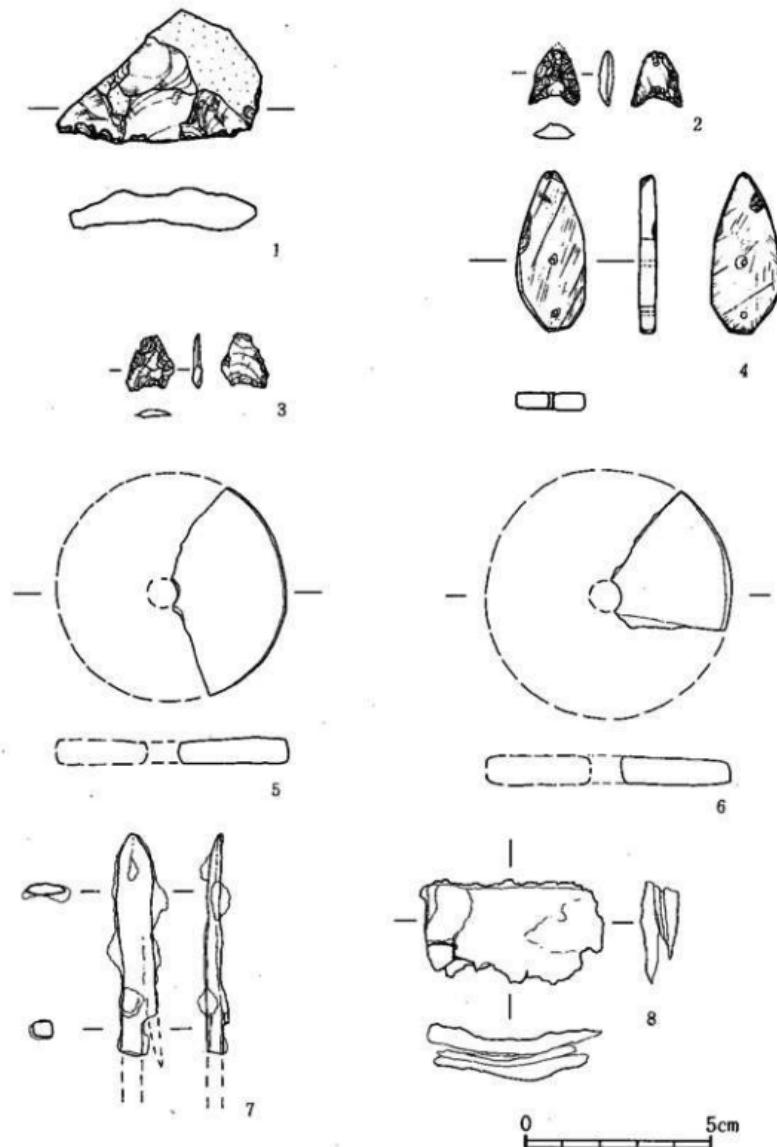
第14図 K G B 用地外出土遺物

0 10cm



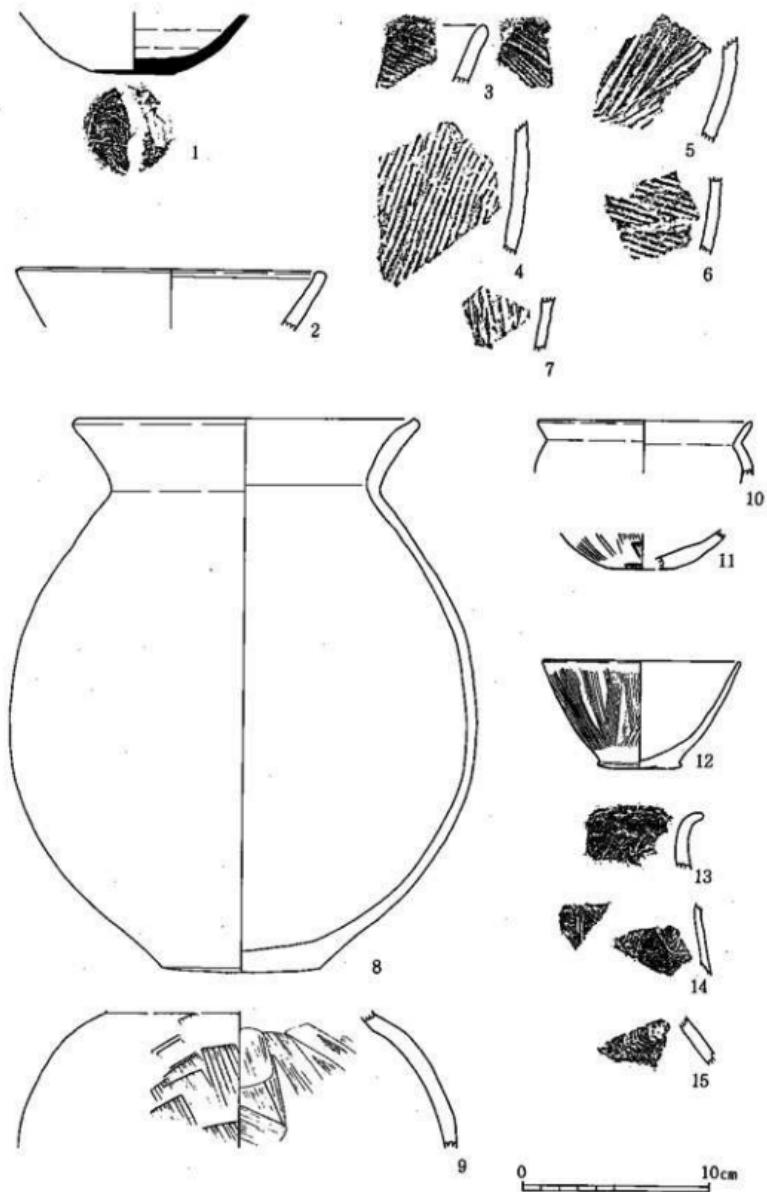
第15圖 K G B 24·30號住居址，柱穴群4·5，溝址1，遺構外出土石器

(24住1·2，30住3~5，柱4—6，柱7—7·8，溝址1—9~11，遺構外12)

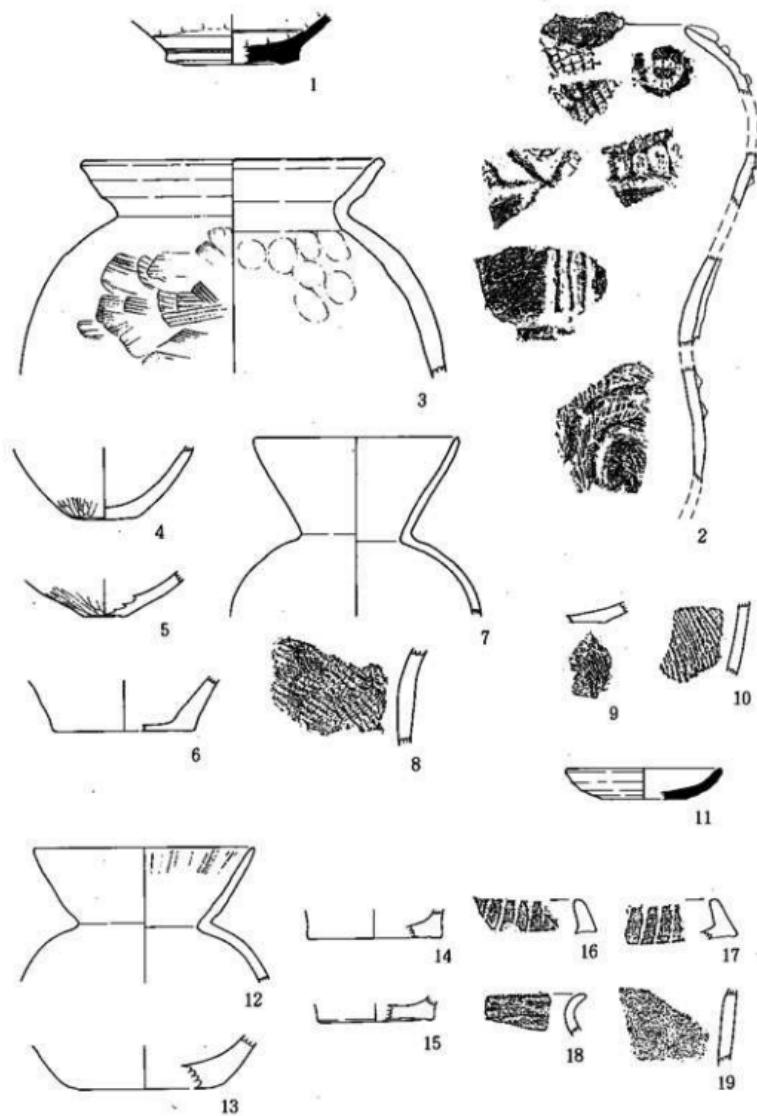


第16図 KGB土坑125・128、溝址1、23・25号住居址出土遺物

(F125-1, F128-2, 溝1-3~5, 23住6, 25住7・8)

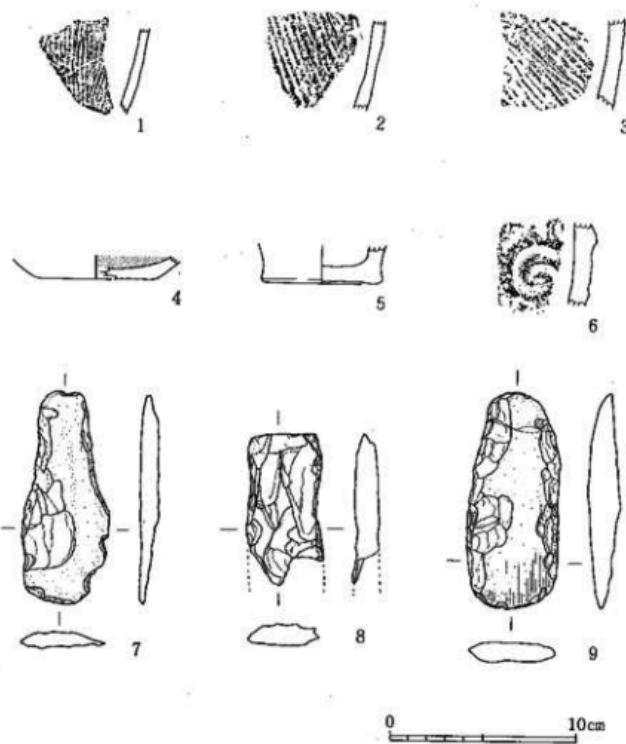


第17図 YTM 1~4号住居址出土土器 (1住-1, 2住2~7, 3住8~11, 4住12~15)



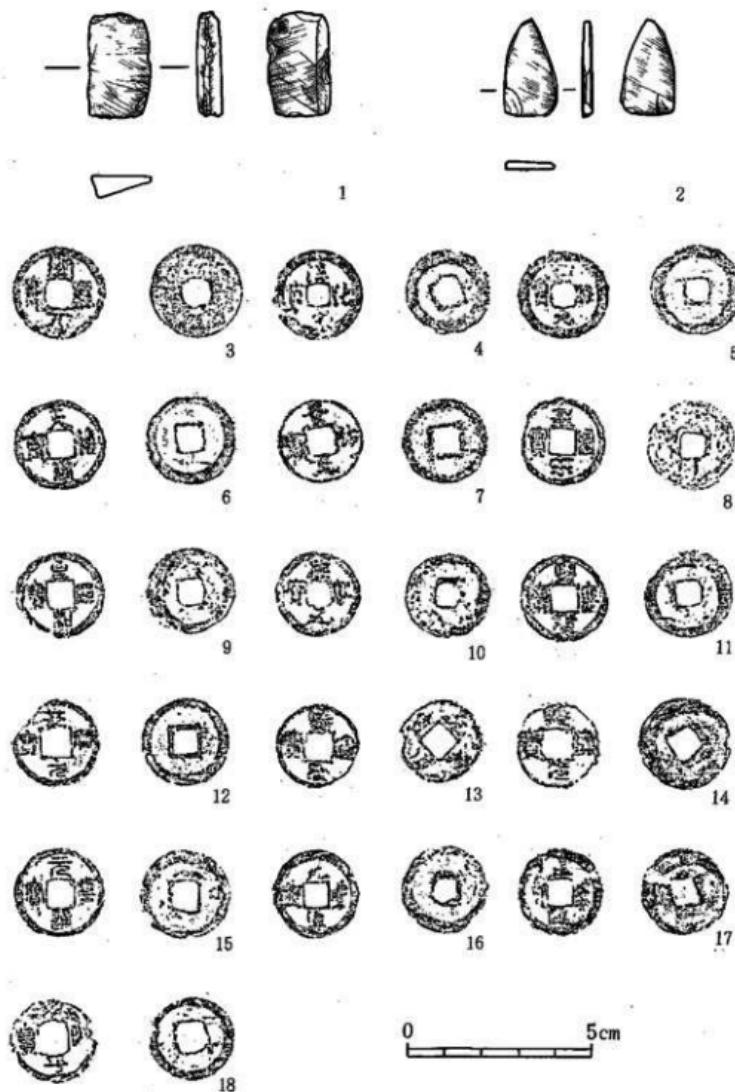
第18図 YTM 5・7～9・12号住居址出土土器
(5住1・2, 7住3～8, 8住9・10, 9住11, 12住12～19)

0 10cm



第19図 YTM 2・7・15号住居址、溝2号、遺構外出土遺物

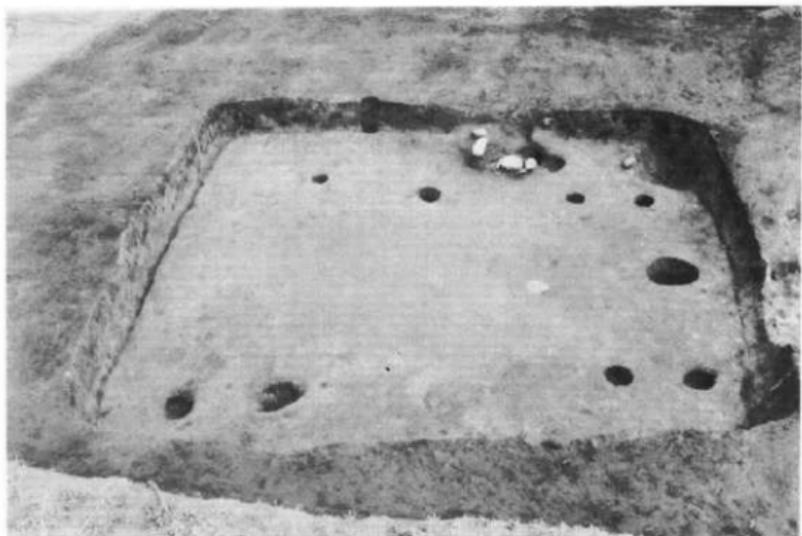
(2住7、7住8・9、15住1～3、溝2・4、遺構外5・6)



第20図 YTM 7・12号住居址、土坑1出土遺物 (7住1, 12住2, F1-3~18)

図 版

図版 3



K G B 23号住居址

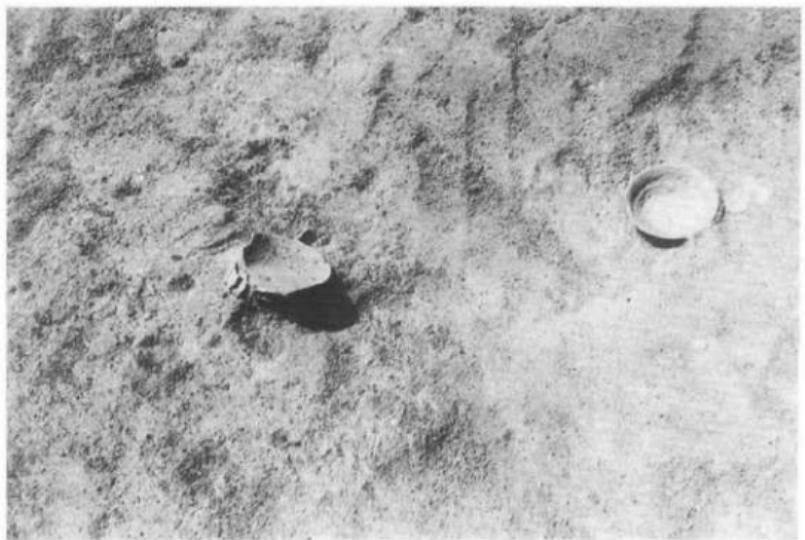


K G B 23号住居址カマド

図版 4



K G B 23号住居址カマド断面



K G B 23号住居址土器出土状態

図版 5

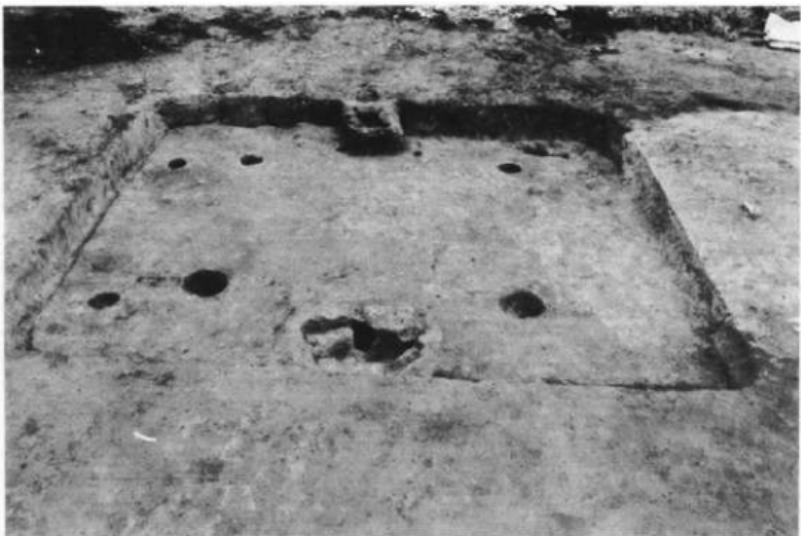


K G B 24号住居址, 土坑115 (東から)



K G B 24号住居址, 土坑115 (西から)

図版 6

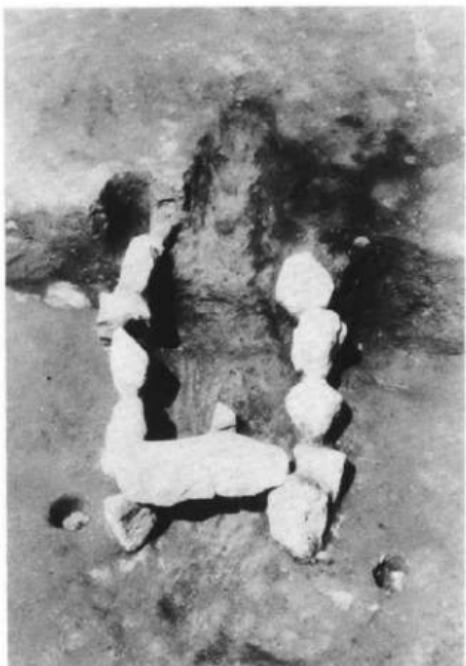


K G B 25号住居址



K G B 25号住居址カマド

図版 7

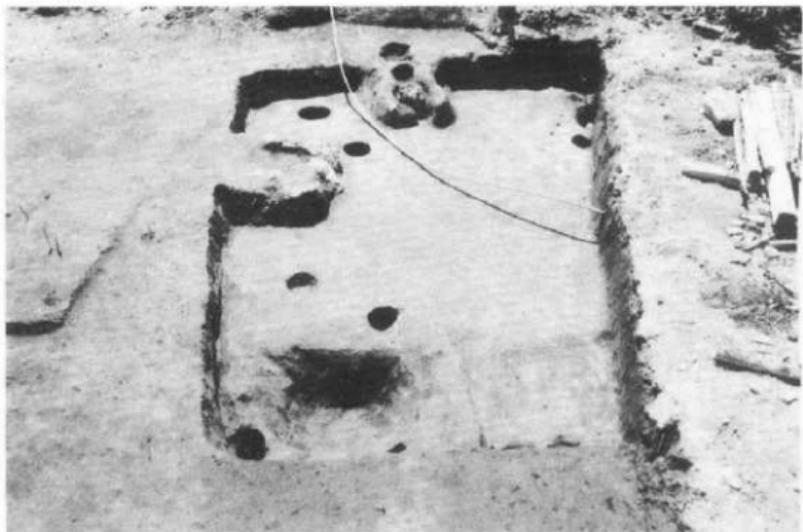


K G B 25号住居址カマド石芯

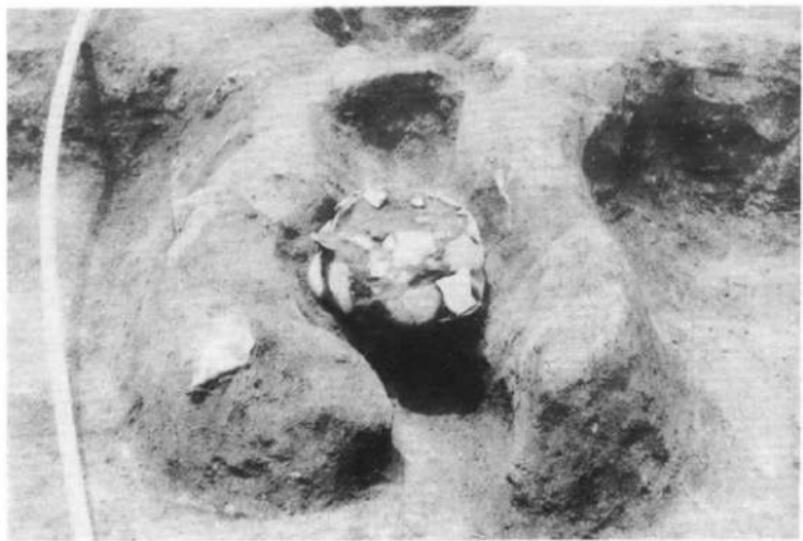


K G B 25号住居址土器出土状態

図版 8



K G B 26号住居址



K G B 26号住居址 カマフ

図版 9

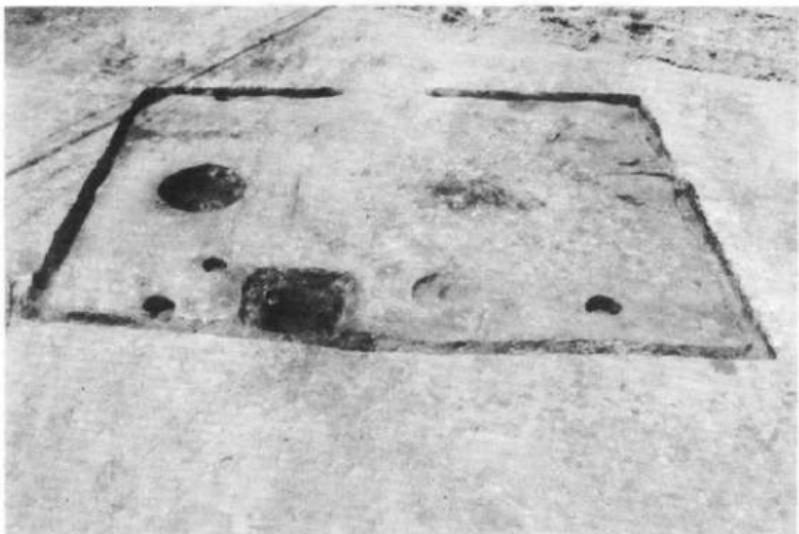
カマド断面



土器出土状態



図版10

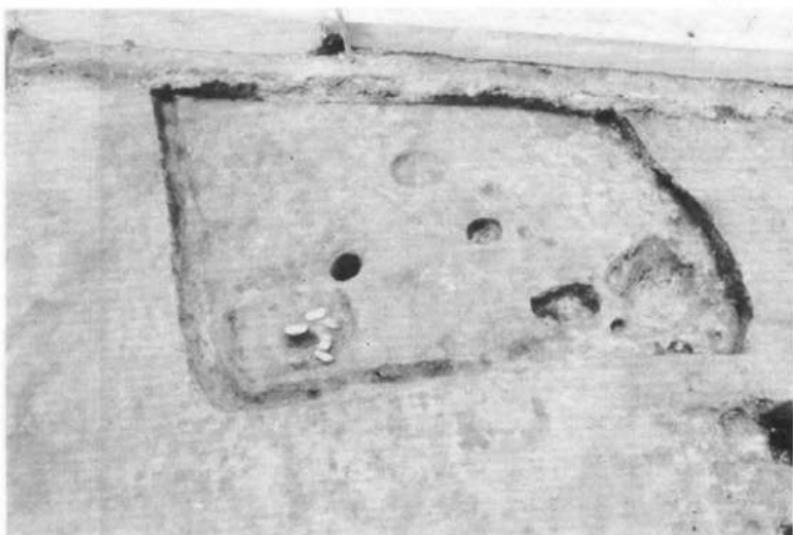


K G B 27号住居址



K G B 27号住居址土器出土状態

図版11

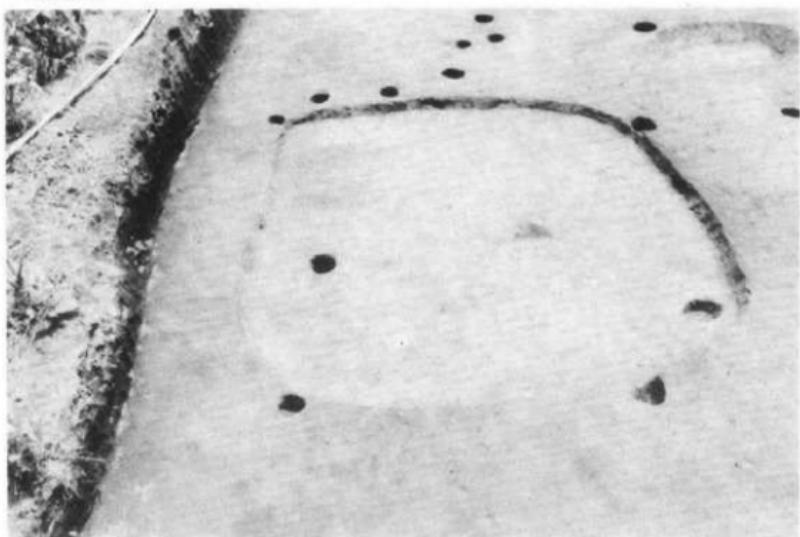


K G B 28号住居址

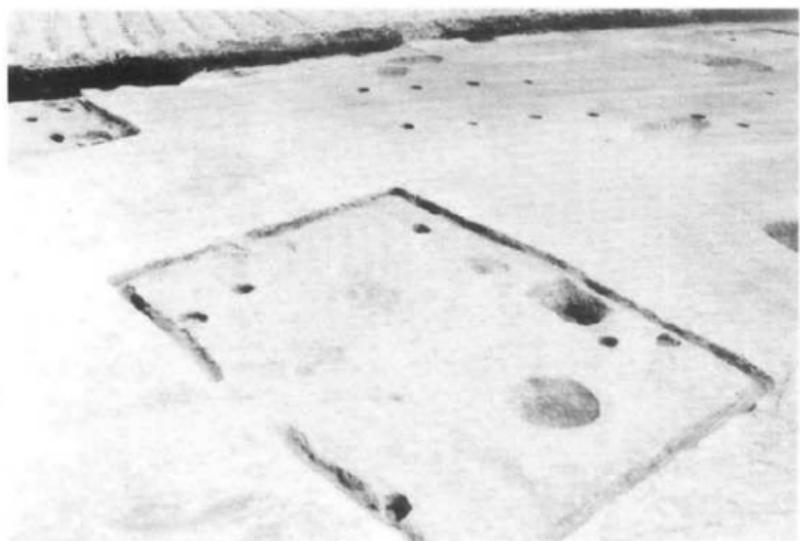


K G B 29号住居址，土坑127・128

図版12

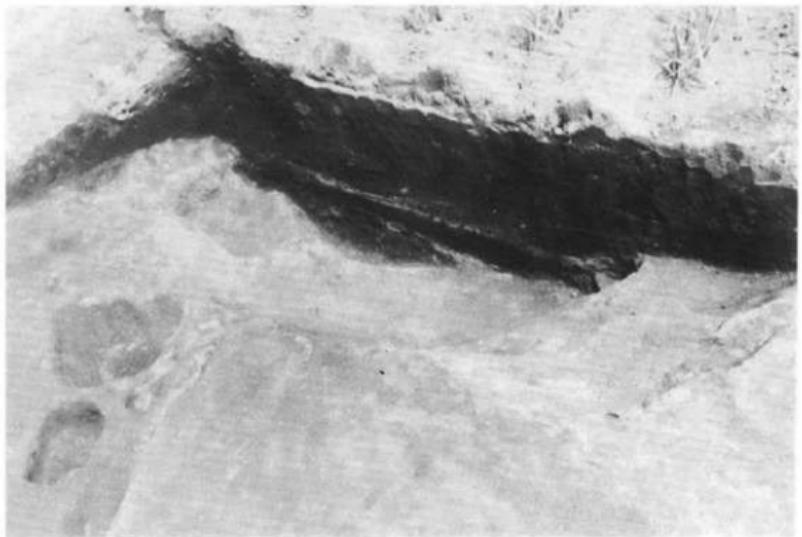


K G B 30号住居址



K G B 27号住居址，建物址 1

図版13



K G B 堅穴遺構 1



K G B ロームマウンド 1

図版14

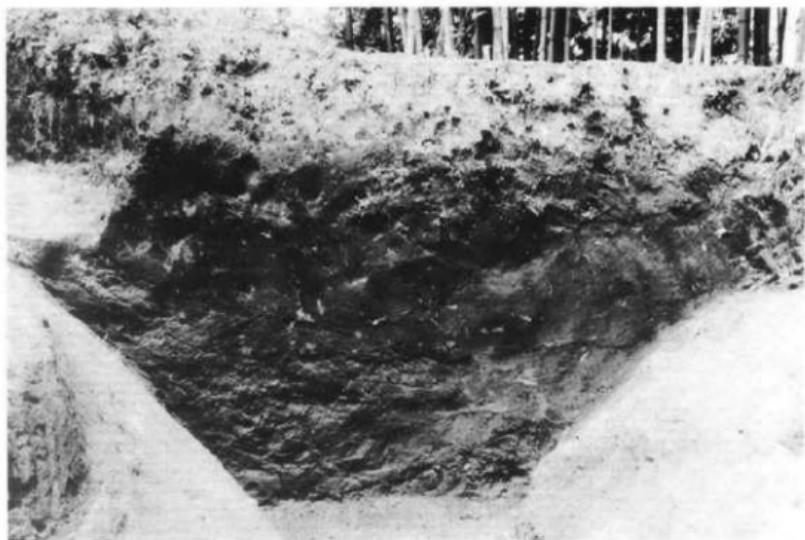


K G B 溝址 1 (北から)



K G B 溝址 1 屈曲部 (南から)

図版15

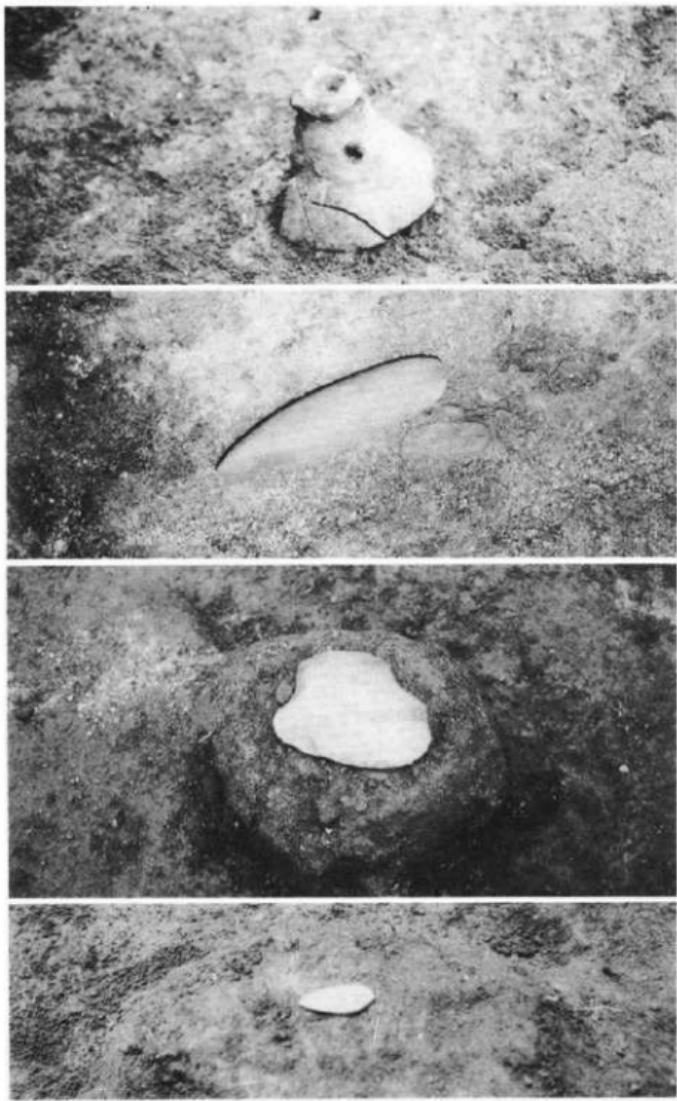


K G B 溝址 I 断面（北端）



K G B 溝址 I 断面（中央付近）

図版16



K G B 溝址 1 遺物出土状態

図版17



八幡面遺跡（東から）

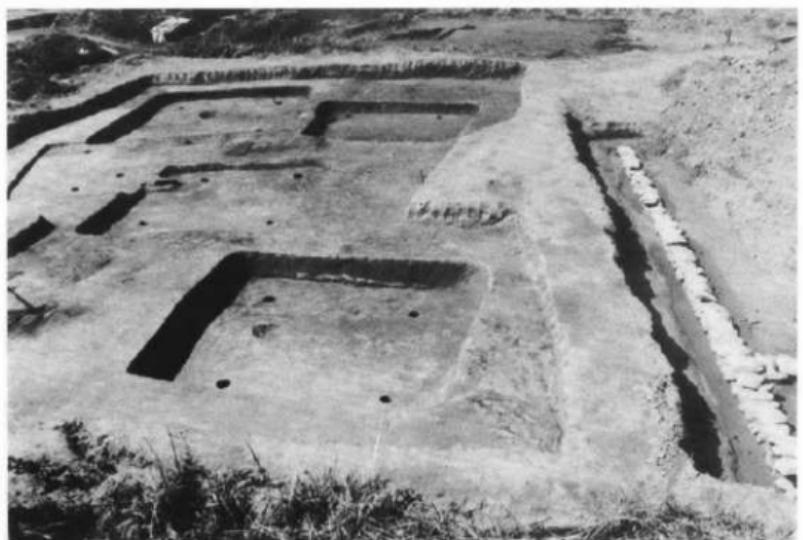


八幡面遺跡（西から）

図版18

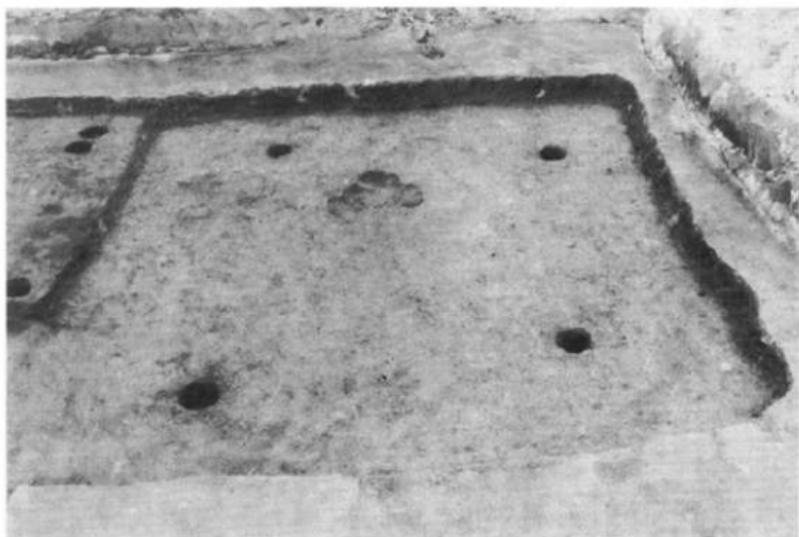


YTM遺構分布状況（西から）

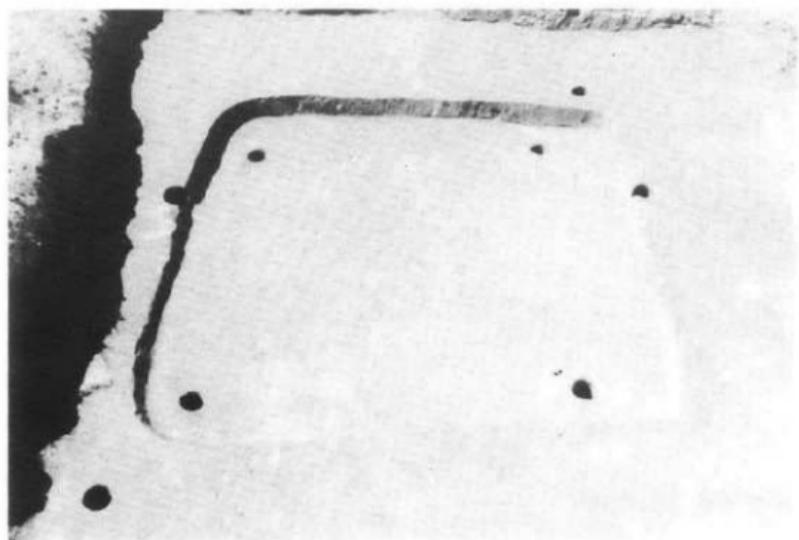


YTM遺構分布状況（北から）

図版19

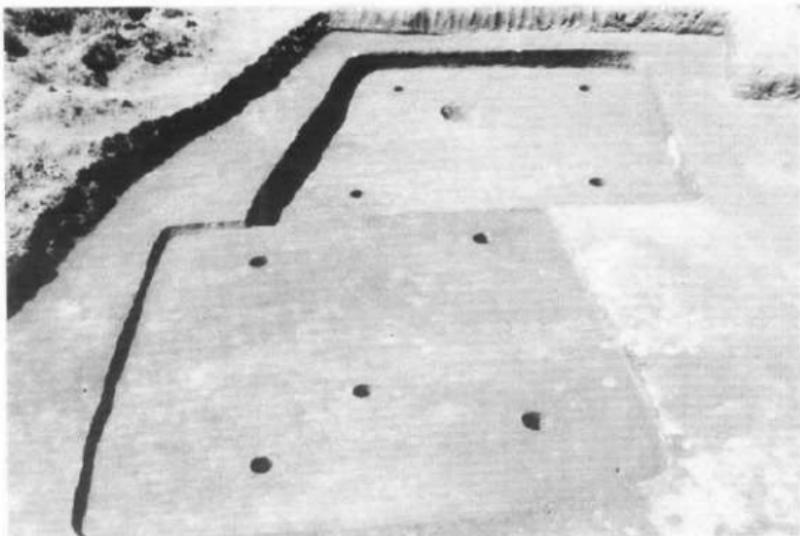


YTM 2号住居址

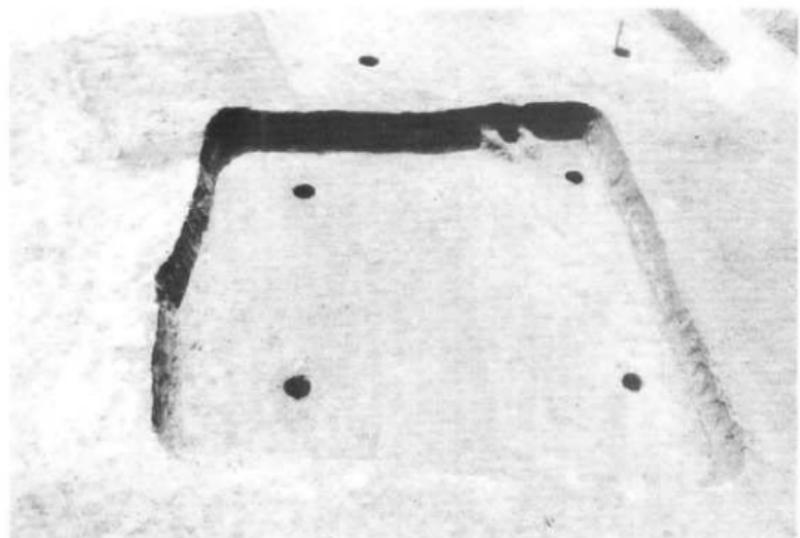


YTM 6号住居址

図版20

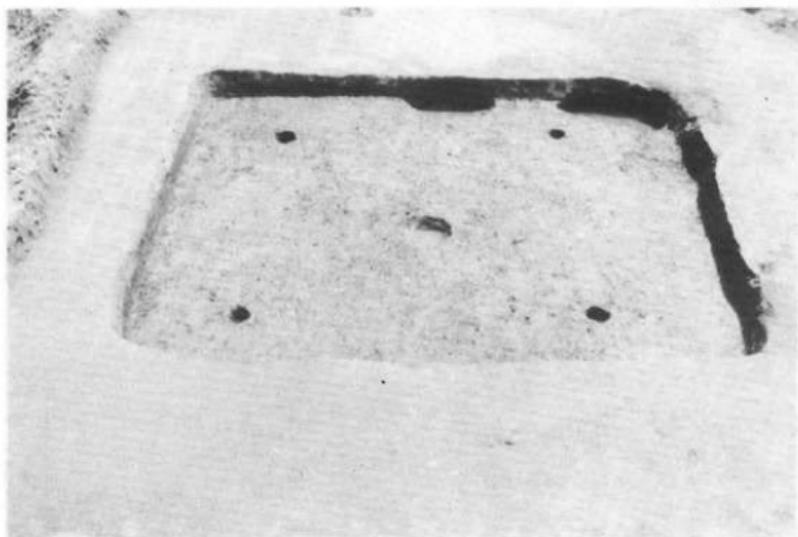


Y T M 5 • 8号住居址



Y T M 11号住居址

図版21

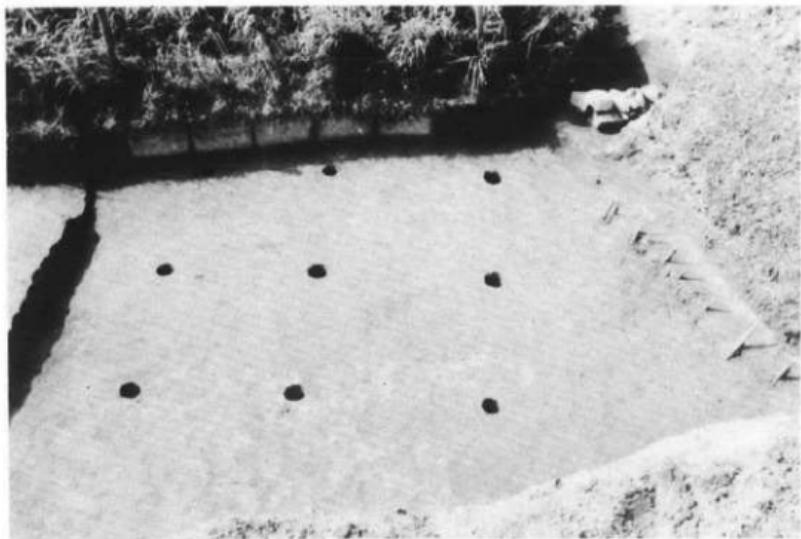


Y T M 12号住居址



Y T M 13・14号住居址

図版22

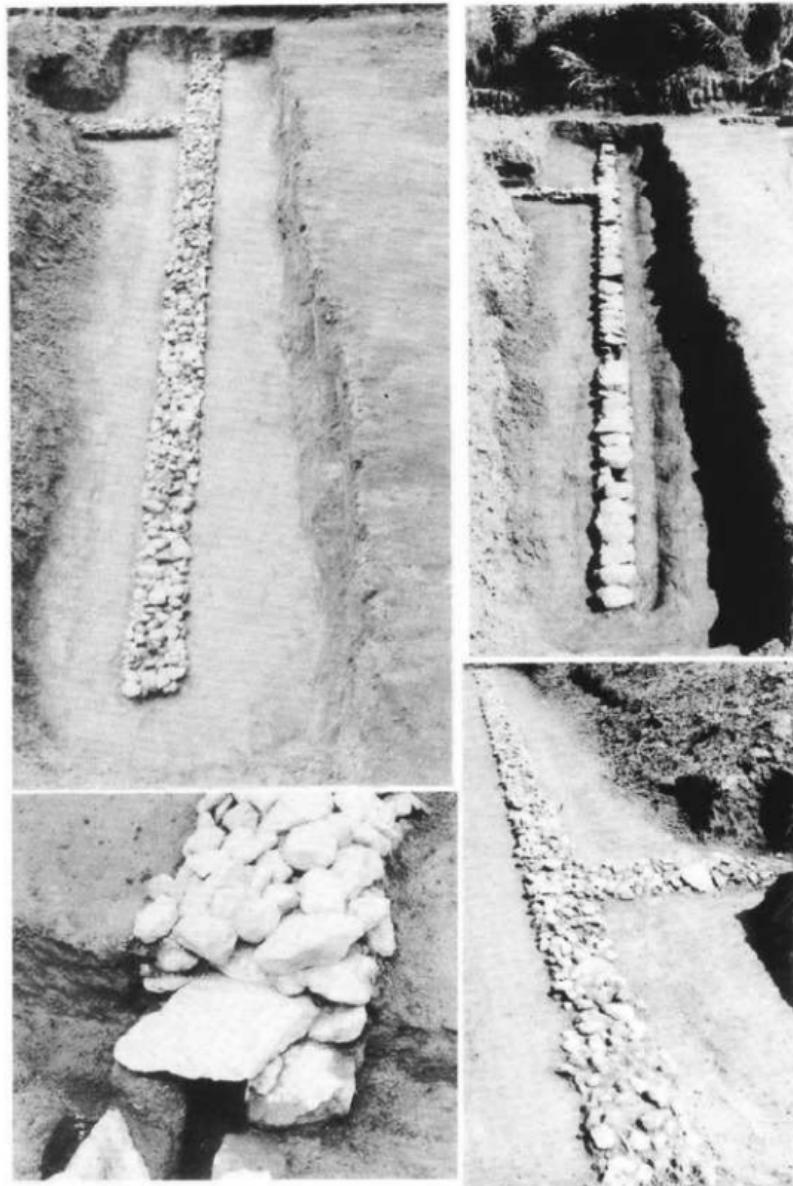


Y T M 振立柱建物址 1, 杭列 1



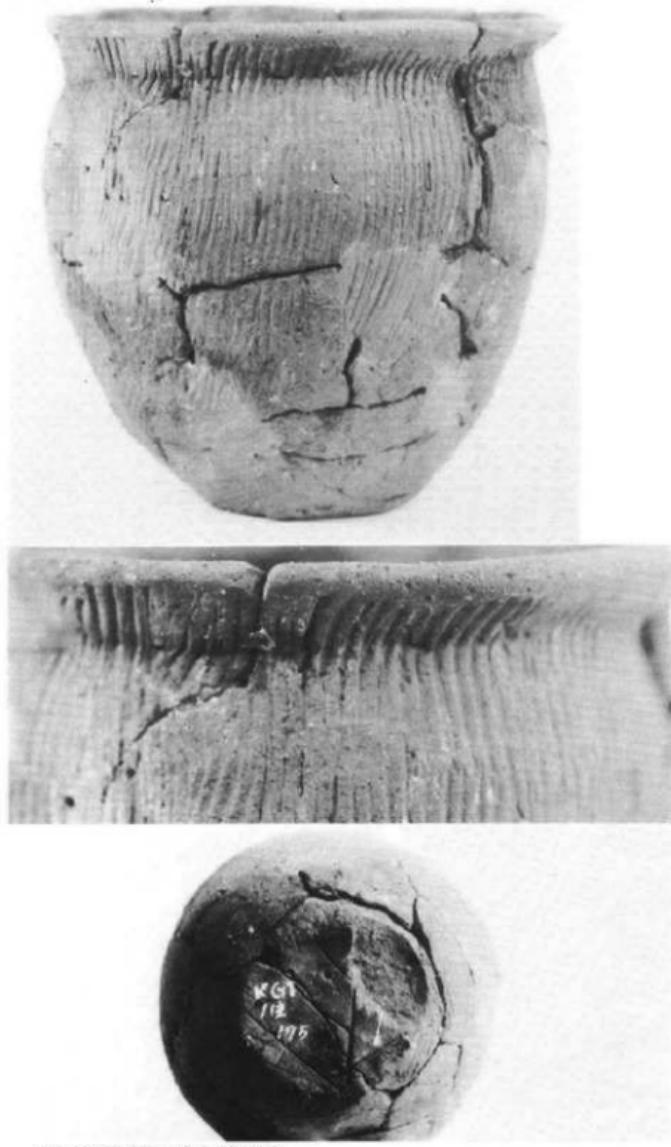
Y T M 土坑 1 古钱出土状態

図版23



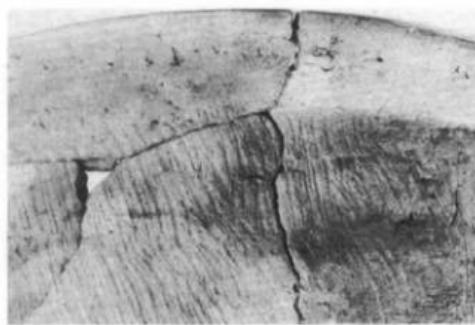
YTM暗渠排水 I

図版24

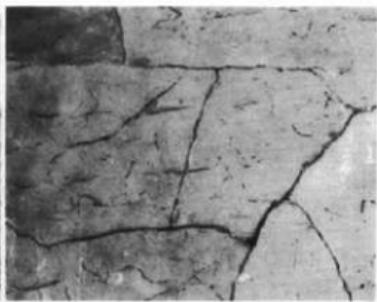


K G B 23号住居址出土土器

図版25



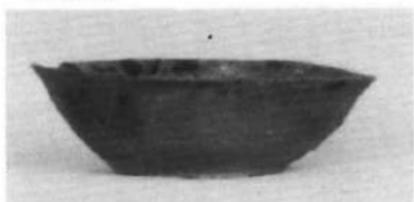
外面カキ目



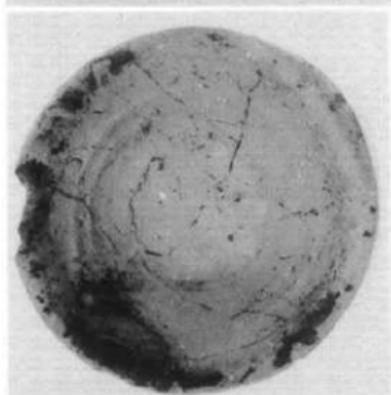
内面接合痕

K G B 2号住居址出土土師器甕

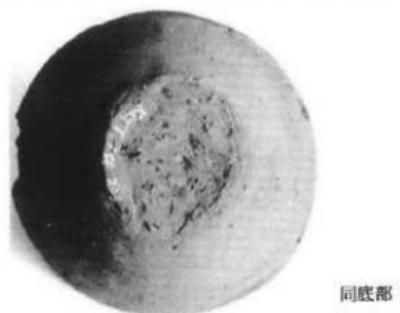
図版26



須恵器坏



同内面



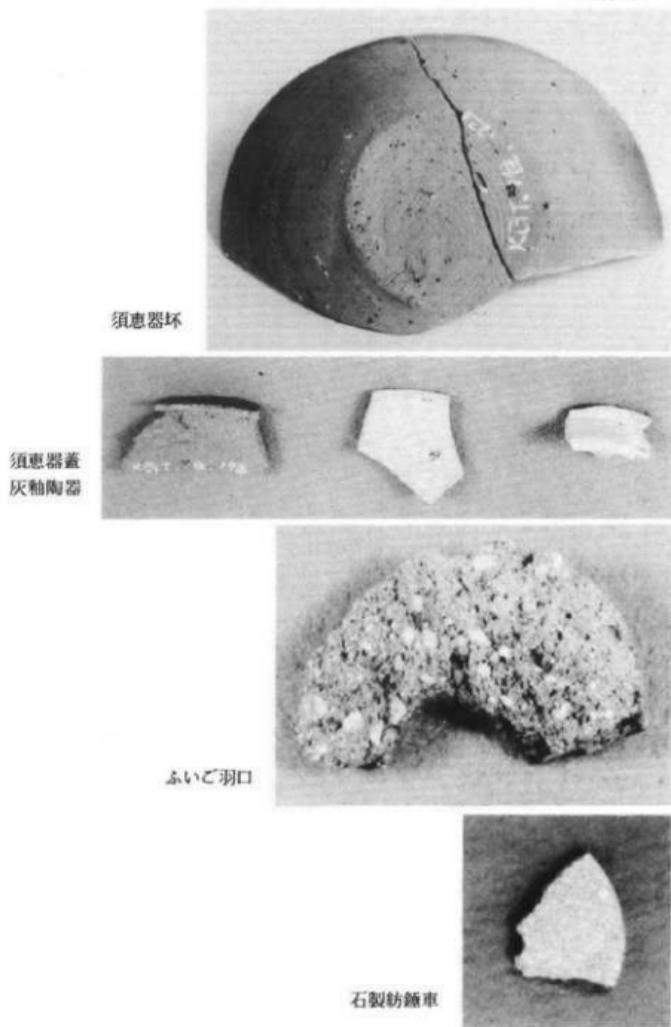
同底部



須恵器坏

K G B 23号住居址出土遺物

図版27



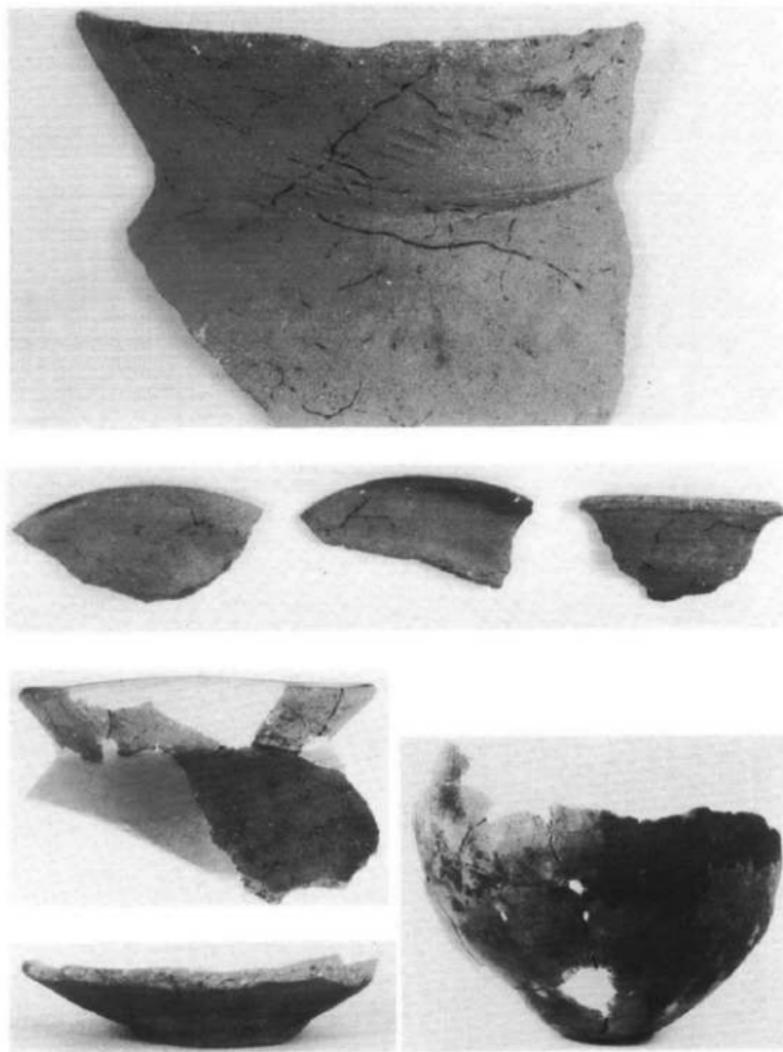
K G B 23号住居址出土遺物

図版28



K G B 25号住居址出土土器裏

図版29



K G B 25号住居址出土土師器要

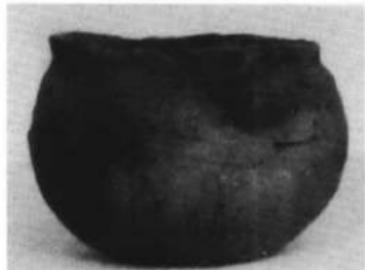
図版30



壺



小型壺



小型壺

K G B25号住居址出土土器

図版31



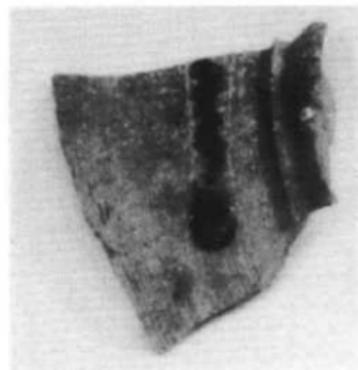
土師器坏



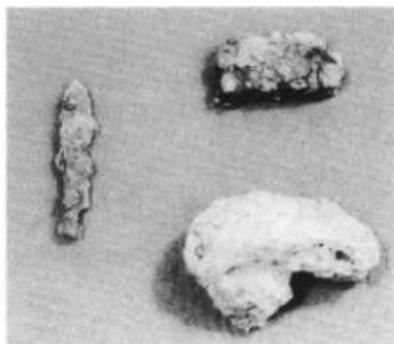
土師器坏



土師器高坏



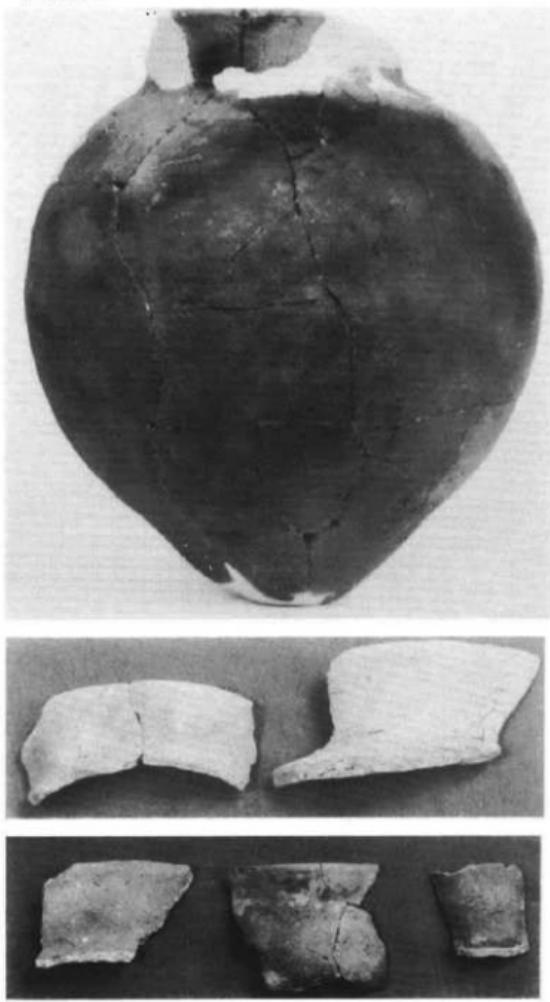
須恵器樽型底



鐵鎌他

K G B 25号住居址出土遺物

図版32



K G B 26号住居址出土土器

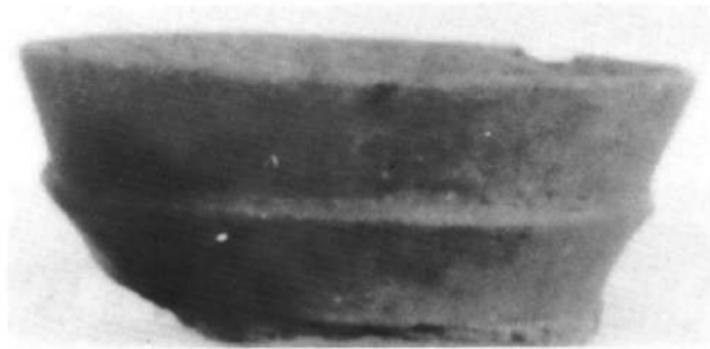
図版33



小型壺



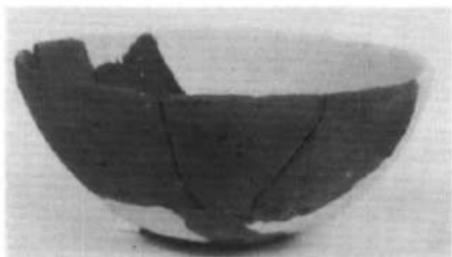
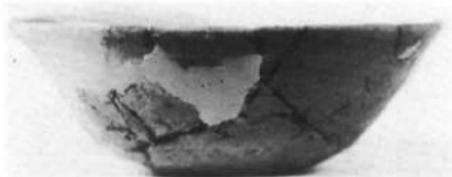
小型壺



壺

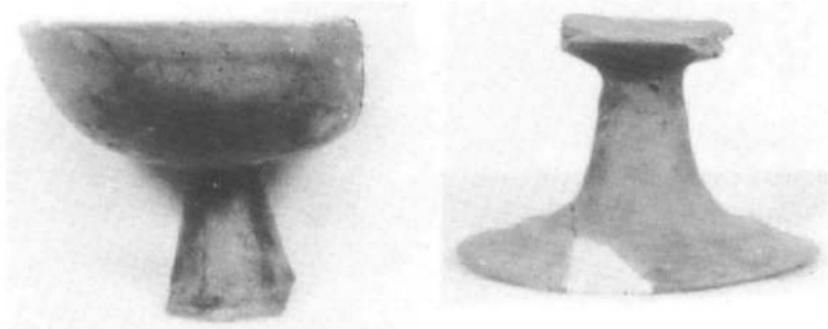
K G B 26号住居址出土土師器

図版34



K G B 26号住居址出土土器器坏

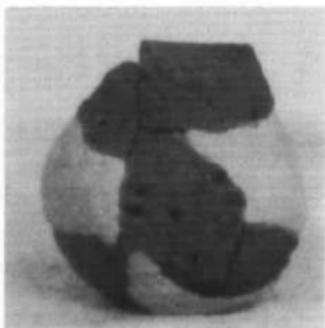
図版35



土師器高坏



土師器高坏



土師器小型壺



縄文時代土器片



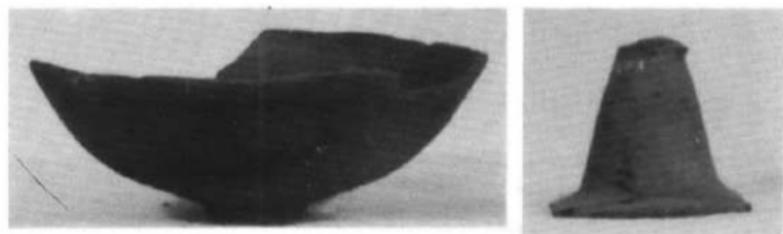
縄文時代晚期土器

K G B 26号住居址出土遺物

図版36



鉢



高环



小型壺

K G B 27号住居址出土土師器

図版37



30号住居址出土石器



土坑114出土遺物



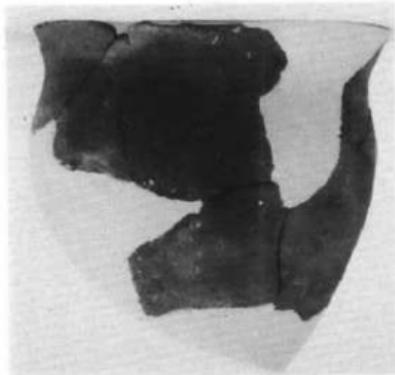
土坑125出土遺物



土坑132出土遺物

K G B 出土遺物

図版38



壺



壺



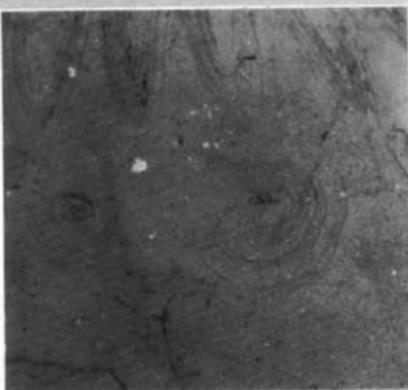
壺

K G B 溝址 1 出土土器

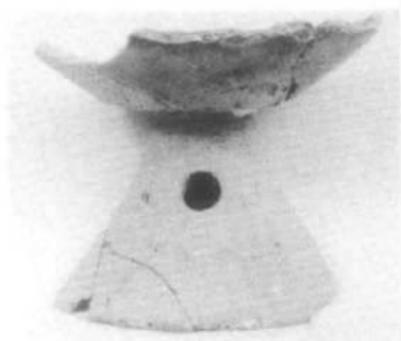
図版39



壺



壺文様

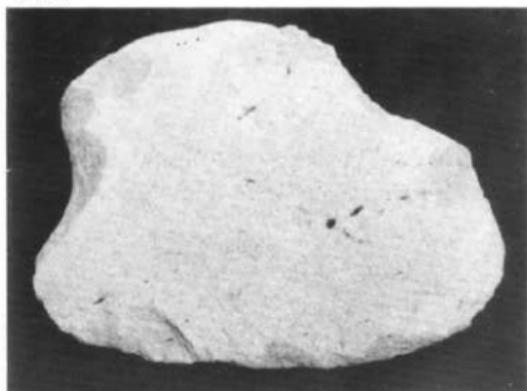


高环



小型壺

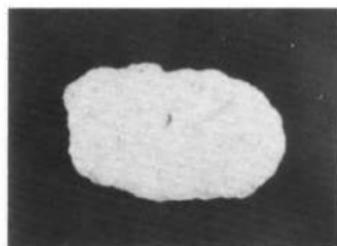
図版40



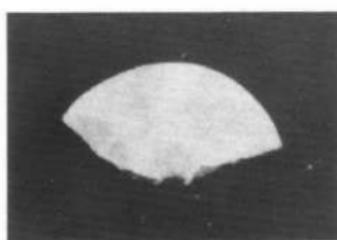
有肩肩状石器



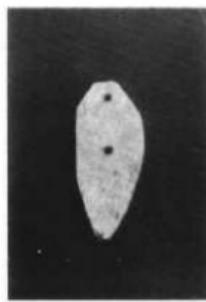
磨製石斧



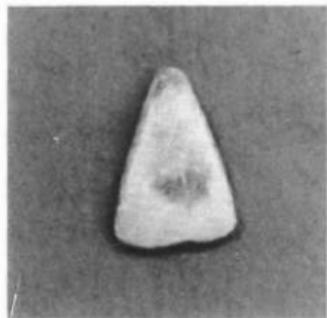
横刃形石器



紡錘車

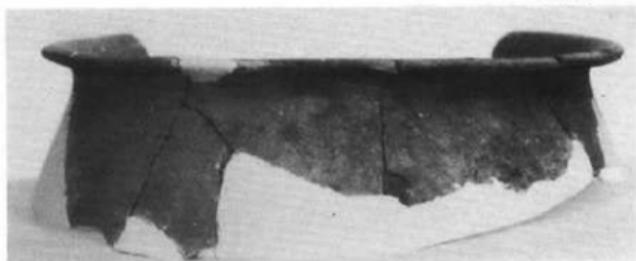


溝址1出土石製模造品

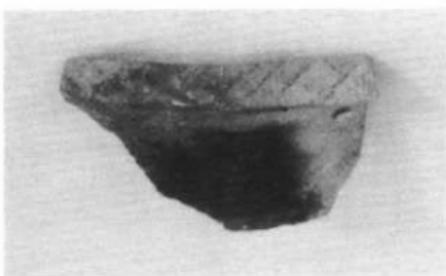


12号住居址出土磨製石斧

図版41



盤



壺



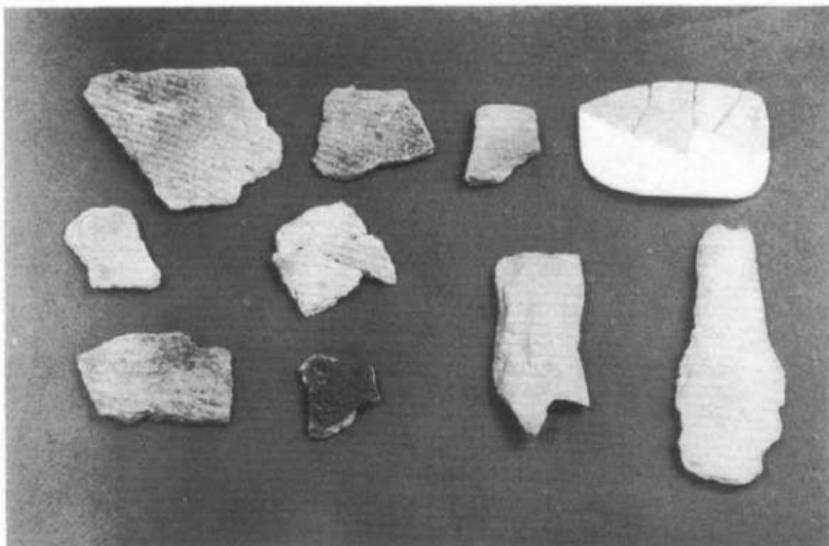
高环



壺

K G B用地外出土土器

图版42



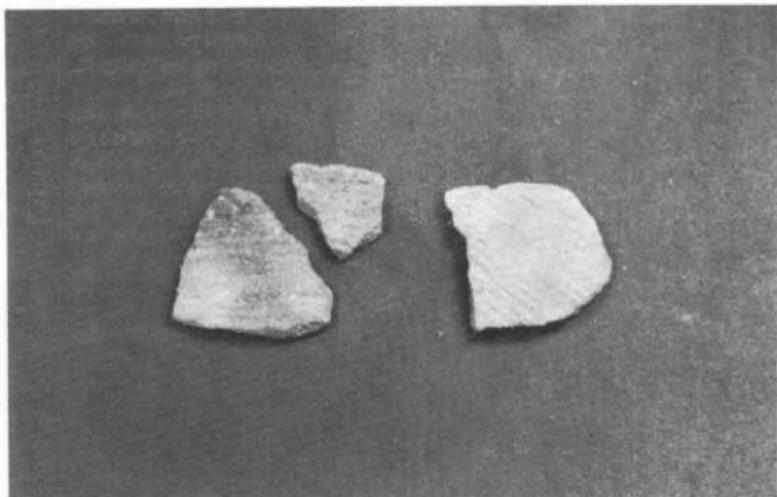
2号住居址



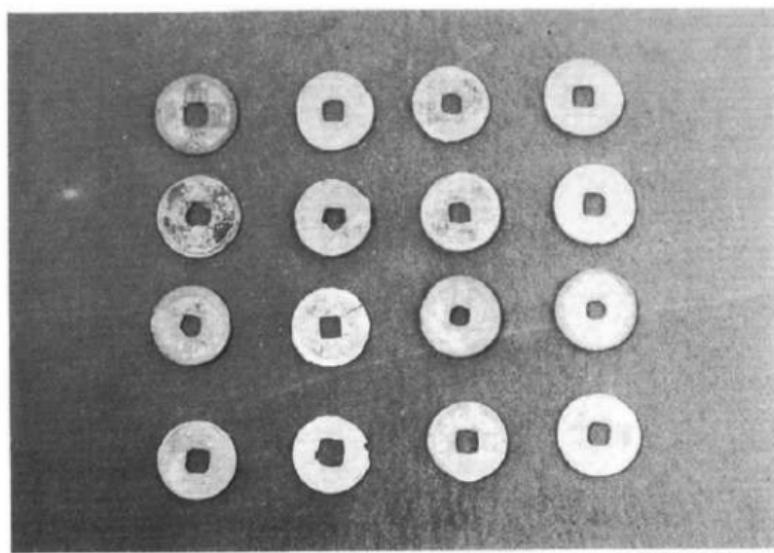
7号住居址

YTM出土遗物

図版43



15号住居址出土土器



土坑1出土古銭

Y T M 出土遺物

図版44



調査風景

図版45



拡張作業



拡張作業



道構検出作業

作業風景

図版46



遺構掘下げ作業風景

小垣外・八幡面遺跡

一般国道153号飯田バイパス(1工区)
用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和63年2月20日 印刷

昭和63年2月29日 発行

発 行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯 田 市 教 育 委 員 会
印 刷 秀 文 社

小垣外八幡面遺跡

1988